

331. 34-So45ウ



1200500737332

1.34
45



始



331.34
S045

社會主義
經濟學概論

橫濱專門學校教授
園田實著

真光社刊

10

16
10

橫濱專門學校教授

園田實著

社會主義經濟學概論

眞光社刊



983
221

社會主義經濟學概論 目次

緒論 永久平和の社會的條件 一頁

第一章 帝國主義戰爭の本質 一頁

第二章 第二次世界悲劇の發生過程 一四頁

第一編 社會階級の本質 三三頁

第一章 階級發生の社會的地盤 三三頁

一 希臘哲學に於ける階級觀 二 中世スコラ哲學の階級

目次

28
30
840

24
30
720
840
1500

24
15
168
24
408

観……三 十八世紀に於ける階級観の進展……四 科學的階級観……五 資本主義社會に於ける基本階級と派生階級

第二章 私有財産權の社會的根據と其の將來……………三〇頁

- 一 私有財産權の絶對性……………二 資本主義と私有財産權 三
- 私有財産權諸學說……………四 資本主義の一般的危機

第三章 貧困の二様相……………五頁

- 一 ドストエフスキ―に現れたる貧困の二種類……………二 絶對貧乏と相對貧乏……………三 貧民哲學者賀川豐彦氏……………四 貧困の個人的原因と社會的原因……………五 貧困と文化……………五 資本主義末期に於ける民衆の慘苦……………六 流血革命か無血革命か

第二編 社會主義の生産及び分配方法……………七頁

第一章 無政府主義……………七頁

- 一 ウイリアム・ゴドウインの出現……………二 カントの國家觀とゴドウイン……………三 ブルードン……………三 スチルネルとバクニンの學說……………四 クロボトキンの相互扶助論……………五 マルキストと無政府主義……………六 無政府主義のテロ化……………六 サンヂカリズムの運動

第二章 國家社會主義……………九六頁

- 一 獨逸歴史學派の出現……………二 リスト及ロツシャ―の資本

主義經濟學否定……三 クニース……四 國家社會主義の功績と弱點

第三章 空想社會主義……………一〇七頁

- 一 ロバート・オーウエンの出現……二 温情主義の破綻……
- 三 共産村の實驗……四 フーリエの學說と經驗

第四章 科學的社會主義……………一三三頁

- 一 科學的社會主義の出發點……二 唯物史觀の公式……
- 三 レーニン及ヒルファアーチングの資本主義分析……四 マルクス集中學說の鐵の如き進行

第五章 ギルド社會主義……………一四八頁

- 一 ギルド社會主義の誕生とイギリス労働組合……二 ギルド社會主義の論據……三 コオルの學說……四 協同組合運動とギルド社會主義……四 ギルド社會主義の暴力革命否定

第三編 社會主義經濟學と資本主義經濟學と

の理論闘争……………一六四頁

第一章 賃銀労働の本質に関する論争……………一六四頁

- 一 賃労働の自然概念と歴史的概念……二 賃銀基金説の展開……三 社會主義學說の展開

第二章 利潤の本質に関する論争……………二九五頁

- 一 リカルドの利潤観……………二
- 二 ボエーム・バウエルクの利潤観……………三
- 三 シユムペーターの利潤観……………四
- 四 社會法學派の利潤観……………五
- 五 ボエーム・バウエルクのマルクス批判……………六
- 六 ヒルファーデングの應戦……………七
- 七 社會法學派のマルクス餘剩價值説批判……………八
- 八 マツクス・ウエトバーの解釋……………

一 第四編 資本主義の運命と社會革命……………二五三頁

第一章 國民協同體と社會主義……………二五三頁

- 一 社會法と經濟との關係……………二
- 二 社會主義の到來……………

第二章 社會革命と民族の個性……………二六三頁

- 一 社會主義社會の特徴……………二
- 二 社會主義と創造的衝動……………
- 三 民族の個性と社會主義……………
- 四 天皇制と社會主義……………

序 文

若かりし日、賀川豊彦氏力作、『精神運動と社會運動』並びに『人間建築と人間美』に底知れぬ感激を覚え、遂に氏を神戸の貧民窟に訪ね、その敬虔な人格と崇高な事業を目のあたりに見て、強く、心を衝かれてから、私のいばらの道は、運命的に決定されてしまったのである。未來の住友王國の支配者、金融資本の覇者を夢みたる青年野望家は、こゝに新らしい生涯の方向に向つて歩き始めたのであつた。東大での恩師、新渡邊稻造先生に決意を語り、激勵の言葉を浴びながら、森の都仙臺に向つて、渺茫たる研學の世界を志し、意氣軒昂、東都を立つてから、二十有餘年の歲月は、奔湍の如く流れた。

其の間、全世界は、資本主義の一般的危機の段階に突入した。然しその空前の混亂と流動

とを貫いて、驚くべき大建築、即ち蘇聯の社會構造の巨大な魔の様な建築が、のしかゝる様な權威を以て、吾等の目に浮び上つて來たのである。世界資本主義の大混亂、空前の大恐慌、壓倒的失業地獄の展開、救ふ可らざる帝國主義の激突の中に、新らしい歴史の構圖は、着々として、繰りひろげられつゝあつた。あらゆる偏見と呪咀が、それに對して、投げかけられて居るにも拘はらず、鐵の如き必然性を以て進行する資本主義社會の運動法則を體驗した吾等は、今一度偏見を去つて、新らしい角度から、マルクス唯物史觀を見直す必要に迫られた。唯物史觀の名稱を聞いただけで、始めから、或る穢らはしいもの、嫌惡すべきものを連想し、十字架を切る主觀的態度から解放されて、唯物史觀の中に深く沈潜し、唯物史觀は、何を教示し、何を語らんとしたかを冷靜に究明する必要が起つた。マルクスが、感情的に拒否しつづけ、しかも尙、逃がれんとして、逃がるゝことが出來なかつた處の人倫共同のイデアが、史觀の彼方から、その光影を投じつゝあるにあらざるか。唯物史觀は、ヘーゲル史觀の轉倒として立ち得るか。マルクスが提唱した『鐵の如き必然性を以て進行する資本主義の運動法則』は、終局に於て、人格の自律性、或は、自由の觀念と相容れざる關係に立つものであるか等々の問題は、次々に、吾等に重大なる解決を迫つて來たのである。これが、私をして二十年間を唯物史觀とシタムラーの社會法學との研究に没頭せしむるに至つた主要な動機であつた。

ところが、現實の歴史的經驗は、蘇聯の社會主義をして、新らしい綜合の過程に進展せしむるに至つた。即ち、宗教の復活と協同組合のすばらしい發展である。

資本主義に於ける宗教が、階級闘争のイデオロギー的形態に外ならぬことを鋭く指摘して、レーニンは、曾て、次の如く語つた『宗教とは、他人のための永久の勞働によつて、窮乏と孤立によつて壓し潰されてゐる人民大衆に、到るところで、あらゆる場所で、のしかゝつてゐる精神的抑壓の一種である。搾取者との闘争に於ける被搾取階級の無力は、自然との闘争における野蠻人の無力が、神や惡魔や奇蹟等に對する信仰を生むのと同様に、必然的によりよき來世に對する信仰を生む』。かくて、レーニンに於ては、宗教は、被搾取者の、恐怖の心理に源を發し、搾取者が、民衆の反抗心を癡醉する一種の毒酒に外ならなかつた。この辛辣骨を刺す宗教批判に對して、幾何の既成宗教が、俯仰天地に恥ぢざる堂々たる態度を以て、

尙耐え得るであらうか。資本主義を擁護し、これと結合した腐蝕宗教が、目ざめたプロレタリア階級に解け難い敵意を抱かしむるに至つたことは、自ら播いた種子を刈り取る運命に外ならない。かゝる反省なき既成宗教が、社會革命の過程で、一應、資本主義とその没落の運命を共にするであらうことは、また自然でなければならぬ。

生まれ！ 階級關係が終熄した後に於ても、人間の歴史から宗教それ自體の根を斷ち切ることはできるものではなかつた。正義と言ひ、自由と云ひ、眞理と言ふ。更に共同と云ひ、發展と云ふ。これらは、價值創造の法則、合目的統一の見地であつて、物理的因果法則とは、全然異なる觀念を含蓄して居る。吾等は、階級社會に於ける宗教の虚偽の姿を曝露することはできたが、同時に、虚偽なき世界への根強い要求を拒否する權利はなかつた。階級社會の暗澹たる利害鬭争の様相を白日の下に曝らすことはできた。然し、利害鬭争なき、ために、なき純愛の社會への衝動を抑制すべき義務は有たなかつた。人間共同生活の根本的合法性は、人間の社會的存在の構造が、それに依つて批判さるべき或根本的統一に求めるべきものである。アダムスミスの意識に反映した資本主義の社會は、利己的動機の自由解放によつて、

見えざる共同の調和を招來せんとして、歴史の過程に上つた。然しカールマルクスの意識に反映した資本主義の社會は、も早調和を失つた實質上破綻せる形骸的な共同社會としての様相を曝露する段階に達して居た。生産力の桎梏と化した資本主義生産關係は、も早人間共同生活の合法則性を運載する能力を失つたものとして、始めて批判の對象となるのである。かくて、吾等は歴史に現れた封建的組織、資本主義的組織の現實的な法的秩序が、それによつて批判さるべき法の法を目標に進動しつゝあるを知つた。現實法は、現實の共同現象の進動する論理的出發點であるから、吾等は、新らしい共同現象を生起せしむるために、新らしい根本の共同秩序を創造する自由を與へられて居る。一人の人格意志の内容が他の人格意志の專斷の犠牲に供せられてならないとするシタムラーの自由^{liberty}に意志する人間の共同生活の理念は、マルクスが、これを回避せんとして回避することができなかつた處の歴史の最後の國として、人類の航路を照すのである。正義と愛と平等の支配するイエスの「神の國」の理念は、世界の各民族、各國家の規範として、永劫の歴史の指針として現はれてくるのである。蘇聯の共產主義下に於ける協同組合の驚異的發展に就ても、同様のことが言へる。社會主

義組織が、眞に人格の本質、創造性に立脚した弾力性ある共同体たり得るためには、協同組合、即ち、あらゆる機能組合と消費者組合とを内部に包攝した社會機構でなければならなかつた。これに依つて、社會主義の社會は、一種の凝固した偶像形態とならずして、人格の創造性に對して通路を與へられ、無限の成長をつゞける形態となることのできた。

日本の天皇制に就ても、また、然りである。天皇制がカントの「目的王國」、シタムラーの「自由に意志する人間の共同社會」の理念に對して、一つの家族的實踐的形態として語られる時には、それは、美しい共同關係の理念でこそあれ、排撃さるべき一物を含まぬのである。天皇は、協同社會の人格的全體表徴として、社會主義體制と毫も相刺するものではない。それどころか目的の王國への偉大なる推進力となることができる。天皇は、國民と共に、カントの目的の王國に向つて實踐し給ふ共同體の指導者、最高の教育的道德的責任者たることができる。天皇に集中する國民感情は、天皇が、これを世界の平和と文化運動とに教導される時には、如何なる日本の大統領よりも、強大なる教育力を以て、國民に迫まることができ、祖國と大君の理念のためには、死して悔いなき若櫻達でさへも、天皇の教示一度徹底せん

か、これを化して世界平和運動に突進する勇敢なる人類愛の殉教者ステパノとすることができ、かゝる事態を看取せずして、彼等の純情を蹂躪し、反動運動を危惧し、戦々兢兢、教育の門を若き魂に閉鎖せんとする自信なき、愛なき、パリサイに墮せる日本の教育界は、禍なる哉、ペスタロツチの教育、札幌クラークの教育、新島の教育、自己を殺ろして青年の魂を熱愛する教育生れよ！。今日、日本教育界の貧困を歎くものは、蓋し私一人ではあるまい。

とは言へ、天皇制の危険は、其の理念が、現實の政治體制の中に凝固し、天皇が絶対神それ自體として、偶像化される時發生する。一切の政治的反動運動並びに民衆の精神的抑壓の道具として作用し、資本主義に於ける、官僚、軍閥、財閥の擁護の機關と化するに至つて、天皇の理念は、國民協同體の實質より遊離し、反動勢力の傀儡と化するのである。神祕なヴェールに蔽はれた恐怖すべき資本主義維持のための現神に化せられる危険を、今や天皇自ら、『現神にあらす』と否定し給ふたことによつて、一個の使命を運載する人格として、國民協同體の中に復歸し給ふたのである。今より後、國民と共に文化創造の最高の育成者、教育的道德的^{最高}責任者として、政治道德の根源を養い、現實直下の政治闘争とその責任とよりは

解放され給ふべきである。

日本は、今や、暴力革命の寸前にある。帝國主義戦争の悲惨な犠牲者として、數千萬の國民は、飢餓線を彷徨し、惡質インフレーションに地獄の慘苦を嘗めつゝある。しかし、暴力革命が無血革命かの問題は、結局、無血革命に合法的通路を開くか否かの問題に歸着するのである。不幸にして、不道德なる反動階級が、合理的な協同形態を求める國民の衝動の流れを、権力や陰謀政治で堰き止める時は、嵩まる河流が、突如として堰を破壊する如くこの種の暴力を轉覆する暴力革命は必然に爆發するのである。

本書が、現實の革命過程に於て、慘憺たる流血革命へ落下する危険から國民を救ひ、無血革命の軌道に社會を進行せしむるための一助となることができれば、著者の望外の欣びとするところである。

一九四六年五月十五日

著 者

緒論 永久平和の社會的條件

第一章 帝國主義戦争の本質

第一次世界戦争終了後、全世界の混亂と人心の動搖は、空前の極致に達した。ケーンズベ
ルヒの大哲人が「永久平和論 *Zum ewigen Frieden*」を發表して、全世界を聳動させてから、
凡そ二五〇年が経過して居る。「人間の自然状態—無法状態—に於ては、人々は、法的に行
動せずして、衝動的に行動するから、其の活動の圏域が互に相侵犯しあつて、暴力の争ひを
呼び起す、暴力に訴ふる結果は、結局、一方の人が無制限の自由のために他方の人の自由が蹂
躪せられ、目的自體としての後者の品位は、毀損せられ、後者は前者のために單に手段とし

てのみ用ゐられるといふことに了り、共同生活の理念に戻り、道德の根本原理に背くやうに
なる。⁽¹⁾斯くて、カントに於ては、法は、眞の自由を擁護せんがため、自由の相互侵犯を調停

し、自由實現の妨害を抑制するを任務とする。私法的關係は、自然狀態即ち無國家狀態に於ても成立はするが、併しそれは單に豫備的であつて、それが完全になるには、國家を持たねばならぬ。國家は、法の完全なる實現のための機關として實踐理性によつて要請せらるるのである。⁽²⁾斯く、カントは、國家の本質を、人格の自由を保護するため成立すると解釋するから、國家の強制は、一部の專斷で行ふべきでなく、成員自身の共同立法によつて行ふべきであると主張した。此の國家理論を演繹して、彼は、國際間の戰爭は、個人間の戰爭と同じく、暴力により相手の意志を曲げ、人格の自由を破壊するから、道徳的惡であると斷定した。それでは各國家間の自然狀態を防止するため、カントは、國際國家の實現を要望したかと思ふと、決して左様ではない。彼によれば、國際國家は、各々の國家が自主權をもつて居る間は、矛盾に陥る。それぞれの國家は、現實の狀態では、一つの集中された外部的強權下に立つて居ないから、國際法ができて、何等の拘束を有せず、其の基礎頗る薄弱たるを免れぬ。そこで、國際紛議を法に訴へ、一切の戰爭を未然に防止するためには、國際聯盟を組織せねばならぬ。それぞれの國家は、その獨立自由の立場を、世界王國や或強國によつて抑制され

ることなく、しかも、相聯合して、國際法をして、實際の效力を發揮せしむる基礎條件とならしめねばならぬ。

カントの平和論の論旨を要約すると、國內には、自由擁護を主眼とする共和制を布き、世界的には、統一國家を避けて國際聯盟を組織せねばならぬと云ふことになる。それでは、永遠的平和は、如實に人類の間に其の安全な姿を現し得るか、問ふとカントのこれに對する答へは、全然否定的とは言はれなくても消極的である。『理性的存在者として、人間は凡ての人の自由を制限する法律を要求するが、併し其の利己的⁽³⁾的傾向性は、その自由を濫用して機會だに許すならば、自己のみを其の法則の拘束より除外せんことを求むるやうに常に彼を誘惑する。…斯くて法が、純粹に、安全に威力を發揮するところの社會の實現は不可能である。』⁽³⁾そこで、人類のなし得べき最大のことは、永久の平和の理想に接近して行くと云ふだけのことである。けれども、この理想あるが故に、たとへ人間は、利己的衝動のため鬭争や戰爭状態を惹起しても、やがて正義と平和の道に引戻される。人間のできることは、此の理想の純粹且つ安全なる實現でなくして、それに向つての不斷の接近である。

それでは、永久的平和への一步一步の接近は、人間に保證されて居るか。この問題に對するカントの答へは、今度は、甚しく樂天的に變化する。永久的平和は、神の倫理命令として吾等の意識に與へられて居るばかりでなく、自然或は神の攝理は、吾等を促して此の方向に向はしめる。

吾々人類の意識には、戦争を終熄せしむべしと云ふ斷言命令が與へられて居る。その完全なる實現は、永久に達すべからざる理念であるとするも、それに向つて、不斷に努力せよと云ふ規範を掲げることは、決して矛盾ではない。と云ふのは、斯く努力することが吾等の義務であるからである。

併し、カントに依れば、この倫理意識と共に、自然は、人間をして、永遠的平和に向つて進ましめるやうに強制するので、其の實證を求むれば、次の三つの事實に要約される。

『(一) 先づ自然は、地球をば到る處に人間が生活し得る様に設備する。氷洋に沿うた亘寒の荒地にもなほ苔を生ぜしめ、之を以て「オステイアック」又は「サモエード」族の榮養となり、又其の櫓を牽くべき馴鹿を飼養する。更にまた其の水中には海豹、海馬、鯨等を棲息

せしめて、住民に其の肉によつて食糧を、其の脂肪によつて溫暖と燈明とを供給する。……斯くて自然は地球上到るところを人間が棲息し得るやうに設備し、而して更に(二)斯く設備されたる各地に人類を分布せんが爲めに、之に賦與したる好戰的傾向性を利用する。(三)……此戰爭欲は又おのづから人間を結付けて、法が或る程度に於て權威を有するところの團體、即ち幼稚なる形に於ける國家を形造らしめる。何となれば、一民族と對抗して其の壓迫を脱がれ、若くは優勝の地位に立たんがためには、強固なる團結を形造らねばならぬ。而して團結中最強固なるものは、一切の成員に洩れなく服従を要求するところの集合意志に基ける團結、即ち國家であるからである。』⁽⁴⁾

神は、何故に始めから劃一的な世界國家として、地球上の人類を統一しなかつたかの問題に對して、カントは、『劃一的専制主義は人民の活力と自由の精神とを滅殺し、道義心を麻痺せしめ、終局は無政府状態を誘致するからである』と答へる。こんな不祥な結果を招致せざらんがため、神は始めより人類を異なる域に分散せしめ、異なる言語と異なる宗教とを與へる。而して地球上に分散した人間を、その分散されたそれぞれの特色のまゝ世界的に聯合せしめん

がため、商業精神、即ち利己的欲望を利用する。換言すれば、全世界が機械的に融合するのではなく、平和な有機的聯合を結成することを促進せんがため、通商貿易を發展せしめ、國際戰爭不可能の傾向をつくり出すのである、云々。

カントの志操の純潔高尚なる、其の所論の雄勁剴切なる、たしかに衆人の暗冥を打破して全世界に、其の歸趨すべき方針を指示したと云ふことができる。カントは、「萬人に永久的平和」への一步一步の接近が、神の倫理命令であることを教へた。又世界の有機的結合の優越性に付て、吾等の迷夢を覺破した。その火の如き平和への一言一語は、萬人の心を感動せしむるに充分であつた。

とは言へ、カントの自然的傾向に就ての所論は、果して其の後の世界の現實の動向と矛盾しなかつたか。人は、自分の希望することと、現實の地盤とを混同する傾向がある。商業精神は、眞に世界貿易を促進せしむることにより、國際平和への拍車たる機能を發揮したであらうか。

なる程、世界貿易が著るしく進捗し、國際分業が飛躍した十九世紀の平和運動は、俄に、

各國民の間に、目ざましい勢ひを以て擡頭し初めた。一八八九年六月に英米獨佛伊等の國會議員等が始めて、巴里に第一回の組織的集會を開催し、仲裁裁判制度の設立に就て討議した。やがて、世界平和局がベルンに建立され、一八九九年になると、ヘーグに萬國平和會議が開かれ、大小二十有餘の國々の代表者が、各國の軍備縮小の問題と仲裁裁判によつて、戰爭を終熄せしむるの議案を討議した。産業平和の聲は全世界の國民をゆり動かして、やがて、乳と蜜の流れる日も遠くはあるまじと思はれた。

近代社會は、封建社會の封鎖關係を打破し、自足經濟を、更に廣汎なる國家及び世界の地盤の上に引延したのである故、交通が頻繁となるに従ひ、各國産業の相互依存は愈々緊密を加へ、益々平和を必要とするやうである。インドの綿、ブラジルの珈琲、濠洲の羊毛、英國の石炭、綿製品、米國の機械、佛蘭西の奢侈品等々それぞれの國が、その氣候、その民族性に適當する生産に従事し得るのは、國際貿易發達の賜物であるから、其の意味から云うても、必然に近代社會は、國際平和を基調とするかの如く見える。處が現實は、全然その外見とは、反對に、大規模の世界大戰が過去に吾等に經驗されたのみならず、第二次世界戰爭の悲劇が、

此の度、待ち設けて居たのは、如何なる特殊の事情が其處に潜在して居たのであらうか。

封建社會が崩壊し、近代史が其の幕を、花々しく切つて落した其の當初に於て、恐らくカントの永久的平和は、其の確乎不動の地盤の上に立脚して居たと信ぜられたかも知れぬ。一切の文化運動や政治運動が平和への方針を取り、デモクラシーが普及するに従ひ、軍備は、國民の重ぐるしい負擔と感ぜられ、國民怨嗟の的となつて、軍人は、時代錯誤の代表の如く冷視された、近代史は、其の發生過程に於て、觀念的に平和の白衣を纏ひ、軍備擴張を反動主義と輕蔑しながら、現實には戰爭破裂の方向へ押し流されて來たやうに思はれる。

それ故、一九一四年、奧太利の皇太子フェルヂナンド三世が、ボスニヤの一青年の兇刃に斃るゝや、歐洲の天地は、忽ち硝煙彈雨の慘劇場と化し、天日光暗く、地軸震ひ、數百萬の豺貅は、雲霞の如く山野に相對して、悲風凄然たる修羅場が大規模に展開された。此の戰爭のため、四千億圓の巨富が灰燼に歸し、九百九十萬人の人命が殺戮され、約二十萬人が手足をもちれた。(第一次世界悲劇の發生である)

近代戰爭の原因は、人間の精神に内在する鬭争本能に根ざして居ると云ふ説がある。ラッ

セルは云ふ。『人類の大部分は、調和よりも寧ろ衝突に奔らんとする衝動を有するもので、何か共同の敵に抵抗し、或は之を攻撃するに當りて始めて他と一致協同するを得べくある。：喧嘩して我を張らうとする衝動、反對に打克つて己が主張を貫徹するの快樂、是は、萬人に固有する性質である。打算した私利私慾の念などより、此の衝動、是が戰爭を生ずるもので、而して世界的國家を造り出だすの原因を惹起する。』

なる程此の衝動は、人間の本性に屬し、強烈なものに相違ないけれど、それが必然に戰爭に導かれねばならぬと云ふ理由は少しも存在しない。もし此の衝動が戰爭の必然的起因だとすれば、家庭の中にも、國民の内部にも戰爭状態が惹起されねばならない。一片の肉塊を一群れの犬の仲間に投じたとすれば、犬群は、忽ち咆哮搏噬して猛烈なる鬭争を惹き起すであらう。そこで目撃者が、『犬の食慾が鬭争の原因であつた』と斷定するならば、如何にも妥當らしく思はれるが、これは、事象の眞因を洞察し能はざる近視眼的判斷と稱せざるを得ない。たとへ犬に食慾のあることは、事實であるにしても、若し、肉塊が、犬の數に均分され、犬が外部の牽制に統御されたら、食慾は、たゞちに衝突の關係に迄導かれるものではない。現

今、國內の經濟組織は個人主義的自由鬭争に立脚して居ながら、それが遂に武力鬭争に迄導かれぬのは、より強大なる國法の規律が、此れを抑制して居るからである。若し、國法の抑制力が弱かつたとすれば、國內に於ける經濟的利害の衝突が、内亂にまで發展する可能性は潜在して居ると云ふべきであらう。

處で、國際上の關係になると事情は全然一變してくる。そこには、全世界の自然狀態を防止し、相互侵犯を調停すべき、唯一絶対の世界國家の主權なるものは存在しない。従つてその主權に總攬される總括的統治は期待されない。なる程、國際法は成立して居ても、これはそれぞれの國家の勢力均衡關係を唯一の土臺として安定して居るのであつて、此の均衡關係が破綻すると國際法は、一片の反古と化し、忽ち世界は戰爭勃發の危險に曝らされるのである。

然らば、現代に於て此の均衡關係は、如何にして成立し、如何にして崩壊するか。

資本主義發達の初期に於て、如何なる諸國よりも率先して、産業革命を斷行した國々に於ては、その商品を國境を越えて海外に持ち出さねばならぬ。此れを英國の例にとると、英國

は、その過剰品を世界各國に供給し、其の代り、此等の國々より原料品を輸入せんと努めた。然るにヨーロッパ諸國は、保護關稅に守られ、幼稚産業を發達さして、次第に英國の地位を脅し始めた。英國の資本家たる者、既往を回顧し將來に想倒する時、最早枕を高くして安眠をむさぼることはできなかつた。二十世紀の初頭には、世界は一種の獨占状態に入つた。第一、すべての先進國に於て、産業界は獨占化された。自由競争は、其の對蹠的たるカルテル、トラストの組織に變化した。第二、金融資本が成立した。即ち産業の有機的構成が高度になるに従つて、産業界は資金の融通を益々銀行に仰がねばならなくなる。銀行も自由競争から、獨占的大銀行の形態を取り、やがて産業界を支配するやうになる。産業界の獨占運動と銀行界の獨占運動とは、相互に反作用を及ぼしつゝ進展する。その結果大産業は、益々少數の金融コンツェルンに從屬し、その意志に支配されるやうになつて行く。第三、もてる國、先進國に於て、尨大な過剰資本が發生し、やがて、海外投資が熱狂的に始まつた。國內には、すでに産業界が獨占され、生産制限が行はれて居る故、蓄積された餘剰資本を投資する餘地に乏しい。國民生活の窮乏は極度に達して居る時でも、その必要とは無頓着に、資本は海外

に向つて流出する。その海外も文明の遙かに後れた後進國が選ばれる。後進國に於ては地代は遙かに低廉であり、質銀は土人の勞働力を安價に雇入れるから割合に安く、原料は豊富に手に入れることができる。投資された資本の利潤は頗る大きい。ところで、後進國に對しては、他の先進國の資本も同様に流入してくるから、後進國は、諸國資本の激烈な鬭争場面と化してくる。自國資本の獨占的地位も、次第に脅かされる。そこで海外投資は、結局後進國を自國の政治的支配圏内に捲きこまうとする意圖を起さしめ、それを植民地、半植民地たらしめんとして、先進國間の激烈な競争が展開する。しかし、やがて少數強國間に勢力均衡が生じ、全世界の領土は、これ等の列強の一時的妥協によつて、その勢力範圍が確定され、平和が辛うじて保持される。

然し、先進國でも、後進國でも、その資本主義の發達は、目ざましいと同時に、又不均等である。そこで列國勢力の從來の妥協關係は、外殻を保持しつつ、内部に於ては、大きな龜裂を生じ、やがて崩壞の時期に直面してくる。特に新興國のすさまじい發展は、從來の世界の分割を以て、天賦の權利と信じて居る先進國をして、危惧の念を抱かしめ、恰も神の樂園

を荒す惡鬼が出現したかの如き憎惡を抱かしめる。この際一寸した衝擊が與へられると、世界は、忽ち、武力鬭争の嵐に見舞はれる。

封建社會の戦争は、政治社會が武力を以て、産業社會—主として農業—を掠奪し、此れを隷屬化する意圖を以てなされたが、現代の戦争は、産業社會それ自體の必然的發展の動機に依つて行はれるのが特色である。

✓「そこで、近代戦は、産業界の獨占運動、その最高形態たる金融資本主義を母胎として、孕まれることを知る。換言すれば、金融資本主義の政治的表現にすぎないところの帝國主義こそ、世界平和を攪亂し、人類永遠の安定を轉覆する黒幕であることを知らなければならぬ。金融資本による特別利潤の追求、資本蓄積の衝動こそ、近代戦の内に潜む魂であり、動機である。」吾々は、帝國主義を批判するに當り、決して、それらの國々が誇示する意識的方面、「共榮圈」「世界平和」「正義戦」等の精神革命と混同してはならない。恰も、ある個人を批判する際に、その人が主觀的に自己自らを正義視してゐることを以て、その人の道德價値を決定してならないと同じである。人若し、眞に自己をあざむかすに世界平和を熱愛し、人類永

遠の幸福を念願するならば、顕敏な科學的良心と明徹な史的眼識を以て、現象の底に沈む帝國主義の本體を剔抉し、以て、國民をその毒牙から救ひ、相剋なき連帶社會を創造しなければならぬ。

ケーンズペルヒの大哲學者が憧憬した「永久平和」の夢は、彼が、それによつて具現されるであらうと期待した現代の財閥國家—その發展的形態たる帝國主義—の世界結合からは、實現されずして、社會民主的人倫協同體を實現せる國家間の國際聯合によつて、始めて實現されるであらう。

その時こそ勞働の社會的性質が、生産經營の私的性質、産業の獨占的性質によつて、何等の束縛を受けずに、産業平和の基礎條件となり、カントの世界平和の夢を實現する國際的連鎖となると確く信ずる。

朝永三十郎氏、カントの平和論、29頁、31頁、72頁

第二章 第二次世界悲劇の發生過程

自由競争は、十九世紀の末葉に於て、既に獨占の時代に達した。然し、國內に於ける自由競争の廢棄は、國際資本戰の激化に轉化し、自由競争の舞臺と範圍を擴大したに過ぎなかつた。それ故歐洲大戰前に於ける世界經濟 *Weltwirtschaft* とは、平和な地理的、自然的分業を土臺とした有無相通する關係の總稱ではなくして、反對に販路の角逐と、後進國への資本輸出の激烈な競争を包括したものであつた。とは言へ、商品の移動は、自由であり、「金」の國際的移轉も圓滑で、積極的な法的拘束は、存在しなかつた。自由主義は、其の根本に於て、まだ生動して居た。

然るに第一次世界戦争は、この自由主義を根本から轉覆した。(I)一九一四—一九一八年の間に、戦前の獨占的傾向が、急激に、異常なテンポで躍進せしめられた。交戦國は、その巨大なる軍需品を調達せんがため、組織的な巨大需要者として市場に現れた。それがために莫大なる貨幣を必要とし、銀行券の兌換を停止して、不換銀行券を増發した。戦争が繼續し、戦線が次第に擴大するに從ひ、軍需品の需要は、恐ろしく巨大となり、國內の供給では、間に合はなくなつてきて、植民地及び第三國へも供給を仰がねばならなくなつた。其の結果、

物價は異常に騰貴し、利潤は莫大な増加を見た。熱狂的な生産擴張が急速度で進展し、工場、鑛山、鐵道、船舶等のあらゆる生産部門が、全能力を發揮しても、到底及びも付かない程の活況を呈した。これは、一面に於て、大資本の集中と獨占到拍軍をかけた。(II)インフレーションのため物價が、恐ろしく騰貴した。世界戰爭中イギリスの物價指數は、戦前を一〇〇とすれば、一七〇%騰貴し、フランスは三〇〇%、日本は一三〇%、ドイツは三〇〇%、アメリカでは一二〇%、騰貴した。殊に農産物、重工業品の甚しい不足を惹き起し、銑鐵、鋼鐵、石炭、石油、等が老なる需要に追付かず、物價は、不均衡を反映して恐ろしく暴騰した。物價の騰貴に對して、交戦國の政府は、決して無關心であつたのではなかつた。屢々物價の最高價格を規定したりした。しかし、此の最高價格は、獨占利潤を毀損しない程度に變更しなければならなくなり、結局物價の自然騰貴を抑制する力はなかつた。これ等獨占の進展は、單に交戦諸國ばかりでなく、中立諸國にも起つた。交戦國からの殺到的註文は、既に戦前から存在した獨占的傾向を異常に強化した。

第一次戰爭終了は、廣汎なる領域に亘り、戦勝國には過剰生産を展開し、戦敗國には生産

の荒廢をもたらした。戰爭中の老なる需要は、戰爭終結と共にハタと止り、忽ち商品販路の杜絶となつた。尤も戰爭直後に於ては、過剰生産を前面に押し出さないため、資本家達の必死の努力が行はれ、引續き不換紙幣を増發して、過大信用を上塗りした。その上平和恢復に依り、世界貿易が活氣付くであらうと云ふ期待が、「一九一九年—一九二〇年」の空景氣を繼續せしめた。

處がこの彌縫策が、恰も、墨染めの衣が、身につけた鎧を蔽ひ切れなくなつた平清盛のやうに、最後にその正體を曝露したのが、一九二〇年であつた。同年三月、日本經濟社會は激烈な經濟恐慌に襲はれ、これは、全世界を席捲する巨浪と化し、アメリカを崩潰に導き、イギリスを襲ひ、餘瀾は怒つてヨーロッパ大陸を攪亂した。この恐慌の衝擊は、前例に無く深刻であつて、從來の景氣變動に見るが如き、循環性のもものと異り、次に循環してきたる景氣の中に、種々困難な問題か、解決されずにもちこされた。即ち世界經濟界は、一九二三年以後一應安定化の時期に入り、産業合理化が進捗し、爲替相場が安定し、商品輸出及び資本輸出が増加し、恰も一陽來復の春が訪れたかの如き様相を示した。

ベルサイユ平和條約の結果全然死地に陥つたドイツも、一九二三年の末、賠償委員會で作製されたドーズ案のお蔭で、通貨安定と豫算の均衡を取戻した。この案は、資本金四億マルクの發券銀行を新設し、その準備金として、英米が八億マルクの公債に應ずること、毎年の賠償支拂額を緩和することを骨子とした。其の他の世界列國も殆ど金本位制に復歸し、或は新たに金本位制を實施したため、世界經濟の基礎工事なり、金の自由移動が開始された。アメリカの資本はドイツに盛んに投資され、又日本、ハンガリー、ギリシヤ等へも融通され一九二五年以後には、イタリー、オランダ、スイス、スウェーデン、南アメリカ、バルカン方面へも流入した。

かくて、一九二三年以後、景氣上昇の傾向となつてきたにも拘はらず、其れが、從來の景氣恢復と異なる所以は、大量の失業群が、産業に吸収されるどころか、反て増大して居ることである。即ち、産業合理化に依る勞働生産力増加がすばらしいため、社會の總資本が、就職勞働の絶對數を増加し得る程に膨脹するを得なかつたことを意味する。

年 度	アメリカ	ドイツ	イギリス
一九二〇年	一、四〇萬人	三六萬人	五〇萬人
一九二一年	四、二七	一四	一、九三
一九二二年	三、四四	四	一、四三
一九二三年	一、五三	一、五二	一、二二

然るに、産業家達の景氣工作が、本格的になつた一九二四年から、失業者數は、反て、増大の一路をたどり、一九二七年には、すばらしい數字に達した。即ち同年アメリカの失業數は二百萬以上を突破し、ドイツは百十八萬、イギリスは百十九萬と云ふ數字を示した。

	アメリカ	ドイツ	イギリス
一九二四年	二、三一萬人	五三萬人	一、二六萬人
一九二五年	一、七七	一、四九	一、二四
一九二六年	一、六六	一、七四	一、四三
一九二七年	二、〇五	一、一八	一、一九

一九二九年(昭和四年)の、ニューヨーク取引所の株の大暴落を導火線とする世界經濟恐慌

は、産業合理化による固定的失業の外に、産業界の破綻と衰微に基因する失業を附加した。

年 度	アメリカ	ドイツ	イギリス
一九三〇年(十月)	九、〇〇萬人	四、〇〇萬人	三、〇〇萬人
一九三一年(六月)	九、四五	四、五二	一、四六
一九三二年(七月)	一〇、八二	五、五七	二、二七
一九三三年(八月)	一一、六四	四、八〇	二、一一

次に、第一次戦後の世界経済界の特徴は、商品の世界市場が甚しく狭隘化して来たことも現れる。商品の販賣が全然不可能と云ふわけではないが、恐ろしく困難になつて来て、あらゆる産業企業を執拗に悩まして居る。これが原因は、後進國或は植民地が、従來の工業原料の供給國たる段階より、工業國そのものに躍進し始めたため、イギリス其の他のヨーロッパ先進國或は本國より、工業品を購入することが少くなつてきたこと。又列國は、五年間に亘つた強靱な戦時經濟政策を平和の恢復と共に全然解除することが困難となり、安定期に於ても、戦前に見るが如き自由主義を基調とした國際貿易の政策へは、最早復歸することが許

されなくなつてきた。即ち外國よりの商品の流入に對しては高率の關稅障壁が建築されたため、世界市場が狭隘化し、販路の爭奪戦は、激甚を極めるに至つた。

次に又戦後の世界経済界の特徴は、市況の變動の期間と性質の上にも、くつきりと現れてきて居た。戦前の不況と比較すると、其の期間は、遙に長く、且つ深刻になつて居て、景氣が恢復しても變態的な膨脹を示して、社會全體としては、不活潑で、沈滞の色が、濃く宿つて居た。しかも不況と景氣の交替は、その期間に於ては、不景氣が壓倒的に長くなつて居た。

一九三三年のロンドン經濟會議は増加する世界の失業を救済し、深刻な不景氣を打開せんとする意圖を以て花々しく開催された。

不幸にして、フランス、ポーランド、エストニア、イタリア等の金本位國と、アメリカ側との利害の激突を來たして、妥協ならずして會は流産した。經濟會議崩壊後は、各國の、世界販路の爭奪は、愈々激甚を極め、資源地の分割、再分割の要求は空前に熾烈化した、資本の集中は激化し、獨占は強化され、世界各國の對立は尖鋭化した。かくて、第二次世界悲劇の深淵に向つて世界は奔流の如くに走つた。

第一編 社會階級の本質

第一章 階級發生の社會的地盤

階級鬭争の事實は、既に古代社會に於て發生して居る。イスラエル民族が埃及で奴隸化され、嚴酷な監視の下に和泥瓦作^{どろこねかわらづくり}及び諸田圃の耕作などの仕事にはたらしめられ、辛酸をなめ苦んで居たのを、偉人モーセが現れて遂に埃及を脱出し、乳と蜜の流れる祖國カナンに引率して歸つて行つたと云ふ記録が舊約聖書創世記に記載されてゐる。希臘時代の國家哲學は早くもこの問題を取上げ、社會内部の分裂摩擦を如何にして調和し、政治社會の諸機能と任務を諸々の階級に如何に分擔せしむべきかに重點を置いたようである。プラト^{プラト}の國家觀を見ても、國民を三段に分け、理性を代表するものは治者として立法權統治權を司り、氣概を代表するものは文武百官として法の實行に當らしめ、物欲を代表するものは人民として農業

及び工業に従事せしむるとして居る。とは言へ、當時の希臘の學者達は階級の發生を天賦の人間の才能の差異から生ずる區別だと考へて、歴史的な産物と考へて居なかつた。即ち社會的な生産構造に基礎を置く近代の階級觀と相去ること遙に遠いものがあつた。

斯る自然發生的階級觀に對して、中世紀には不熟ながら階級を社會分業と同視するスコラ哲學の階級觀が生れた。即ち希臘時代の學者が奴隸と市民の區別を天來の素質から來る自然の相違と觀たのに對し、中世紀の學者は社會的分業の機構が後天的に生みだしたものと觀たのである。分業に依つて種々の階層が分化して職業の區別が生れ、この職業から階級が分裂したと考へたのである。これは明らかに誤謬であるが、それでも階級を社會の構成物と觀た限りに於ては、希臘時代の階級觀に比べて、一步前進したものである。

十八世紀の英國の社會觀では、階級は社會的分業と同一の觀念でも又自然の才能から生じた觀念でもなく、むしろ歴史上の發展途上に於ける諸國の指導者が其の權力に依つて集中獲得した富に由來すると云ふ觀方に迄發展した。社會の富が増加するにつれ、富の大部を集中した強者共は、その富によつて更に次の富を集中する社會勢力を獨占する様になつた。殊に

戰爭は他國民を略奪することに依つて富を流入せしめ、階級の強化發展に拍車をかけた。結局社會階級は合法或は暴力に依る富の略奪から生じたこと云ふことになつた。

佛蘭西大革命と云ふ異常の歴史的事件は、人類の階級觀に異常な暗示を齎らした。人々は、恐ろしい狂亂と熱風の中に土地及び生産手段の所有者たる貴族及び僧侶大市民に對して、土地生産手段の所有から切り離された階層が血みどろに反抗するのを見た。

この眞剣な階級的自覺に比べて、空想社會主義者サンシモンの階級觀は内容貧弱で甚しく見劣りがするものであつた。シモンは、國民を働く階級と働かざる階級に類別したまではよかつたが、働く階級として大銀行家、大産業の經營者達と労働者、商人、手工業者、農民達を同一の種類の階級として取扱ひ、反てこの産業階級の中にこそ本質的に利害の對立する異なる階級が伏在することを洞察し得なかつた。シモンは眞の階級の區別を抹殺したためにその攻撃の目標を、主として封建的貴族たる大地主、中間階級及び官僚にのみ注がれざるを得なかつた。

以上の歴史上表れた階級觀は、或は階級の表面的な現象に執着し、或は全然見當がはづれ、

或は大體肯綮に當つてゐる觀點もあるが、いづれにしても、充分の社會科學的検討を経たものとは言へない。

階級の本質に決定的なものは十八世紀イギリス階級觀の富の大小と云ふ事實でも又スコラ的階級觀の社會的分業の種類でも、或は一般に考へられる所得の高でもない。これらは、階級の本質が齎す必然の現象にすぎない。

吾等は、歴史上現れた種々の具體的形態を通觀し、それに共通する一つの事實を分析しなければならぬ。抑々歴史の基礎に横はる共通の事實とは何であらうか。それは、生産手段の支配者と生産手段の所有から切り離された社會層が現存することである。古代の奴隸制度、封建時代の農奴制度、資本主義制度を通じて、そこには、土地及び生産手段から切り離されつゝも、眞つ黒になつて働く直接の生産者と、その生産の結果を獨占し支配する生産手段及土地の所有者との對立を發見する。なる程近代資本主義の發展途上、小資本家及び小産業家が大資本家及び大産業家との抗争に於て、悉く狼慾の祭壇に濺かれ、悲惨な無産者の群れに没落して行つたことは、否定すべからざる事實であつたにせよ、如何なる場合でも資本と生産手

段が少数者への獨占的集中と云ふ形體で行はれたことは決定的な事件であつた。この事件の推移こそ大多數の社會勞働の成果を少数資本家に集中せしむるに至つた眞の原因であつた。

階級とは、マルクスによれば、必然的な社會的勞働活動の相互關係の、即ち生産關係の内部に於て演ずる社會成員の地位及び役割である。それ自體としては、生産關係の内部に於て、經濟活動の種類を同一にし、それに依つて同一種類の經濟範疇に屬するところの成員である。

レーニンの見解も同じ階級觀に立ち、社會の一部成員へ土地生産手段集中することにより、他の成員の勞働の成果を收得することができると論ずる。

そこで階級の本質をつき止めると、其の根本的な特徴は、次の二つである。

第一、歴史的な一定の段階に於ける、生産關係の内部に於ける地位。

第二、生産手段に就ての關係。

階級は、先づ何よりも歴史的な生産關係の内部に占める地位によつて決定される。この階級と一定の歴史的な生産機構との關係を把握することに依つて、始めて階級の觀念は、明確となる。

現代資本主義生産方法の支配する社會にも、吾等は、資本家階級の外に地主階級なるものが存在することを知る。地主は資本家と同じく勞働の搾取者として現れるし、或場合は積極的に協同もするが、それにも拘はらず、地主は封建時代からの遺産であるし、資本家は現代生産秩序に於ける主要なる地位を占めて居るのである。地主は、むしろ資本主義發達の障害として残存して居る。

いづれの歴史的段階に於ても、根本的に相對立する二大階級以外に、派生的な階級がある。封建時代に於ける基礎的階級たる領主と農民以外に、近世市民の先驅たる都市商人が發生して居た。それと丁度逆に、資本主義生産秩序の中に、資本家と勞働階級以外に地主が封建時代の遺物階級として残るのである。

學者に依つては、階級の根本的區別を所得の種類により、區別する人がある。これは併し、分配關係が生産關係の制約に基くものであることを洞察し得ないことから起る淺見である。分配は生産關係の結果であるし、其の内部の地位によつて決定される。

例へば、代表的な資本家的生産秩序は、株式會社の人的構成に於て見るのであるがこの生

産關係の特徴を詳細に分析すると次の如き關係が現れる。

- (一) 資本家階級
 - 甲、放資資本家（株主）
 - 乙、經營資本家（重役）
- (二) 賃労働階級

この二大階級は、資本主義を特徴づけるところの對立する基本的な地位と關係を表示する。この地位の決定に依り、結果として所得の種類が定る。株主は配當を、重役は重役報酬を、労働階級は賃銀を所得する。

然し、この根本的階級の外に派生的階級が現存する。

- (三) 地主階級
- (四) 俸給生活者

即ち、地主は地代を、俸給生活者は俸給を取得するのである。

それ故一部の學者が、所得の種類を以て、階級の特徴としたことは、派生的結果を以て根

本的原因に置き換へたことに外ならない。所得の種類を変更するためには、生産秩序の内部に於て、生産手段を圍む地位を変更しなければならぬ。この分配所得階級觀に捉はれた人は、それ故、労働問題の本質を皮相に解釋し、解決の範圍を單に賃銀の値上げとか、労働時間の制限とか云ふ條件の改善のみに局限し、事の真相をカモフラージュし、糊塗するのである。英吉利其の他の先進國に於て、労働組合發達の初期は、熟練工のみの利益を擁護せんとする技術組合 (craft union) が一時流行したのも、分配理論の狹隘なる範圍に視野を陰蔽したからである。階級關係を廢絶せんと欲するならば、而して激化する分配關係の相剋を調整せんと欲するならば、其の根本に遡つて、生産手段をめぐる所有關係を調整しなければならぬ。國民全所得の内部に於ける分け前の變更だけでは、階級闘争は、絶対に廢絶されないのである。

ボグダーノフ等は、階級の基本的關係を支配と服従との關係と觀て居るようであるが、これは現象形態を以て根本の實體とは違へて居るのである。即ち根本的關係は、生産手段の所有をめぐる關係であつて、株式會社の機構を取つて見ても、法律上は法人たる會社自體が

生産手段たる原料、機械、工場等に對して所有權を執つて居り、各株主には利潤の配當を會社に請求する權利しかもたない。併し株式會社の經營を左右する勢力は、現實には、大株主である。或はその代表的管理人たる支配人であるから、生産手段の獨占權は、この人々の掌中にあり、これに多數の生産手段から切り離された賃銀階級が對立するのである。即ち、生産手段の所有をめぐつて、社會の一部が他の部分の勞働を占有することが認められる處に階級發生の根據がある。

そこで吾等は、稿を改めて、資本主義生産關係の法的表現に過ぎない處の所有權の社會的根據を検討しよう。

第二章 私有財産權の社會的根據と

其の將來

私有財産權と一口に云ふても一體如何なる、經濟的内容を指稱するのであらうか。私有財

産權の全然拒否された社會が將來想像できるだらうか。社會主義者達は、そんな意味で、はたして私有財産制度を否認しつゝあるのであらうか。かゝる問題は少くとも我が日本に於て從來眞剣に反省されたことはなかつた。莫然と私有財産制度の顛覆を叫ぶものがあるかと思ふと、私有財産制度を絶対神聖視して其の擁護にやつきとなるものがあり、全く藁人形を造つて打つような感情と獨斷論の横行であつた。

羅馬法に於ては、所有權を規定して、「無條件に物を處分する權利である」と云ひ、又ナポレオン法典に於ても「所有權は、絶對的な、物の利用及處分の權利である」と定義して居る。それでは、如何な意味で絶對性が云々されるかと云ふと、或物の所有權者は、其の物を其のものもつ使用價値に従つて、自己の欲するがまゝに使用し得るばかりでなく、場合によつては、其の物を破棄し、その對象物が飼育した動物である場合には、殺戮することすら認められるのである。そればかりでない所有權は、その對象物が存続する限り永久に存続する性質を有するのである。即ち自由に對象物を使用する權利と永續性とは、所有權の本質である。この所有權の根本的屬性たる自由處分權は、將來社會主義の社會でも、生活物資に就ては、

當然認められる筈である。生産は社會化されても一度團體意志で配給された物に就ては、各自は所有權を保護されねばならぬ。相互に他を侵害することはできない。「盗む可らず」と云ふ道德律は、この意味で、歴史と共に不滅である。

併し、社會主義が資本主義の社會を指して特に私有財産制度の社會と云ひ、これに根本的改造を要求するのは、勿論かゝる意味の私有財産權を否定して居るのではない。社會主義に對する無理解から、私有財産權を否定するのは、人間の本質に反すると云ふ自然權説の攻撃は、的なきに矢を放つものと言はざるを得ない。『それでは、資本主義の社會を私有財産制度の社會と稱する所以は一體なんであらうか。それは、生産手段の私有權が認められることに依つて、大多數の他人を勞働せしめて、無限に私有財産の額を増大せしむる權利である。これに依つて生産手段は、資本としての性格を帯びるようになる』世の中には、生産手段であれば、如何なる生産關係に於ても資本であると云ふ觀方が「一部の學者に存在する。この生産手段即ち資本と云ふ觀方は、假に資本主義の生産關係が崩壊して社會主義生産が行はれるようになつても、生産手段たる工場や機械は生産の絶対條件であると云ふことを豫想するから、

自然的資本觀、或は絶對的資本觀 (natural conception or absolute conception of capita) と云ふことができる。

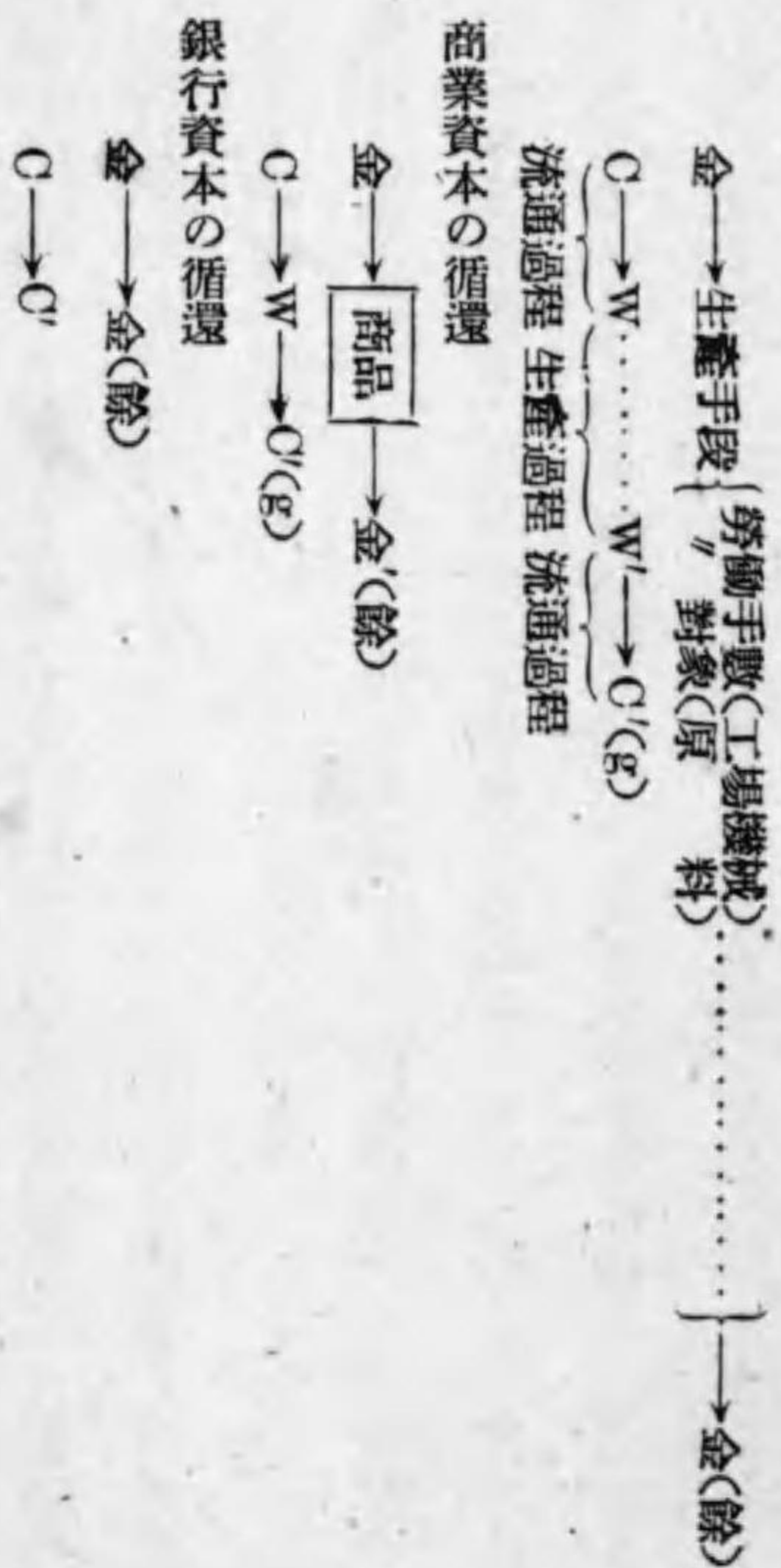
他方では、生産手段の私的所有と云ふ社會制度の下に於てのみ成立する資本の概念がある。この定義の仕方に依ると、資本とは、餘剩價値を生むために投ぜられたる價値であつて、その所有者に、勞働契約による他人の勞働を使役して利得を收得せしめる價値であると云ふ。この定義は、生産手段の私的私有と云ふ私有財産權制度を根本的な前提とするばかりでなく、他方に勞働契約の自由に依つて、自己の勞働力を資本家に提供する賃銀勞働者の存在を前提とする。結局、「資本主義の根本法制たる私有財産の無限擴大、勞働契約の自由、産業自由制度の三大法則と結びついて、資本の概念が発生する。」これは、歴史的な法制と結合し、それと運命を共にする概念である故歴史的資本觀 Historical Conception of Capital¹⁾ 或は、法制的資本觀 Legal Conception of Capital と云ふ。マルクスは「賃勞働と資本」と云ふ小冊子で、「黒人は黒人だ」併し、「それは一定の社會狀態の下に於て始めて奴隸となると云ふ。」奴隸制度と云ふ社會制を前提としてのみ黒人が奴隸となるのだ。同じ道理によつて工場や機

械はそのまゝでは、單なる生産手段に過ぎない。併し、資本主義的法制の下では、生産手段の私有と云ふ事實は、それに依つて餘剩利得を得る手段たらしむるから資本となる。この意味で、今日では、工場や機械を多くは私的法人たる株式會社が所有し經營して居るから、資本として使用して居ることが甚だ多いのである。又原料や資材、石炭などに就て云ふも營利と結合して居る限り、他の種類の資本である。こうなつてくると、吾等は、資本主義制度を離れても、工場や機械そのものが資本だと云ふ幻覺イリュージョンを起すのである。社會主義の制度に於ても、工場や機械や其の他の設備は益々大規模に設立されるし、併も今日より優良且つ精銳な機械が据ゑつけられるに相違ないが、その時にも早これらの諸設備及び道具は、資本とは言はれないのである。と云ふのは、此等は、金儲けの目的で生産されるのでなく、國民協同體の必要を目的として生産されるからである。

それ故資本は、資本主義の根本主義の下では、始め貨幣の姿で登場して来る。拂込資本金一千萬圓と云ふやつがこれである。併し、この一千萬圓が單なる貨幣でなくて資本である限り、いつまでも同じ貨幣の姿で永遠に止まることは許されない。それは、一部は工場や機械

の姿に替り、一部は原料、石炭、勞働力等に變化する。そして、生産過程を通じて新しい生産物の姿になつて再び流通場裡（市場）に現れ來て、元の貨幣の姿に歸る。貨幣が出發點で又終點である。この終點の貨幣は（餘剩利得）を孕んで居る。

産業資本の循環



自己の財産を他人の勞働で増殖する権利は、何も資本主義の社會に限つたことではなかつた。希臘時代、羅馬時代に於ける奴隸勞働は、明白に搾取の制度であつた。奴隸は、人格權

を無視され、アリストテレスの所謂「生きながらの道具」であつた。紀元前二世紀の羅馬では、主人は、如何なる理由によつても自己の奴隸を殺戮することができた。然しこの時代奴隸が主人の所有権の客體であり、利用の手段であることが社會の表面に露出して居つた。封建時代の農奴でも同様である。農奴は、自己のために働く労働時間と領主に奉仕する労働時間とを明確に區別した。

資本主義の時代は特別な様相を呈した。労働者は、契約の相手方として、自由意志により、資本家に労働力なる商品を賣り付ける主人である。其の點では資本家と同等の法律上の人格關係である。往昔の奴隸の様に、生産手段と同一律に、生きながらの道具もぐら或は家畜として露はに社會の目に映じて居るわけではない。とは言へ、かゝる法律上の獨立は、實質上の經濟の面では、労働者が絶えず、切迫せる饑餓に直面して居ると云ふ事實のため、労働者をして資本に隷屬するものたらしめ、内容が空化するのである。即ち労働者は一人の資本家の下を去る自由があつても、何等かの資本を離れる自由を持たない。資本を斷念することは、生存を斷念することである。

労働力を資本家に賣つたとしても、自己の人格と労働力を分離することは不可能であり、労働力即人格である故、生産過程に於て、人格の支配を資本家に委ねなければならない。資本家は、生産過程に於て、原料、機械などの滅却と同様に労働力を滅却する。滅却された労働力は、労働者が賃銀に依つて賄ふ生活資料の消費で補はれる。然し労働者が生産面で創り出す價值は、労働力の價值として受取る賃銀より遙に大である。もしかゝる餘剩價值の創造と云ふことが無かつたら、資本主義生産制度は現實の世界からたちどころに姿を消すことになるであらう。すべての會社や企業は、忽ち存在の意義を失ふことゝならう。

さて吾等は資本主義の下に於ける所有権の屬性として、賃労働に依つて資本を増殖する權利を究明したが、この他、資金或は物を他人に貸與して利益を收むる權利、物を販賣するの權利、遺言に依つて物の所有権を死後に及ぼす權利等の諸屬性を上ぐることができる。

然らば、何故以上の如き多様な諸内容を有する所有権は、資本主義社會に殆ど無條件に許容されることになつたか。其の根本の理由は何であらうか。所有権の社會的根據如何。

第一に自然權説(Naturrechtlichen Theorie)なる學説がある。この學説は、所有権の起つ

た根據を人類の本質に求むる。その主張者ハインリヒ・アーレンスによれば、私有權は、それを古今に通じて謬らず、東西に施して悖らざる普遍妥當の法則である。恐らく神に是認されたる制度であらうと説明するのである。又ホツプスによると人間は其の人格の内容たる精神と肉體の發展向上のためには、其の手段としても、外界物を取得しなければならぬ。その獲得の事實は人類の歴史と共に古い。併し單にそれが事實の域を脱せず、相互に侵犯する状態にあるときは、結局強者が他を排斥して、事實上ある物を所有することになる。かゝるたゞまなき争鬭は、あらゆる地上の人類を危険と不安に曝らすことになるから、やがて、相互に相争ふの不利なるを悟り、私有財産權を創設し、各自平和に其の處を守り、敢て他人の分を犯さず、又他人よりは侵犯さるゝことがなくなつて、安んじて生存し、以て人格の發展を期することができるようになった。それ故私有財産權は、各人に保證されねばならぬ。各人は、天賦の權利に従ひ、正當な要求に適應する所有權を請求することができる。云々。

自然權説は、確に情理に合し、機微に觸れた學説であるが、この學説を以て社會主義の私
(1) Helrich Ahrens, Das Naturrechts. 1846.

有財産學説が苦も無く破られると見るのは、自ら社會主義に對する無知を曝露するに外ならない。と云ふのは、社會主義に於ても、かゝる意味の私有權の本質を人間の世界から全然驅逐しようなど、企らんで居るものではないからである。如何なる社會主義制度の下に於ても、土地、生産手段を除き、綜合意志で配給された生活物資に就ては、自己の分を守り、敢て他人の分を犯さざるために、相互侵犯を防止する法律がなければならぬ。然らざれば、社會制度と正義の要求は決して満足されないことは自然權説の云ふ通りであるからである。人格の向上發展のためには、物質手段が不可缺の條件たることを最もよく知るものは、社會主義者達だからである。

第二に所有權學説に先占説と稱する學説がある。(Die Okkupationstheorie)

これは土地所有權を無主の地面を最初に取得したと云ふ事實に根據づける。誰でも一片の土地を最初に占有したものは、其の土地の所有權を求めらる。グロチユースは云ふ。人間は其の始め一切のものに平等の權利をもつて居た。原始時代には、他人の物、自己の物と云ふ區別の意識無く、一切の物は共有であつた。然し一度或人が使用のため占有したものは、他人

は最早奪ふことは許されない。これにはすべての人の意志が疏通して居て、或個人に依つて最初に占有された土地を、其の人の所有権として認め、共同の権利を見捨てると云ふことが條件である。これを演劇に譬へると、舞臺は、役者の共有であるけれど、一度役割が振當てられると、其の位置は其の役者のものであつて、他の役者が犯すことはできぬ。私有の分割は占有の次に來るもので、其れに先つものではない。云々。

この占有説は所有権の原始的成立の説明としては妥當であるけれど、現行法の所有権を説明するに不適當である。なる程、現行法でも無主の物（動産）に限つて、先占に依る所有権取得を認むるけれど、これを以て、一切の所有権の根據とすることは不可能である。その上、原料に加工して作出した製作品或は土地を耕作して得た作物に對する所有権の原始所得の説明には不合理である。況や其の加工或は耕作が、自己の勞働に依らず、他人の勞働による場合には、愈々先占説では條理が盡されない。

第三に勞働説（Die Arbeitstheorie）なる學説がある。この學説は、私有財産権の論據を所有権者が其の財産に投下した勞働に求める。この學説の代表者は、ジョン・ロックである。地

球及び其の包藏物は、あらゆる人類に共有であるけれど、それにしても、各自は自己の身體に所有権を有つ。従つて彼の肉體勞働或は手の製作品は、彼の所有に屬す。彼以外の誰も、彼の勞働の結び付く物に權利をもたない。一本の櫟の樹の下で集めた櫟の實を食して生活する人、又林檎林から集めた林檎で生活する人が、この林檎や櫟の實の所有権を得ることを誰しも否定する人は居ない。勞働は彼の唯一の人格的な權利である。たとへ泉となつて噴出する水は、すべての人間の共有であらうとも、壺にくみ上げた水はくめる人の物である。そこで私有財産権の及ぶべき範圍は、一定の制限された範圍に止むべきである。即ち當事者が眞に勞働を投下しただけの範圍に及ぶべきである。

そふすると、勞働説の反對者は抗議する。もし林檎の實を集める勞働が、所有権の唯一の根據であるならば、各人は、自分の欲しいだけ勞働すればよろしいこととなり、いくらでも其の範圍と數量とを増加し得るではないか。これに答へて曰く、自然は人間に各自が生活の要求に應ずるだけの範圍で所有権を許すのであると。それでは、土地所有権の場合はどう説明して宜ろしいか。ロックの説明によると、なる程、だれも土地を勞働で得たのではない、

けれども、彼の勞働を及ぼし得る範圍で所有權を與へらるべきである。神がすべての人間に世界を共有すべく與へた時に、同時に神は人間に働くことを命じた。……そこで、神の命令通り一片の土地を占有した者は、その土地を耕作し其の土地に果實を作り出す。この作物は、彼の財産であり、それに對して、他人は何等の請求權をもたない。

そこでロックの説を要約すると、土地に於ては、自作農の程度で小所有權が是認され、一般經濟生活に於ては、その人が勞働で獲得したと、及び其の欲望に對して必要以上を取得しないと云ふ條件内に所有權が是認される。

勞働説の規準を現實の資本主義社會の私有權の内容に照合すると、忽ち不合理な矛盾にぶつ突かるだらう。一軒の家屋を取つて見る。これは、幾多の社會的勞働の結晶である。木材を伐切するの勞働、製材所へ運ぶ運搬人の勞働、製材所の職工の勞働、ガラス工の勞働等々幾多の分業勞働の綜合されたものである。それにも拘はらず、或個人がそれ等の社會勞働の綜合物に所有權を有する根據は一體なんであらうか。又土地所有權者が其の地價の騰貴によつて得する理由や、何等の勞働力を提供せずして、相續者や受遺者が所有權を取得する根據

等を説明するに苦しむ。それ故奴隷勞働を下敷とした羅馬法に於ては所有權の定義から勞働概念を閉め出し、所有權とは或人が物の上に一切の他人を排除して支配する權利であると規定して居る。殊に資本主義生産方法に於て、數千或は數萬の賃銀勞働者が、生産手段の所有から分離されてる現象を説明することができない。パスチールの牢獄の破壊と共に公布された人權宣言の中にも、同様の理由により、所有權の觀念の中に勞働の概念を包含して居な

る。

第四に私有財産權の社會的根據として社會機能説 *Sozial Funktionstheorie* と云ふものがある。私有財産は、共同社會が個人に信託したものである。(social trust, sozialtrust)。私有財産權の屬性を最大限度に解放した資本主義生産關係の出發點は、此の制度が最も有力な生産力の刺戟であつたと云ふ點である。勞働者は自由勞働契約によつて勞働條件の氣に入つた方向に向ひ、産業家は利潤の多い産業に投資し、地主は地代の高い方に土地を提供し、消費者は、己れの好む物を求めて走り、各々利己心を追求するならば、共同經濟には、無用な生産は廢されて、有用な生産が勃興すると云ふ古典經濟學の倫理は、共同社會の生産力發展を念願と

したものであつた。かゝる生産關係の綜合が資本主義經濟組織であり、其の法的表現が所有財産權制度である。私有財産權は、實に荒蕪地を化して田野とし、幾多の産業家をして、終始怠慢の精神を抑制し、勇奮以て障碍を退け、孜々矻々として産業を經營せしむる動力であつた。又勤勞階級をして、質素儉約の風を起し、冗費を省き濫用を戒しめ、資金を蓄積せしめ、以て銀行を通じて産業資本化せしむる拍車でもあつた。そこで、私有財産權を法的表現とする資本主義生産關係は、實に生産力を保護助長する制度として、封建社會に交替する歴史的段階となつたのである。

もし、所有權の根據が、果して社會機能説の如く、生産力の保護育成にあるとするならば、私有權の本質は、單に古代羅馬法の定義した物を、絶對的に支配すると云ふ言葉を字義的に解釋すべきものではなく、社會生産力の發展と照合して、相對的に解釋すべきであらう。

そこで茲に提起される問題は、資本主義生産關係は、其の發展の歴史に照し、事實に徴して、終始一貫生産力保護育成の任務を果して來たかと云ふことである。

資本主義の社會は、封建社會から生長した。それが出現した所以は、封建的生產關係の中

では相剋を起した生産力に資本主義生産關係が適合し始めたからであることは、疑ふ餘地もない。自由競争は、封建時代と對照して、素晴らしく生産力を發展せしめた。資本家に所有が集中して、勞働力が生産手段の支配から分離したことは、機械を導入することとなり、生産力増強を招來することゝなつた。

階級的な資本主義生産關係は、其の初期の段階に於ては、生産力に適合しつゝ發展した。資本主義に於ける生産は共同的性質を帶ぶるにも拘はらず、生産手段の所有は私有化されて居る。勞働の結果たる生産物は、個々の勞働者によつてつくられたるものではなく、又個々の會社がつくつたものでもない。一つの工場内の勞働者が分業に依つて連結して居るように、社會内に於ける個々の會社も、生産に於て相互に連結して居る。それにも拘はらず會社は私的に經營されて居る。一切の會社は、私有財産制度の下に立つ。

資本主義生産關係が生産力と相剋するに至つた象徴は、恐慌の發生に求められる。

産業界で生産された商品の全部は、販賣されなければならない。不幸にして販路が杜絶するか、杜絶しないにしても、生産價格以下の値段でしか賣れないならば、資本家は丸損とな

るか、或は一部の損害を受ける。いづれにしても生産の繼續の上に支障を來すのである。抑も、社會の消費力なるものは、社會を構成する全員の自然的或は文化的欲望の絶對的總計でなく、購買力ある欲望の範圍に狹めらる。而してこの購買力は、各階級の勤勞所得或は財産所得に依つて決定されるし、この所得は、其の源泉を生産の場面に制約される。従つて生産が萎微すれば、同時に購買力も萎微する。不景氣の時には、社會の尨大な生産力は狭い範圍でしか作用しなくなる。

斯くの如き社會の購買力は、更にまた資本を蓄積せんとする衝動、即ち資本家達が資金を増大せんとして蓄積する行爲に依つても制限を受ける。なるほど資本家達は不斷に生産方法を改良し、優力なる機械を採用して、生産費を低減せんとあらん限りの努力をつゞけるから、其の面から見れば、大に生産力を増加すると云ふて差支へない。が資本家が特別利潤を得んとし、或は競争場裡に於て自己の破滅を免れんとして發展せしめた生産力は、それが全面的に充分に發揮され得るためには、販路がたえず擴大されねばならない。ところが販路關係は、豫め計畫的に設定されて居るのではなくして、無政府的な自然法則、即ち物價の動きを唯一

の目標として、各企業がそれぞれ努力するのであるから、生産財生産部門と消費財生産部門の擴張が、相互に均衡を失ひ恐慌が爆發するのである。數百の工場は機械の運轉を突然中止し、數百萬の勞働者は、失業して街頭へ投げだされる。この恐慌を通じて、小資本家は破滅し、或は倒産し、其の度毎に巨大なる資本の集中が行はれる。

恐慌は、尨大なる社會の生産力を資本主義社會の自動的な運動法則が、どんづまり迄閉塞せしむることを意味することは明白であるが、それと同時に恐慌を通じて發展する産業界の獨占運動、即ちカルテル、シンヂケート、トラスト、コンツェルン等の發展は、それ自體生産力の發展を阻止する役割を演ずる。相對的商品の過剰生産を恐怖するからである。尤も、國內の産業が自由競争から獨占到移つたとしても、世界市場に於ては、今尙激烈なる自由競争が行はれて居るから競争が生産力の如く思はれぬことはない。併し、大多數の商品は、二三大の大財閥の統御して居る内國市場で販路を見付けなければならぬから、生産力發展の速度の鈍化或は休止は益々明かとなる。偉大なる天才達の發明は、財閥の手に買占められ、隱蔽、獨占の對象と變化するのだ。

資本主義生産關係及び其の法的表現に過ぎない處の無制限な私有財産權制度、總じて資本主義の全機構が、生産力の育成の歴史的段階から、生産力阻止の歴史的段階に達したことは資本主義の身體が老衰期に入つたことを物語るものではあるが、これと同時に、老衰の過程は、資本家階級の社會意識の根本的變化からも説明される。一切の資本家が先頭に立つて積極的な企業經營として指導した時代は疾づくに過去り、株式會社組織の素晴らしい發展の結果、大多數の資本家は、株主として生産過程から分離し、生産に参加するのを止める。彼等は利札の切替や配當利子をできるだけ多くを貪らんとする金利生活者に變化する。頽廢と淪落の象徴である。

全て以上の方面は、終焉に近づきつゝある資本主義の消極的因子であるが、これと共に積極的な因子が現れる。即ち空前とも云ふべき階級闘争の尖鋭化である。金融資本主義は獨占の最高の形態として、勤勞階級を骨の髄迄しゃぶらうとする。カルテル價格は、勞働の實質賃銀を次第に壓迫して、勞働者が、資本の自由競争時代に受取つたより以下に押し下げようとする。そこで、勞働者は勞働組合を造つて、これに對抗せざるを得なくなるが、カルテルの

進展と巨大獨占の急激な發展は、個別的な勞働組合の効果を弱め或は其の低抗力を不可能ならしめようとして大きな壓力を及ぼすようになる。個々の大會社の背後には、今や大きな資本の團體が控えて居る。この大きな團結組織はストライキを決行した勞働者が、他の會社に就職する機會を全面的に奪ひ去り、縮出しによつて積極的攻撃を加へ、個別的勞働組合の低抗力を弱め、護歩を餘儀なくせしめる。

しかるに、會社が團體組織を造つたと同じ理由は、勞働組合にも反作用を及ぼしてくるわけで、勞働者達が無條件で資本家に降伏することを欲しない限り、或工場の勞働組合は個別的組織よりも、同種産業全部の勞働組合迄に發展せんとする傾向を取り、これは更に全國的に團結せんとする機運に拍車をかける。其の上資本家の總閉め出し Lockout は未組織勞働者をも組合に参加せしめるに至る最も強い動力となる。勞働組合の員數は急速に増加する (Hirshing, Das Finanz Kapital)。

ところで、産業界の獨占運動から金融資本主義への發展は、勞働組合の攻勢に對して、其の低抗力を増大するが、これと同時に金融資本主義は、資本輸出に拍車をかけ、未開國、及び

半未開國の資源の支配及分割に付て未曾有の劇甚なる競争を惹起し、其の必然的結果として、悲しむべき帝國主義戦争に迄驅り立てられる。數千萬の若者が手足をもがれ、數百萬が殺戮され、莫大な富が灰燼に歸し、貔貅を戦はし、鮮血ほとばしる。空前の大破壊、生活不安、饑餓等々は、一般無産階級の意識を尖鋭化し、資本主義そのものに對して、深刻なる覺悟と反省を促す結果となる。社會革命の鞏音は次第に近づいてくる。狡猾にも、反動政治家達が既に長い獨占資本主義の歴史的発展によつて克服されてしまつた。十九世紀前半の自由(競争)の生活を以て民衆を瞞著せんとするも、も早社會民衆は一瞥だに與へない。自由貿易も保護貿易も眞にめざめた民衆には、今や空念佛にすぎない。民衆の目標は、生産の社會化であり、共同に意識された經濟組織である。少數金融資本階級による金融資本本位の統制でなく、社會全體による社會民衆本位の統制に迄自覺が高まつてくる。なるほど金融資本も資本主義の框内に於ては、生産を最大限度まで社會化するが、同時に金融資本に依つて驅使せられる經濟的及び政治權力は益々絶對的な壓力を社會民衆に及ぼすようになるから、民衆は、明確に事態の全局を意識し、社會生産力の發展及び解放のため我等何をなすべきかを明識するようになつてくる。解放戦の目標が明瞭となつてくる。

とは言へ、金融資本主義は、其の框内に於ては、最大限度迄生産統制の範圍を擴大する傾向をもつから、生産の社會主義化の一步手前に前進して來て居る。即ちこの框がはづされた時に、全社會民衆を對象とする計畫的生産、意識されたる共同社會が出現する。

第三章 貧困の二様相

露西亞の文豪ドストエーフスキイの作品に「罪と罰」と云ふのがある。主人公のラスコールニコフと云ふ貧しい青年が、冷酷非道な高利貸の老婆を殺害してから捕縛されるまでの深刻な心理描寫であることは、普く知られて居るところである。貧困と苦惱につかれはてた若者がこの恐ろしい犯罪を決意する前、町のドンゾコの酒場に足を踏み入れる。暗ひ隅つこの汚れた小さなテーブルの前に腰をおろして、たゞ一息に呑み干したビールで、漸く沈んだ氣持ちを取戻しながら、そつとあたりを見廻すと、今しがた酔つぱらつた連中に次いで樂隊士の群れが出て、しまつたばかりで、部屋はひつそりとなつて、たつた三人の客が残つて居た。

そのうちの一人に、五十がらみのふしぎな中肉中背の紳士が居る。頭は、餘程禿げて、白髪が二三本残つて居り、ふくらかな頬は酒焼けして、醉眼朦朧としてはゐるが、人なつつとい目がぢつと、この若者に注がれて居る。なにか物言ひたげな様子であつたが、とう／＼たまらなくなつたと見えて、高調子で呼びかける。

「私の御見受けしたところでは、あなたは、教養ある方に相違ない。この邊の常連とは柄がちつとばかり違ふ様だね。私と云ふ奴は、いつも教養を重視するんでな……私の名前ですか。マーメラドフつて云ふんです。時に失禮ですが、あなたはお役人さんかね」この馬鹿丁寧な言葉で、だしぬけに話しかけられたので、ビックリした若者は、

「違ひます、私は修學中の者です」とあわてゝ答へた。

そうするとこの老紳士はすかさず、

「そふだと思つたです。私の感には間違ひつこなしです。永年の經驗によるんですもの」と自分の額に指をあてゝ、いかにも自分の推察のエラサを誇示するやうに、もつたいぶつた

口調で、

「なるほど、あなたは學生さんだつたね」

「貧乏 Poverty は、たしかに惡徳ではありませんがね。極貧は、ingigent 惡徳ですよ。貴方は貧乏で居らつしやるかも知れぬ、それでも尙自然の誇りと云ふものを保持することができます。だが一度極貧に落ち込んでごらん下さい。も早萬事はおしまいですね、極貧の人間は、世の中からステツキで逐い出されることはありませんが、それどころか箒で掃きだされるのですからね、こいつはもつとひどい話ですよ、だが、世間はまちがつては居りません。極貧に零落した者が誰よりも先づ自分自身をさげすむのですからね。こゝに、あなたは、居酒屋なるものゝ、起りがお分りでしょう。一ヶ月ばかり前に私の女房は、レベエジャントニツフ氏からぶつたゝかれたもんです。妻がぶられたことは、私の感にひどく應たえましてね……」

以上のドンゾコの居酒屋で、老紳士をして、ドストエーフスキイは、貧困に二種類あることを物語つて居る。即ち、俗に云ふ貧乏と云ふ奴で、所謂無産階級に屬する人々である。其の

特質は、相對的である。現實では、今何も饑餓に頻して居るわけではない。工場に勞働力を提供して賃銀を得つゝある者があり、或は會社に働いて俸給を貰つてゐるものもある。何も今困窮して居る人々ではないけれど、一度不景氣、その他の不幸に襲はれると、忽ち、失業地獄に落ち入り、勤勞所得を失つて、最早獨立の生活ができなくなる人々の群れである。其の特質は生活不安である。たとい、勤勞所得を失つても、株の配當や其の他の財産所得で何不自由なく食つて行ける人々は、無産階級とは言はれない。だがこんな結構な身分の人は、國民のうちにそんなに澤山は居ないのである。國民の大部分は、この貧乏線の附近を非常な生活の危険に直面しつゝ彷徨して居る。

ところで、この相對的貧乏の人々が、不幸にして、愈々貧乏線から顛落して、勤勞所得を失つてしまつたとすると、愈々ドンゾコの窮地に追いつ落とされる。其の狀態に現實に苦惱する人々を、ドストエーフスキイは、極貧 Indigence と云ふ言葉で表はし、單なる貧乏、即ち無産階級から區別して居る。又日本の貧民研究の世界的權威者賀川豊彦氏は、窮民 Pauper と云ふ言葉を使用して居られる。賀川氏の窮民の本質は依存 (dependant) である。社會の救貧制

度に頼つて救護されるか、或は他人の情けに縋るか、いづれにしても世間に迷惑を及ぼさない限り、獨立の人間としての生存を繼續できぬ人々である。不幸にして救貧制度もなく、救助さるべき他人にも縁故がない時は、一種特有な陰慘な生活をしなければならぬ。人間は饑餓線内に追込まれたとしても、そのまゝ餓死のできるものではない。何とかして生存せんと悶躁く。氣力の強い者は、性格が歪められて強盜、窃盜等の犯罪者に顛落し、氣概の弱い者は、自殺者、賣春婦等の悲劇を演ずる。せいぜい宜い方で、仕事があつたり、あぶれたりする自由労働者(狹義)、即ち半失業者の群れである。土木工事、諸官公署等の請負工事、其の他の浮動的工事に従事するもので、日雇人夫、定期雇人夫等に分類される。生活に安定がないので、彼等が狭い就職の機會を求めて眞剣に争ふ状態は、正に此の世ながらの地獄である。土方殺すに刃物は要らぬ。雨の三日も降ればよいと云ふ俗語は誇張でも何でもない。

貧乏に二種類あることを洞見したのは、ドストエーフスキイの深刻な現實の體驗から來て居る。彼は、生れながらの癩癩の固疾を有つて居た。彼の生活した環境は貧民窟であつた。彼が日常接觸した人々は、淫賣婦、前科者、自由労働者、酒亂者、及び變質者等々であつた。

彼は、これらの人々に悲しい宿業的な自分でどうすることもできない心理を見たけれど、其の内には、ダイヤモンドの如き美しい魂が沈んで居るのを見た。汚辱に身を穢す淫妻の姿でも、ドストエーフスキイの目には、くれなゐの衣に身を纏ふ貴婦人よりも、美しい姿に見えた。

ドストエーフスキイは、たしかに飢えて居た。かれが小説を書いた時には、飢えて、震るえる手で書いた。一切れのパンに代へんため、ペンを取るとは珍らしいことではなかつた。彼は、それを決して、不名譽とも耻とも考へて居なかつた。それどころか、その眞剣な苦惱を通じて、全人類の苦惱と不完全性とを神に向つて號泣した。イエスが、賣春婦マリアの週邊に罵り騒ぐ、パリサイの偽善者どもに向つて、「汝等心に罪なしと思ふ者、先づこの女を石で打て」と鋭く肉迫したやうに、ドストエーフスキイは、「虐げられたる人々」「淋しき人々」を通じ、全人類に代つて、「人間の宿業の悲しさを訴へた。或西洋の文豪が批評したことがある。トルストイの作品を通じて、吾等が受ける印象は、偉大な説教家の感じである。どこか全人類より高い線に立つて、教訓を垂れて居る印象を受ける。これに反して、ドスト

エーフスキイは、地の果てまで至たる、全人類の苦惱を代表し、天に向つて號泣する感じを受ける。かぎりなき悲哀、腸を斷つものが、吾等の魂に恐ろしい力で肉迫してくる。なるほど「全人類が苦しむ悩んで居るのに、自分一人は何故にこんなに自分だけの魂のために苦闘しなければならぬか」と懊惱の極、公爵の地位も財産も擲つて、平和な村落に隱退し、純朴な農夫として、晩年を送つたトルストイ翁は、たしかに世界の巨人であつた。其の敬虔な宗教的感情と熱烈な求道心に對しては肅然として襟を正さざるを得ない。併し、彼の作品、「復活」でも「生ける屍」でも「イワンノ馬鹿」でも、吾等の受ける感じは、どこか全體として、明るい教戒的感じを受ける。最後に倫理的解決が付いて居る。何か光明と啓示的結論が與へられて居る。

これに反して、ドストエーフスキイの作品は、全編暗く寂しく、宿命的である。現世のままでは解決が付いて居ない或意味で絶望的である。

トルストイ翁には、飢えと生活不安はなかつた。彼は平和な自作農であつた。生命の糧は満ち足りて居た。或時は菩提樹の間を逍遙したり、或時は廣漠たる平野を耕したり、又或時

は渺茫たる燕麥の波に快心の悦びを味ひ得た文化農夫であつた。彼は極貧の哭きを知らなかつた。かゝる生活環境こそ、トルストイの作品にある明るさを齎したところのものである。さて吾等は、ドストエーフスキイの作品を通じて、貧乏に二種類あること、即ち相對的貧乏と絶對的貧乏 Poverty and Indigent があることを知つた。そして、絶對的貧乏は、一種の「死刑の宣告」であることを知つた。寒風を凌ぐの被褥あるなく、一日の飢えを醫すべき粥汁にも缺乏し、職を求めて彷徨する悲愴の窮民である。無産階級が失業と解雇の嵐に襲はれた時こそ、國民として生存することを断念せよと命せられた時である。マルクスは、「賃労働と資本」Lohnarbeit und Kapital の中で、

「資本がもし労働者を使つてくれなければ、労働者は亡びてしまふ。資本もまた、労働力を絞取らなければ、亡びてしまふ。さうして其れを絞取するためには、資本は其れを買はなければならぬ。生産に向けられた資本（即ち）生産資本が急速に増加すればする程、従つて産業が繁營すればする程、有産者が富めば富むほど、事業が好景氣を呈すれば呈するほど、資本家は益々多くの労働者を使い、益々高く労働者を雇ひ入れる。だから労働者の

可なりの生活状態のために缺くべからざる條件は、生産資本が出来得るかぎり増加することだ」

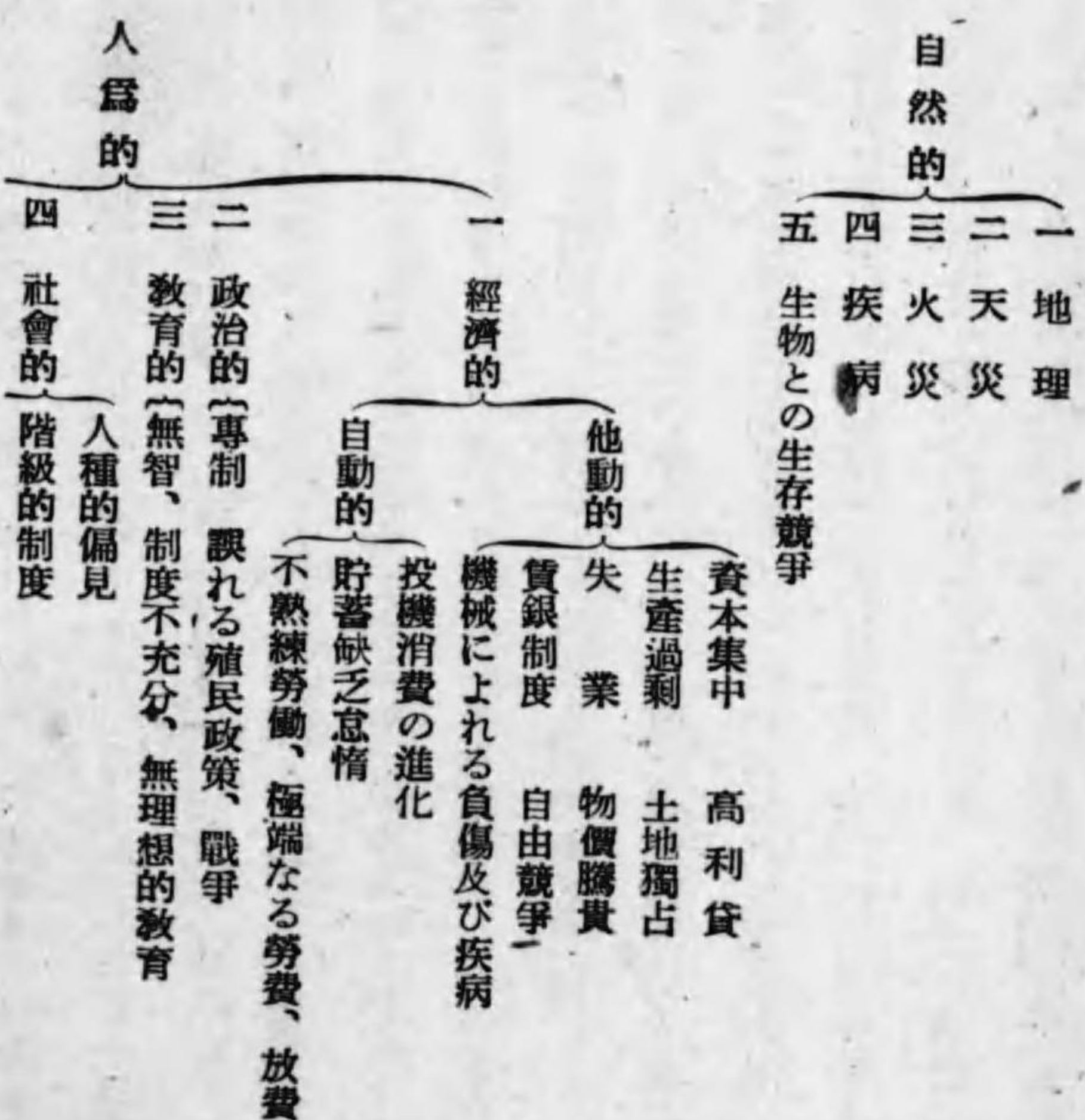
——河上肇氏譯 六一頁より引用——

だが、讀者諸君は、早合點し給ふな。マルクスも又勞資協調論者だと。彼こそは、かゝる資本制生産方法を古代の奴隸制度に劣らぬ「吸血鬼」の制度と否定する處の本尊であるからだ。労働力を商品化せしめ、資本にその人格を隷屬せしむる資本主義生産方法そのものこそ、彼が全體として問題にして居るところのものである。

さて次に吾等は極貧の意味に於ける貧乏發生の原因を探求することにしよう。

賀川氏は貧乏發生の原因を凡そ三種類に分けて居られる。一つは、自然的原因、飢饉、地震、海嘯と云ふやうな自然からくる事實、第二は、人間の生理的缺陷から來るものである。病氣、出産、老衰、幼年等に依るものである。第三の貧乏の原因は、低能、放蕩、酒亂等である（同氏—無産階級解放論）。その他同氏の他の講演「貧民窟の破壊」では次の表を示される。

貧民發生の原因

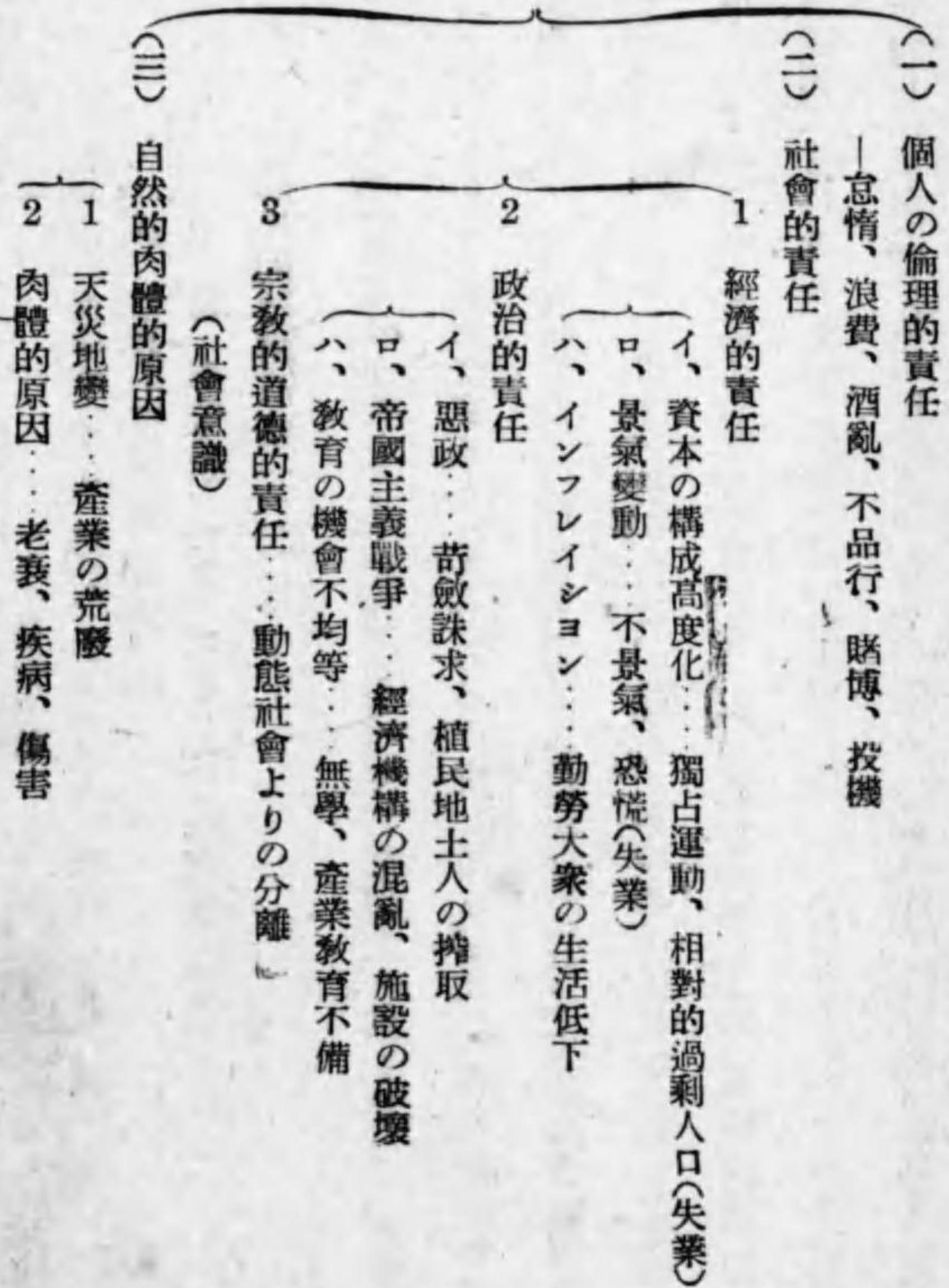


同氏問題講演集一二二頁

- 退化 遺傳、低能、體質退化
〔社會風紀廢類〕
- 五 衛生的〔過住、煤烟、飲酒、徵毒、結核、阿片〕
- 六 宗教的〔經濟化、靈肉分離〕
- 七 道德〔公娼、賭博、侈奢、盲目的結婚、犯罪〕

さすがに廣汎なる事件をよく網羅し來つて、微に入り細を穿つて曲盡せる處、同氏ならではこれをよくする能はざるところである。併し私は、社會科學の最近の傾向に従つて、法律、經濟、言語、宗教、歴史等の諸文化現象を共同活動に關係する社會現象と見て、社會的と云ふ名稱に概括したいと思ふ。賀川氏は、投機、消費等の進化を經濟的原因中の自動的原因に歸せられて居るが、資本主義の社會では、一切の經濟現象は、私的交換、即ち賣買を通じてのみ展開するのであり、同氏が他働的原因としてあげる資本集中や生産過剰及び物價騰貴等は、かゝる私的交換や私的契約の、即ち、個人（主觀的）的努力の客觀的結果に外ならない。（ヒルファーチング、金融資本論）

そこで私は、貧乏の發生原因を次の如くに分類したいと思ふ。



この圖表で分るように、近代貧困の原因は個人自體の當然負ふべき自律的責任からくる場

合と、個人の力ではいかんともすることのできない他律的、即ち社會的及び自然的な原因に歸せられる場合とに分類される。前者は、働く機會と働く體力を恵まれても、働く意志を有せざるものである。奢侈、滯逸の慾を逞ふして、空しく有爲の歳月を經過するものである。婀娜嬋妍たる花顏柳腰に眩惑せられ、恍惚として自らを忘れ、親譲りの萬金を抛ちて惜まざる歐美主義者達である。腐蝕せる金融資本主義の温床に發生するウジ虫である。かゝる輩が、財産を蕩盡して、親兄弟にも見離され、極貧に落ち込んでも、自業自得であつて、同情の餘地はないが、大乘的見地から見れば、これも亦一種の精神病者である。社會主義の社會では、病人、老少幼年者を除き、怠惰者は、「働かざる者は食ふ可らず」の原則に従つて、社會的制裁を受けなくてはならぬが、もし彼等を一定の場所に集合せしめて、強制的に一定の期間勞働訓練を施し、良き慣習と働く意志能力を恢復せしむる機關を設くるを得ば、これはやがて一つの大きな社會的生産力を構成する因子となる。

併し、資本主義社會に於ける極貧の原因が悉く、個人の倫理的責任からだと思ひこむのは、事態の眞相を辨別し得ぬものである。

現代に於ける貧困の大きな原因は、なんと言つても不景氣と恐慌による大量的失業である。働く意志と働く體力を有しながら、産業界の自然法の運動に蹴弄されて、強制的に資本から遊離せしめらるゝのである。元來資本主義の發展期に於ては、自然法、即ち物價の動きは、共同社會を知らず知らずに調整する調和の法則であつたことは、前述の通りであるが、今や自然法は、内容空化して、調和の法則どころか共同破壊の法則に、即ち恐慌法則に變化したのである。

第一次世界戦争前のドイツの失業者数は、問題になる程の數ではなかつた。處が、一九二四年から産業界の合理化運動が始まつたにも拘はらず、失業者数は、恐ろしい程、激増して、ヴァルガの研究によると、ドイツだけでも五百三十六萬人以上が失業し、戦争前の七倍以上に上つて居る。産業界の獨占運動が圓熟しなかつた時代の米國は、天然資源豊富で世界の羨む樂天地であつたが、一九二四年の合理化時代には、二千三百萬以上の人々が失業し、一九二九年のニュウヨック取引所恐慌には、産業界閉鎖、農業萎縮、知識階級の破綻、金融恐慌等相次いで起り、夥しい失業者を造り出して居る、米國を例に取つて見ても、物財倉庫

に充實せるにも拘らず、又黄金が中央銀行に山と積まれて居たにも拘らず、社會民衆は生活必需品を買ふ購買力を有たなかつたのである。天下の物望んで得られざるなく、求めて來らざる筈なき米國に於て、經濟法則の作用によつて、國民の大多數は、恐ろしい飢餓の谷に追込まれつゝあつたと云ふことは、何たる悲劇であらう、獨占資本主義の世界では、物資豊富なるが故に反て國民の大多數が飢え、生産力が獨占企業の中にのみ閉ちこめられて、社會的には貧弱化するのである。

そこにかゝる一般化しつゝある貧困を絶滅せんと欲すれば、無意識共同經濟より意識共同經濟へ、資本主義經濟より社會主義經濟へ、無政府生産より純粹計畫生産へと飛躍しなければならぬ。

第二次世界戦争後の世界は、インフレの破局に向つて、破竹の如く盲進してゐる。全世界は、帝國主義戦争の悲劇的結末として、財閥、官僚、軍閥の無計畫財政の報いとして、基本産業部門を殆ど麻痺せしめ、社會大衆を刻々に、恐ろしい飢餓に追い詰めつゝある。云ふまでもなく、インフレ現象は、資本主義崩壊過程の必至の現象として、國民を慘苦のドンゾコ

に落とし入れて居る。これこそ、現時に於ける國民大衆を窮乏化せしむる最大原因である。それでも、戦時中は、官僚統制の悪名に概富する弱點があつたにも拘らず、兎に角強力な統制によつて、日本のインフレーションは、破局化するまでには至らなかつた。處が終戦と共に、一般民衆は古い時代に存在の意味をもつた自由經濟の甘美な追憶に依つて、自由經濟學者達に躍らされて、熱狂的な十九世紀經濟への復歸を要求し始めた。嵐の如き民衆の聲に脅えた日本政府は、戦時中の強力な統制を弛るめ始め、計畫經濟へ前進を開始する代り、自由販賣へ後退を餘儀なせられた。彼等は、社會的自由と自由放任の經濟政策を混同し、意識的共同經濟に價格經濟をすり換へんとして、國民經濟を一大混亂に陥し入れた天人共に許さざる社會犯罪人である。その結果、それまで、潜在して居たインフレーションは、「時機到來」と一齊に爆發を開始した。古い經濟指導の理念が、自由主義の新らしい擬態で民衆をあざむいたのである。資本家も官僚も議會も、自己の舊勢力を如何に保持するかに汲々たる餘り、如何に日本を再建するかの熱意を缺き、眼前に展開しつゝある國民の慘苦に對して冷酷である。闇相場の暴騰は、大體購買力の封鎖、即ち資金の凍結と云ふ方面からのみ抑制されんとし

て居るが、これは、資本主義生産方法の基本構造に立つ限り、産業界の流通活動を阻害し、生産を麻痺せしむるから、インフレ對策として一の限界に突き當る。

しかるに社會主義經濟に於ても、貨幣の過剰の問題は勿論起り得るから、物價が高騰するが、これは、資本主義構造に於けるインフレと本質を異にして居る。資本主義經濟に於ては、假令強力なる統制を實施したとしても基礎は私的利潤の制度に立つて居るのであつて、表面上國家が、意識的干渉を必要に應じて實施するに過ぎない。其の基底には、貨幣への不信用が刻々に増大し、物を得んとする狂熱的願望の火が發火點へと進行する。底知れぬ政治不安、絶對的生活品の不足から、強烈な購買熱が物價暴騰を惹起するのであるが、これに對して、國家が強力なる統制經濟を實施しても、即ち、預金封鎖だの、國債利子の引下、豫算壓縮、或は價格の公定、闇取引の嚴禁だの色々の手段を策しても、尨大なる生活品要求が、繼續する限り、而して依然として生活品の生産力が絶對的に不足する限り、賣り惜み、買ひ漁り、品質低下、大衆の窮乏化は免れないものとなる。

處で社會主義體制の下では、貨幣と云つても、私的取引の交換の契機としての貨幣である

のではなく、公營化された生産物の割當を象徴するものにすぎない。同甘共苦の意識共同社會に於ては、假令貨幣の過剰はあつても、それに依つて、物財が一部のものに買占められて、配分上不公平を來すと云ふことは起り得ない。即ち、資本主義下に於けるインフレの如く、物財生産力の配分の不均衡を來たし、國民經濟を破局に導くことは起り得ない。

社會主義體制下に於ける過剰貨幣と異り、資本主義下のインフレーションは、國民大衆をドンゾコに突き落すものである。

以上吾等は貧困の原因に付て、あらゆる角度から推究して來たが、最後に、階級的構造が存在する限り文化殊に自然科学的成果が、貧しき者を恵むこと少く、支配階級に歸すること多き事實を語らうと思ふ。なる程、資本主義生産の發達に依り、天下の文物燦然、社會は漸次舊態を脱し、國民全體は、開明の域に達して居るようである。併し、一度、社會の内部に於て見れば、貧困なる人々が、普通選舉に依つて、表面上、政治的平等を賦與されても、金融資本と結合せる一大ブルジョア政黨に利益を蹂躪され勝ちであり、又形式的に教育が普及しても、山本有三氏作の「路傍の石」の吾一君と同じく、少年期に達すると早くも、懣、不遇にして、

天才を延ばすを得ず、流離漂泊、人生の無情に泣かざるを得ない。

宗教の本質は、『廣大無邊の、慈悲の門を開き、一切衆生を救濟せんがためである』ことは勿論であるが、偉大なる宗祖の精神も、宗教が社會の特權の中に閉ぢこめられると、全く閑却せられて、形骸と化し、徒らに堂塔伽藍の壯美を誇り、名僧知識を以て、貧困なる人々を縁なき衆生と冷眼視するところの生命なき宗教に墮落する。かゝる形骸宗教が、社會運動を恐怖し、魔酔劑の役割を演ずるのは、當然である。

宗教の本質は、其の初めから、個人主義的性質と同時に、全體的性質を、不可分にもつて居る。『九十九の羊を野に残して、最後の羊を求むる』心は、徹底した個人性に立つと同時に、又無限の全體性でもある。だが來世の既成宗教は、宗祖の精神から背離する傾向をとる。

藝術の世界に於ても、近世プロレタリアは教養の門を閉鎖され、伸ぶべき天資を磨く機會を興へられない、貧苦は彼を無教養に押しこめる。

其の昔、森戸辰男氏は「思想と闘争」なる論文で、クロボトキンの「青年に訴ふ」なる小冊子の中から、暗示深き譯文で次の如く説示された。當時東大の一學生であつた私は、圖書

館の片隈で、感激に心をふるわせつゝ、唯一氣に讀下したものだが、今この貧乏問題を終るに當り、讀者に對して同氏の譯文を紹介することとする。

「例へば、諸君が醫者になつて偶然にも貧民窟の病人を診察に行つたとする、そして薄暗い冷たい室の中に汚ないぼろ蒲團に包まれて、毀れた寢臺の上に、横たはつてゐる病婦を見る。その側には、子供が襤褸着物の中にふるへながら、大きな眼を開いて諸君を見つめてゐる。その夫は數日來失業してゐるのだと云ふ。それはどうでもよいとして、諸君は直ちに此の病氣の原因は、榮養不良と新しい空氣の缺乏による貧血病であると一見の下に診斷した。諸君は此の病人に向つて何と言ふか。毎日甘いビフテキを食べると云ふか。もつと乾燥した空氣の流通のいゝ室に寢よと言ふか。馬鹿な！それが出来る位なら諸君の忠告を待たないで、とうの昔にやつてゐるのだ。恐らく諸君も亦さう云ひ度くとも、遂にそれを口から出すことはできないで、張り裂けるやうな胸を抱いて、唇に呪咀を浮かべて、そしてその家を立ち去るであらう。……」

森戸氏の若かりし日の文章とて、情理剴切、能く幽妙の人情を曲くして居らるゝが、今ここに假定された青年醫者は、クロボトキン及び森戸氏の如き、優れた良心の所有者が想像されて居る。現實の世界に於ては、資本主義の害毒を受けた醫者達は、殆ど大部分が、貧しいこの婦人に無關心であり、それどころか侮蔑さへ感ずるのであらう。金にならないからである。かくて自然科学的成果が社會の一部に獨占されて居ることを知る。

また、クロボトキンは、純眞な青年技術家の例を上げて、青年達に訴へて居る。勞働力を輕減し、勞働の苦惱を緩和せんとする愛の動機から、優秀な機械を發明したとしても、資本主義の生産關係に立つ限り、反て大量失業の原因をつくりだし、民衆の痛苦を増大する所以を述べて居る。數十萬の勞働者は、解雇の悲運に際會し、働く能力と意志を持ちながら、職を失ひ、糧道を斷たれ、社會を放浪する。そのはてが、獄裡に繋られるか、行倒れるか何れかである。その家は離散し、娘は淫賣婦に淪落し、子息は不良化して行くのである。所得を失つたため社會保險の掛金も不能になり、共済組合をも有効に利用できなくなる。

社會科學の發展とそれに伴ふ社會主義化が徹底せざれば、自然科学の發達も、文科施設も普遍的に人々を潤すことはできないのである。

獨占資本主義の展開と私有財産權制度は、一方で金融利子階級と他方では生活不安に脅ひゆる無産大衆をも創造したが、前者は、無爲と特權とに隋眠を貪り、後者は向上の機會を奪はれて、その痛苦が忍ばれざる程度に達する危険がある。こゝに資本主義は、革命の段階に達する。總じて、資本主義生産機構は生産力を驚く程増長して來たが、今や反て生産力を束縛する障害と化し、社會大衆の窮乏化をも生む、革命的意識が次第に昂まつてくる。この潮流に對しては、通路が與へられねばならぬ。革命は、暴力（流血）革命に導かれる危険を多分に有つが、それは、絶對的不可避のものではない。マルクスも唯物史觀の公式の中で、「經濟的基礎が變化すると共に、其の巨大なる上部構造の全部もまた、或は除々に、或は急激に革命される」と述べて、合法革命の可能を暗示して居る。社會が合法革命の過程を迎るためには、經濟的には、勞働組合の完全なる發展を促進し、社會的には、言論、結社の自由を絶對的に保證し、民衆の痛苦と要求とをそのまま政治に迄顯現せしむることが必要となつてくる。不幸にして、社會の反動勢力が、事態の重大性にめざめず、民衆から言論結社の機會を奪ひ、或は形式的に許しても、黄金や陰謀により實質上自由を奪ひ去り、その政治的社會的進

歩を妨壓するときは、新らしき社會形態を求める衝動は、却つて昂進し、終局する處流血革命の機運が、恐ろしい勢ひで昂まつてくる。無産詩人石川啄木は『コ、アの一匙で』テロリストの悲しき心理を歌ふ。

我は知るテロリストの

悲しき心を

言葉と行ひと分ちがたき、

たゞ一すじの心を。

奪はれたる言葉のかはりに

行をもて語らんとする心を、

われと我心を敵になげつける心を。

しかしてそは眞面目にして

熱心なる人の

つねにもつ悲しみなり。

はてしなき議論の後の

冷めたるコ、アの一さじをすゝりて、

そのらす苦き舌ざはりに

我は知るテロリストの

かなしきかなしき心を。

生まれ！ 暴力革命の歴史的犠牲は大きい。傲慢頑愚なる貴族と政治家、淫縦汚穢なる王室、黄金珠玉に包まれた大市民、此等の反動と無自覚は相率ひて、佛蘭西革命を暴力と流血に迄導いた。人心は砂漠の如く荒廢し、國民は國民を呪ひ、恐怖政治は、社會を萎縮せしめ、ナポレオンと云ふ軍閥は飛びだし、佛國二百年の争闘流血の幕は開いた。餓死者十數萬人。ブルジョア革命を暴力に迄導いたものは、佛國の反動勢力と其の代表者達であつた。

吾等は新しい時代の革命期に臨んで居る。資本主義の最後の段階たる金融資本主義の時代、其の政治的表現に過ぎないところの帝國主義の崩壞期に直面して居る。激烈なる階級對立と偉大なる内面的醗酵との段階に生活して居る。社會的及び道德的必然は、吾等をして、資

本主義を止揚し、より高度なる社會形式を切望せしめつゝある。

如何なる國民も、社會革命の時期に當つて革命を拒否して、社會的没落を遂ぐる義務は有つて居ない。吾等は無血革命を恐れてはならない。無血革命こそは、神聖なる國民の義務でなければならぬ。暗憎たる内部相刺を止揚し、階級鬭争を絶滅し、平和と愛と勞働とに立脚した、而して生産力が其の中で無限に展開し得る、新しい産業民主主義の社會を建設しなければならぬ。

資本主義を革命せずして、失業問題も、永久平和も、貧困の絶滅も、生産力の展開も、而して民主主義の徹底も、其れ自身、ドンキホーテの笑劇にすぎない。

日本が、新しい復活への道を辿るか、死の谷底へと落ちこんで行くか、或は、眞の社會的自由に活路を開くか、擬装的自由へ轉落するか、もつと適切に言へば、國民全體を生かすか、或は、見殺ろしにするかの運命の重大なる岐路が、選擇と決意とを吾等に迫つて居る。

勞働階級は、資本主義法則の鐵鎖から解放され、資本家階級もまた、利潤の制縛から自由になり、眞理と自由と愛とが社會を支配し、萬民、創造的喜悦に輝く日が促進されねばならぬ。

第二編 社會主義の生産及び分配方法

第一章 無政府主義

無政府主義を組織立つた學問として始めて、發表したのは、ウィリアム・ゴドウィンであつた。一七九三年、「政治的正義」Political Justice が發表され次いで「問者」Endier が天下を聳動した。フランス大革命は、晴天の霹靂の如く突如として爆發したのではなかつた。長い長い間、人々は時代の行詰りを感じ、新しい秩序が生れんとして陣痛の苦しみにあるのを直感しつゝあつた。特権階級は變革を恐怖し、被支配階級は、暴力に訴へても、變革を熱望しつゝあつた。ゴドウィンは、かゝる夢想家の一人であつた。田舎の非國境派の牧師を振出しに、やがて、宗教家を止めて、ロンドンで操觚者生活には入つたが、「政治的正義」は、この時代の彼の傑作であつた。彼に對する社會の熱讚が昂まり、ゴドウィンならでは談ずる

に足らずとせられ、イギリス思想界の明星と迄仰がれた。

ゴドウィンに依れば、一切の公共制度は社會惡の根源である。人間は、本來善なるものであるが、公共制度によつて、著るしく歪めらる。もしも、私有財産制度及びそれを保護する國家制度が廢止されるとすれば、人間は本來の善性に立ち歸り、一切の私慾は消滅し、自己の必要以上の物は、相互に分ち合ふて生活するに至るであらう。彼は、ジャコビン黨の綱領と同じく「社會は、人類の要求によつて生れ、政治は惡によつて生れた」と信じて居たらしい。

“society is produced by our want; government by our wickedness”

もしも人類が一度王や僧侶に依つて負はされた鐵鎖を斷ち切つたら、こゝに黄金時代が到來するにいたるだらう。性慾は、理性によつて統御され、もろもろの不正は、消滅するに至るだらう。も早一握の富める者も、多くの貧しきものも存在しなくなるだらう。富は、より公正に配分され、今日の禍は、明日の幸福に席を譲るだらう。戦争、犯罪、裁判所、政府、これ等は立ち所にその姿を消してしまふだらう、さらに、有難いことは、病氣だの、怨恨だの、憂鬱だの一切の人類の悲しみや害惡が地上に存在しなくなるだらう。あらゆる人々は、たえ

ざる熱意をもつて、一切の善なるものを追ひ求めんとする。

個性を完成することが人間窮極の目標である。それ故、數區以上の大きな共同組織は、人間に必要ではない。政府は、どんな形態でも、個性の完成を妨害する有害物である。宇宙愛だの愛國心などは、人を欺く偽善の類である。個性の完成こそ出發點であり、且つ目標である。

人間は、眞理を以て誤謬を克服し、公共制度なく、國家強制なき無政府社會を創造するであらう。

ゴドウインの斯る發表に對して、當然一個の疑問が提出されざるを得ない。即ち、ゴドウインの豫想するが如く、「萬人心緒潔白となり、事物に懸戀せざるに至り、又色欲に恬淡となつて、性的魅力が減少すれば」人類の蕃殖は、こゝに停滞して、人類はやがて地上から消滅するに至るであらうと云ふ杞憂に對して、彼には最後のキリ札がある。

「なる程、地上の人口が飽和状態に達して、それと同時に人間が肉慾を征服し得たとすれば、人類の蕃殖は停止することは必然であるけれど、その時は、人間が個性を完成した時である

から、各人悉く賢人となつて、未來永劫に地上に生存し、死亡することなきに至る、英國の「經濟哲學史」の大家、ジェームス・ボナー(J. Bonar)は、ゴドウインのかゝる無政府主義的思想を揶揄して、「ゴドウインの思想は、哲人政治の國家を熱望した希臘の大哲プラトンの社會觀より深遠雄大である、然し同時に現實から遊離して居る」と。

ゴドウインによれば、人間の眞の幸福は知力の擴充(the expansion of our intellectual power)、眞理の會得(the knowledge of truth)、道德の實踐(the practice of virtue)にあるので、決して感官の快樂にあるのではない。人間は、大海原の如き精神界の一アトムであつて、奢侈滌逸の慾を逞しふるよりも、精神界に限りなき喜悅を發見することができる。

純眞な理性を以て、自己活動の規範とすれば、自由獨立の人格の集合にすぎない處の社會には、正義が顯現される。この規範を體得するには、悟性を働かさなければならぬ。かくて、正義が發揚されると、其處には無政府主義の世界が展開する。ゴドウインの思想の特色を要約すると、第一無政府主義の絶對支配、第二私有財産の廢止、第三理性の支配、第四普遍的慈悲、第五社會的義務と正義とへ積極的に奉仕することである。

以上述べた處で明白であるやうに、ゴドウインは、一個の樂觀論者であつたことに、疑ふ餘地はないけれど、人間の實踐的努力を否定した自然主義者ではなかつた。それどころか官能的快樂の克服こそは、彼の哲學の眞髓をなすものだ。唯彼は、人間のかゝる理想的努力が私有財産制度と國家性を廢止すれば、何等の妨害なく、善性を回復し、自由と平等と眞理の追求に向けらるゝと確信した意味に於て、人間完全性の信奉者且つ主張者であつた。

ゴドウインの經濟觀は、勞働全收權の否定である。生産勞働の種類は、各人の個性及び特色に據つて定めらるべきであるが、分配は假令自己の勞働の結果なりとも、自己の消費以上は必要としない。それ以上は、過剰分量であつて、贅澤であるから、所有權の對象とするとは、不正である。各個人は、自己の勞働如何に拘はらず、自己の必要以上を消費しては正義ではない。それと連關して、ゴドウインは、過度の勞働は制限すべきであると主張する。「或一個の人間は、其の健康を害ふまで勞働しつゝあるのに、他の人間が富裕であるとすれば、それは、正當ではない。一切の人間は、共同財を増加するために義務として働かねばならない。相互に勞働することこそ正義の眞髓である。共同財の觀念は、現實の所有財産權が、

他人の勞働を支配する勢力となつて、社會惡の根源となりつゝあるのと異り、公共善のための委託物と變化する。相互に勞働すれば、分勞と機械が進歩することに依つて勞働生産力の發展は素晴らしいから、日に半時間勞働すれば、萬人は裕福に暮らすことができる。も早蓄財する必要もなくなるから、富の不平等は消失し、眞理の探求と道德善の追求、即ち現代の所謂價值闘争のみが残される。

最後にゴドウインは、私有財産制度と富の不平等に立脚する社會が如何に不公正であるかを、雄渾奔放の文章で抉出した。マルクスが、「資本論」で資本主義社會の運動法則を大膽に曝露したのに匹敵するものがあるが、唯マルクスの場合は、自然律(Naturgesetz)が、嚴密に科學的方法で捕へられて居るのに、ゴドウインの場合は、極めて粗笨に詩的直觀的に捕へられて居る。マルクスを以て地上を驀進する鐵車に譬ふれば、ゴドウインは、天馬空を馳するの概がある。ゴドウインは考へる。現實の社會では、大多數の民衆は、生存の根柢たる生活資料を剝脱せられ、餓死に類しつゝあるのに、特權階級は、莫大なる財産を擁して富み、歡樂の美酒に酔ふて居る。特權階級の傍若無人の振舞は、貧しき大衆をして、社會を呪咀し、

人世を恨む心に變ぜしむる。自己の貧苦と努力とが、社會公共の利益であることを意識するときは、萬人、意氣に感じて努力し、或場合は、社會のため、勇往敢爲、斃れて悔ひざるの精神を起し得るものである。然るに富める者が利益を壟斷し、安逸豪華の生活にふけり、弱者のからべが蹂躪され、その窮乏が冷視さるゝ時は、その肉體的・心理的苦痛は、人間のあらゆる美しい幻想を消滅せしめるものである。

他方に於て、富貴安樂は、これに耽溺する者の、悟性の能力を麻痺し、絶対價値を感得する力を失はしむる。黄金積んで山の如く、財寶倉に充つるとも、人間の精神は、物慾に捉はれ、却つて、眞の満足を得ず。益々心貧しく不満の原因となる。眞の精神の獨立と歡喜とは、儉素にして、絶対の眞理を認識しつゝ努力する處に生ずる。

さて、私は、ゴドウインの無政府主義の内容が如何なるものであるか大體紹介した積りである。既に讀者諸君が知得せられた通り、無政府主義は、俗に誤解されて居るやうに、決して、唯無秩序、混亂の社會を期待して居るのではない。又必ずしも過激な奇想天外より落ちたやうな學說でもない。仔細に検討すれば、反て、人間の社會から暴力と相互侵犯を拒否し、

自由獨立の人格の自律を主張して居るものゝ如くに思はれる。大哲カントの實踐理性批判の人格主義を社會化したものに外ならない。「人格は、自律的意志の主體であるべきであるから、他人の人格は、これを目的として觀じ、何等かの手段として見るべきに非ず」と云ふ奴隸的存在の否定と同時に、人格は、最高の義務意識に生くべしと云ふカントの倫理説は、同時に、ゴドウインの無政府的な社會の規範でもあつた。絶対的に個性を完成した時に於けるゴドウインの個人とは、利己的個人を指稱して居るのではなく、正しく眞理を熱愛し、奉仕の精神に輝く人格のことであつた。

然し、カントに於ては、自律的人格の觀念は、ゴドウインの如く無政府的な國家否定の學說に導かれずして、かへつて國家の道德的な存在の意義にまで展開されて居る。「法とは、人の意欲が他の人々の意欲と一般的の自由の法則に従つて並存し又は結付き得べき制約の總體である」法の強制力は、個人相互の關係に於ては充分の効力を有することは出来ぬ、個人の意志を超越した國家全體の集合意志 Gesamtwille があつて、個人の自由活動をば、他の衆多個人のそれを停止せざる様なる一定の限界内に於て制裁することに依つて始めて充分の効驗

を有し得る。而して此の如き團體は即ち國家である。斯くて嚴密な意味に於ける法は、國家の内に於て、國家に依つて、初めて可能である。」(カントの平和論、朝永三十郎氏著三一頁)。即ちカントに於ても、「國家は實踐理性の要求に基き、人間の意欲の衝突乖離を防止調停して、人格の自由と品位とを擁護する」(同上三三頁)契約に基いて成立する民主的國家が、前提され居るとは言へ、單なる個人の集合と同じものでなく、それ自體獨立の人格を有し、總合意志を有つ道德的主體となつて居る。ところが、ゴドウィンに於ては、かゝる個人意志に内在しつゝ、しかもそれを超越する獨立の國家は、否定されて、實在するものは、自律的個性の完全な展開のみである。だから、ゴドウィンは、政府國家を嫌ひ、教區より大きな團體組織は、人間の獨立と獨創とを妨害する存在として、全然拒否したのである。個性の完成のみが人間完成の極致であつた。これによつて無政府的秩序と調和とが目標とされた。

實にゴドウィンの人間性に關する樂觀的見解は、十八世紀の批判的精神を極致迄徹底したものであつた。中世紀の傳統的權威に反抗して勃興した批判精神は、十八世紀の啓蒙運動に至つて絶頂に達して居たのである。この運動は、産業革命の先端に立つた英國に起り、經驗哲

學の世界觀と結合して、一般に普及したものである。一切の神祕的傾向は廢たれて、宗教も倫理も判然たる理智の聲に聞かねばならない、其他は迷盲の所産として、排斥された。しかし、當時の思想界の特徴として、巧利主義且現實主義の域を脱することは、できなかつた。實にカントの哲學は、この十八世紀の合理主義及び自然主義の世界觀に最後の脊骨^{バックボーン}を與へ精神運動の行くべき指針を啓示したものであつた。同じくゴドウィンの個性完成の思想も、カントと同じく、自律的意志の主體たる人格を條件として、單に經驗的自我の幸福を主眼として居なかつたこと前述の如くであるが、併しゴドウィンに於ては、人間性の完全性のみが自覺され、其の發現を妨害する利己心の根深さが自覺されなかつた。道德的良心は、決して外部から與へられたものではなく、人間に良心として内部から與へられたものであつて、神の直言命令 *Der kategorische Imperativ* を奉ずるのが、自由なる人格の本質であることは勿論であるが、同時に人間は、絶對者そのものでない限り、不斷にそれに向つて戦はねばならない處の利己心の誘惑を豫定しなければならぬ。この點に於て、ゴドウィンの人間觀は、尙十八世紀の理智主義的傾向を全然脱却したとは言はれないのである。

ゴドウインの政治的正義及び問者 *political justice* (1793), *The Endurer* (1797) が一世を聳動してから、約五十年程してブルードン (Proudeon, Pierre Joseph) の名著「財産とは何ぞや」が出版され、次いで「貧困の哲學」が發表された。一切の國家制度、法の強制を害悪なりと否定し、唯自由契約を基礎とする協同社會のみが、正義の社會なりと唱道した。二月革命(一八四八年)勃發するや、これに呼應して諸見解を社會に發表して、その注目するところとなり、六月には、交換銀行建設案を議會に提案して、容れられず、一八四九年には、危険思想のかどで禁錮に處せられた。

彼の交換銀行案は、後述する空想社會主義者ロバート・オーウェンの、平均勞働交換所 *Equitable Labour Exchange Hous* の試みと同じく、精煉されない投下「勞働價值説」を土臺として考案されたものである。ブルードン思ふに、現實社會の禍根は、通貨に依る利子である。もし交換銀行に於て、財が等價のままに交換されるようにしたら、通貨の必要は全然無くなり、従つて利息を徵集する制度も消滅し、金錢慾もなくなる。銀行は、貨幣に代つて勞働價值を正當に表現する證券を生産者に交付する機關にすぎなくなる。

次いで五年目に獨逸のstuhlネル (Stirner, Max) は「唯一人並びに其の財産」*Der Einzige Und Sein Eigentum* を著した。併し、stuhlネルの無政府主義は、ゴドウイン及びブルードンなどの人格主義的な調和の社會とは、格段の相違があり、利我心を極度迄解放したもので、道徳的義務意識の必要を全然認めないのである。それ故stuhlネルの無政府主義を自我主義的無政府主義と稱して、前者と區別する學者も多いのである。又バクニンは、集産的無政府主義を唱へて、中央集權的な共產主義と自己とを區別して居る。

とは言へ、すべての無政府主義に共通した要求は、國家制度の否定である。あらゆる政府、あらゆる權力の否認である。國家制度を絶滅することのみが、人類を幸福にする所以であると云ふ。

近代の無政府主義の代表者は、クロポトキン (Kropotkin) であつて、多年の自然科学の研鑽と自然界の觀察とから深い啓示を受けたのである。夥しい彼の著書を通じて、吾等が教へられる思想は、相互扶助の思想である。彼は、多年の生物學の研究に依つて、生物が共同生活を営み、相互扶助の生活をして居ると云ふ驚歎すべき法則を發見した。微生物の群れに

も、螢、蟻、蜂、甲蟲、蟬などの昆虫の群れにも、食物の蒐集及び分配、子供の養育、住居の製製、他種團體との生存競争に於て、相互扶助が行はれて居ることを教示する。これらの生物が相互扶助の集團生活を營んで居るのは、斯くすることが、相互に利益であると云ふので申し合せたのでもなく、しからばとて、道德的義務意識から創り出したものでもない。それは、他の仲間と自分が、同類であると云ふ意識のみで成立するものである。クロボトキンは、この生物界の常則を人間社會に擴充する。中央集權的な政府なき共產社會こそ、かれの理想とする社會である。(Kropotkin, Mutual aid) 併し彼の中央政府無き共產社會とは、莫然と大同團結する集團でなくして、地方的な小自治集團の細胞からなる有機的な大集團である。

さて吾々は、年代を追ふて、無政府主義の種々の内容を研究して來たが、これを實現する手段にも平和的で漸進的であるものもあるし、或は、暴力手段によつて一舉に轉覆を企圖するものもある。ゴドウィンは、理性の一般普及、ブルードンは、交換銀行の組織に依つて、倫理的な溫和な方法に訴へんとした。彼等は、啓蒙運動の効果を絶對に信頼して、破壊、殺戮、暴

動の無用有害であることを力説する。處が、バクニンやスチルネルに至つては、無政府主義の實現のためには、勞働階級の階級感情を刺戟して強力手段に訴ふる必要を提唱するに至つたが、これは直ちに殺戮及び流血革命に訴へることを意味せず。既存設備と制度、國家制と財産制度とを一舉に轉覆することのみを意味した。それ故、社會革命が行はれた後、假令、それが一時的であるにせよ、革命政府、或は獨裁政治を行ふことは、全人の自己撞着 selfcontradict であると主張する。

こゝで、吾等は、バクニンの革命方法とカールマルクス及びマルキストの革命方法との根本的相異に到着する。マルクス及びレーニンは、資本主義を轉覆した後は、無産階級獨裁の強壓政治を過渡的に認める。レーニンは、云ふ。「若しも、資本家、官僚、軍閥、財閥等の反動運動が全く沈壓され終りたる時は、も早國家は必要ではなく、國家なき聯合體を以て、これに置き換へ得るであらう。」この言葉は、共產黨宣言の有名なる言葉を想起せしむる。

「勞働階級による革命の最初の段階は、支配階級の地位に無産階級をつかせることである。無産階級は、ブルジョア階級から漸次資本を奪取し、全生産機關を國家の手に、即ち

組織化された無産階級の手集中し、政治的支配權を行使して、凡ての生産力をあらゆる限り擴充する。」(Communist Manifesto)

又エンゲルスは、「空想社會主義と科學的社會主義」で論述して言ふ。

「勞働階級が、權力を掌握すると、勞働階級自身を廢除し、一切の階級的區別、階級的相剋を廢除し、やがて國家それ自體を廢止するに至るものである云々」。

歸する處、マルクス及びエンゲルスもまた、窮極に於て、國家を廢止せんとするものゝ如くである。彼等によれば、國家とは、如何なる場合に於ても、一の階級が他の階級を征服する機關にすぎないと言へ、勞働階級は、革命後、經過的に無産者獨裁の國家を實現し、一切の反動の鎮壓に國家を利用しなければならぬ。而し、これらの反動が悉く、壞滅してしまつた後は、無産者獨裁の國家それ自體も、も早歴史的使命を立派に終了したのであるから、「勞働階級は、その發展の過程に於て、階級とその反對とを絶滅せしめたる一の聯合體を以て、ブルジョアの社會に置換へるであらう」。

マルクス及びエンゲルスの以上の國家觀は、同時にレーニンの踏襲する處でもある。

「吾等は、國家を排除する問題に於ては目的としては、無政府主義者と全く別のものではない。……若しも多數の民衆自體が、固有の壓制者を克服してしまつたとすれば、最早そこには、特別な勢力は、必要ではない。その意味で、國家は死亡し始める」

それでは、過渡的國家が死滅した後の社會とは、一體どんな社會であらうか。レーニンは、自分達は、無政府主義と同様の目的に到達する」と述べては居るが果して左様であらうか。なるほど、無産階級獨裁の國家は、歴史的任務を終り、その意味での國家の必要は、全然なくなつてしまつたとするも、それは、ゴドウィンやブルードンの理想とした無政府的社會と同一のものではなく、レーニン自身表白して居るが如くに「……無産階級が、國家の力を奪取し、全く自由に共同に組織立て、而してこの共同の力を、資本に對する共同の攻撃、資本家の行ふ反動の沈壓、私有財産制度に存在したる鐵道、工場、不動産等の讓受けに使用し、全國民、全社會に集中するとせば、これこそ民主主義的な集産社會ではないだらうか。……」レーニンの表白するかゝる社會は、國家とは（レーニンの國家の意味では）假に言へないとしても、ゴドウィンの無政府社會のそれではなく、反て中央集權的社會でなければならぬ。

従つて共同生産の全意識的統制が行はれる社會でなければならぬ。即ち、全社會の中央機關が、地方のあらゆる機關を動員して、豫見的に全社會の必要を組織的統計的に觀察し、これに對して生産を計畫し、勞働を秩序づけ、公平に生産物を分配する。従つて、生産は端的に共同關係として現れ、個人の經濟生活も公に規律される。かゝる社會は、階級國家ではないとしても、全體性による利己心の統制と云ふ意味に於ては、民衆に基礎を置く他種類の國家である。従つて、それは、無政府主義の社會とは、別種のものである。

クロボトキンの如き科學に基礎を置く無政府主義は、たとひ、全面的に讚意を表するものは少數なりと雖も、一部の學者や特殊の知識人には、心から愛好され、興味をひくに充分であつた。併し、社會運動の勢力として見れば、無政府主義に對する一般民衆の支持は、十九世紀末葉に於て、極めて急速に失はれつゝあつた。これは、彼等の運動が、ロバート・オーウェン及びブルードンの明朗な啓蒙運動から、次第に陰慘なバクニンの集團暴動に變化し、その効果疑はるゝに及んで、個人の直接行動に墮落し、帝王、大官、政治要路者の暗殺、爆彈投下等のテロ行動に移り、一般公衆に恐怖と悪感とを與へるに至つたからである。

無政府主義の急激な勢力失墜に對して最後の光焰を放つたものは、フランスのサンチカリズムの運動であつた。

サンチカリズムは、革命的サンチカリズム *Le Syndicalisme Revolutionnaire* の略で、一九〇二年に成立した、佛蘭西の「新勞働總同盟」*Confédération Générale du Travail* を母胎として、孤々の聲を上げたのである。英國の勞働組合が熟練工を中心にした技術組合 *craft Union* で、社會改良主義的な色彩を帯びたのに對し、フランスのそれは、熟練工も不熟練工をも包括する産業別組合で資本主義の根本的否定に傾いて居た。

これは、マルキシズムの革命的要素に倫理的基礎を與へ、これを無政府主義の方向に發展せしめた運動である。

國家は、如何なる意味に於ても、有産階級がプロレタリアートを搾取する政治組織に過ぎない。又將來の無産者國家と雖も、國家である以上は、支配階級が被支配階級を壓迫する機關である。有産國家といへ、無産國家といへ、あらゆる國家は社會の禍根である。

かゝる國家に於て、資本家階級の走狗たる智識階級と妥協し、議會に立法運動をなすが如

きは、獅子身中の蟲である。否議會主義ばかりではない。一切の政治運動は、無用にして有害である。社會民主主義、普通選挙、一切の政治手段は砂上の樓閣である。労働階級の行くべき道は唯労働組合運動と直接行動あるのみ。労働階級以外の一切との提携を絶縁して、其れ自體の頑強なる團結を結成し、階級意識を尖鋭化し、その情緒を刺戟して、勇敢なる直接行動に訴へねばならぬ。直接行動とは、政治との絶縁及び智識階級との絶縁と同時に、ストライキ、サボタージュ等の階級抗争に依つて、労働階級を資本主義の革命へ革命へと導いて行くことである。

サンチカリズムの要求する處は、自由人の世界である。マルクス社會主義は、生産手段を個人の手より社會の手に移して、社會の中央委員が産業を指導し、計畫することを目標とするけれど、これは、資本主義に於ける賃銀制度の變形にすぎない。プロレタリアートの國家であつても、産業と直接の關係のない官吏が産業を指導することとなり、労働者を壓迫することとなる。サンチカリストの要望するところは、労働組合による生産管理、即ち、産業自治の制度である。産業別労働組合を結成し、この組合が其の産業を管理して、これらは聯合

して、經濟的聯帶の社會、他言すれば、組織された無政府主義の社會を實現せねばならない。これが、サンチカリズムの主張である。

故左右田喜一郎博士は、サンチカリズムを以て、「理智的言説に代ふるに力を以てし、部分的に合理非合理を論じ得る交換、消費に對して、全部として考ふるに於てのみ意義ある生産を以てし革命を以てせんとするものである。即ち各部分的に構造せらるべき空想 (utopie) に對して意志の幽暗を説かんとするものである一方に破壊の強き力を高調し、他方に明かなる過去を以て推すべからざる昏らき將來の創造的生產を力説せんとす。……此の如き破壊のサンチカリズムは、他方に於て又生産者倫理を説くサンチカリズムでなければならぬ (經濟哲學の諸問題一五頁) 」

サンチカリズムの理論的指導者ジョウヂ・ソーレル (George Sorel) の思想と主張は、博士によつて、端的に表現されて居る。ソーレルは新マルクス主義者 neo-Marxist と稱へられた通り、マルクスの革命的要素を積極的に採用した人ではあるが、生産の中央集權的統制

を斥けてしまつたから、生産關係の結果として生ずる地理的消費團體の統制は、消滅してしまつたのである。ソーレルは、唯社會革命の目的と動機を唯物史觀に求めずして、生産意志の幽暗に求める。たしかにソーレルは、マルキストたるよりも無政府主義者である。

第二章 國家社會主義

社會主義とは、一般に生産手段の公有、即ち社會化を企圖する運動及び思想の總稱である。その高度のものは、經營の社會化迄企圖するが、ギルド社會主義の如く、勞働組合の生産管理を以て、これに替へんとするものもあつて、その内容は必ずしも同じからずと雖も、少くとも生産手段の私有權を廢止せんとする線に於ては共通するのである。

嚴密なる意義の社會主義と區別すべきは、所謂國家社會主義である。これは、經濟學說に於ける歴史學派の勃興により影響された社會運動である。資本主義經濟學が、自然秩序の假定から天降つて、復雜なる社會現象を説明せんとする研究方法に、非常に不滿を感じた學者に、フリードリッヒ・リスト (Friedrich List) とウィルヘルム・ロツシャー (Wilhelm

Roscher) と云ふ二人の學者があつた。リストは、一八四一年、經濟學國民大系「Das Nationalsystem des Politischen Oekonomie」を著し、後者は、一八四二年國家經濟原理 Grundsatz zu Vorlesungen über die Staatswissenschaft を發表し、資本主義の唯物的且つ利己的原則を痛烈に批難し、國家の保護政策を高唱した。經濟は、歴史生活に根據を有するものであつて、其の解決は、歴史の方向と矛盾することがあつてはならない。我々は、經濟政策を樹立する場合に、それぞれの民族の歴史的經過の中に、民族の努力と理想が貫通して居ることを發見し、それが、現實を生みだした實義を體得して、政策を決定すべきである。歴史と國情の如何を省みず、普遍的に自由放任政策を採用することは、歴史への怠慢である。

次いでクニース (Karl Gustav Adolf Knies) は一八五三年、歴史的觀點の經濟學 (Die politischen Oekonomie vom geschichtlichen standpunkt) を發表して、經濟學は、時と場所と民族精神に制約さるゝ政策を研究すべきであると主張し、自由主義を論難した。經濟學の認識對象たる國民生活は、倫理生活及び諸文化生活と個々ばらばらに分離して存在して居るのではなく、意味の内面では、不可分な結集力である。國民は、歴史に依つて、生みだされた

倫理的且つ政治的共同體であると共に經濟的共同體でもある。それ故、政府は、國民を政治的に統合すると共に、國民全般の福利のために地方的福利を統一し、國內の交通を計畫し、中央銀行によつて、通貨の調節を計る任務があると主張する。ヒルデブランドも、相次いで同様な内容を發表した。いづれにしても、歴史學派は、現在及び過去の歴史的事實の觀測を重要視し、其の研究資料として法制及び大量觀察を重んずる、これにより、歴史の赴くべき動向を探求し、それを根據とする社會政策、經濟政策を樹立しなければならぬ。

これが、歴史學派の内容である。

英國の「經濟學說史家」インクラムの批評に依れば、歴史學派の特色は、著るしく倫理的色彩を帯びて居ることである。オツペンハイムは、講談社會主義 (Katheder Socialismus) と罵る。純粹な科學的方法から言へば、國家社會主義は、社會主義ではない。獨逸社會學派の驍將チール教授 (K. Diel Theoretische National oekonomie II, B.) が指摘した通り、これを社會主義と見るのは、誤謬であらう。と云ふのは、社會主義と云ふ場合は、生産手段の私的所有が禁止され、社會が所有して居るといふことが、少くとも絶対條件とされねばならぬ。

らない。生産手段とは、教授によれば、一切の生産諸力 (Produktionskräfte) 即ち自然諸力、勞働力、生産手段である。「現今の多くの文化國家に實施されて居るやうに、個人主義經濟に於ては自然諸力の利用、勞働力、生産手段の支配權は、それぞれの私的個人、或は私的團體に委ねられる。しかるに、社會主義經濟に於ては、生産諸力の支配權は、それぞれの私人から引き離され、全體の社會に移轉される。」個人主義では生産の量も、方法も速度も、各自の私人、又は私人の團體の隨意により決定される。ところが社會主義經濟に於ては、一個の集中的な總括的指導 Von einer zentralistischen Gesamtleitung により生産が確定され、收得は、全員に分配される。如何なる個人も、土地や工場等を自分のものと稱することは許されない。「個人主義を社會主義と比較する場合、我等は、その區別を唯純粹に經濟的目的と限界とに關して觀察して居る……處が一般に人々は屢々世界觀の對立として、兩者を觀る」が、チールの考ふるところによれば、これは全く誤りである。個人主義經濟學に於ても、「見えざる神の手」の豫定調和が假定され、眼前直下に於ては、個人の利益が自覺されると雖も、これを通じて、國民共同體の有機性が保たれると盲信されて居る。他方に於て、社會主義者

達に於ても、眞の個人的自由、人格權が注意されて居る。スミスが、利己心の自由放任を説いたのは、國民、共同社會、全體の富と幸福とが實現すると確信したからである。

それ故個人主義と社會主義の區別は、唯經濟の組織、即ち社會生活の法的特色、生産手段の私的所有を許すか或は全く禁止するか否かに連關して理解さるべきであつて、共同倫理を採用するか否かに關係しない。

このチール教授の區別に従ふと、歴史學派に基礎を置く國家社會主義は、眞の意味では社會主義ではない。反て社會政策學派と稱へられるのが妥當であらう。といふのは、國家社會主義は、資本主義機構即ち生産手段の私的所有と私的經營とを前提として、社會改良を主張するに止まる。これは、ビスマルク當時のドイツの社會問題を解決せんとしたものである。一八四九年の手工者組合の承認、一八六五年シュレジエンの職工組合の結成、その他、社會保險制度、雇主責任法等の實施となつて現れた。資本主義經濟學の迷盲、自然秩序の觀念は、輕蔑されて、社會立法が重視されたけれど、資本主義生産方法の根本法制たる生産手段の社會化は企圖されず、専ら勞働者の生活改善、幼少年及び婦人勞働の保護等が、國家の重大な

る任務とされた。

然し、國家社會主義は、官僚、軍閥、財閥等の階級國家を清算したのでなく、依然として勞働強壓の國家體制にあるのであつて、民衆の自由は、窒息してしまつて居る。

第二次帝國主義戰爭の終結と共に壊滅したドイツ國粹社會主義は、古い國家社會主義の再生と考へられた。政治的には、立體的英雄政治を要望し、經濟的には、公益優先の經濟機構を主張した。勞働力、資材、資金等の分配が強力なる統制に於かれ、生産物、就中消費資料の配給が管理され、社會主義經濟と類似の様相を呈したが、根本の土臺は、資本主義的法制の上に立つて居たのである。

とはいへ、我等は、國家社會主義及び其の思想的母胎たる歴史學派が、社會運動史及び經濟學の發展の上に及ぼした影響と功績とを評價するに吝なるものではない。歴史學派は、經濟を、國民社會の機構の中に於ける他のすべての文化、道德、慣習、法制の機能との正しい聯關に基いて理解して、經濟問題を歴史的人間の問題として把握した。ジイド教授によれば、リスト及び其の信奉者達の新しい功績は、二つある。一の功績は資本主義經濟學の普遍主義の理論

に對して國民主義を提起したこと、二は、交換價値に反對する生産力の理念である。アダム・スミスの學徒は、人類を單に孤立せる個人の集合と考へる。それも利己的個人の機械的集合と考へるから、個人の利己的活動に干涉する如何なる立法も是認しようとしなない。然し、國民個人と全人類との中間に、歴史は、國民を置いて居る。あらゆる個人は、全人類たる前に國の一員である。全人類が世界的に協力することは、尊いことであるし、我々は、その實現のため、全幅の努力を致さねばならない。然し、現在諸國民は、不平等でそれぞれの利害關係の基礎の上に立つて居る。それ故、決定的協和は、諸國民が平等の基礎に引き直された時だけである History of Economic Doctrine ……。

第二のリストの功績としてジイド教授が上げたのは、富を創造する源泉即ち勞働力の保護こそ、富の現象、交換價値以上に配慮すべきものであるとの思想である。ジイドによれば、「國家は、知的及び社會的生産力を確保せんがため、物質的富を犠牲に…しなければならぬ。即ち將來の利益のため、現在の利益を犠牲にしなければならぬ」。

以上の歴史學派の主張は、自然科学化された資本主義經濟學に、革新的な態度をとるもの

に外ならない。

十八世紀に經濟が意慾の學として、重商主義政策として提起された時は、「如何にして國民を富裕にするか」と云ふことが、新しい國家の追求したところであつた。ところが、重農學派及びアダム・スミスは、問題を更に發展させて、生産及び分配を調整する自然秩序の理念を經濟學に導入して、次第に理論化した。が不幸にして、資本主義經濟學は其の後、富を觀察するに際して、いつのまにか、社會的個人、即ち共同生産關係に於ける個人の代りに、孤立せる個人、即ち共同關係が無意識にして、直下に自覺されない個人の觀念に捉はれてしまつたから、資本主義經濟機構が恰も永遠不動の機構として錯覺され、歴史的なカテゴリーであることが忘却されてしまつた。交換價値を説明するに際しても、自然的使用價値の派生として、個人と物との技術的觀點から充分解放されて居なかつた。富の本質、生産、分配の法則が恰も永久の理念として、鐵則の如く理解された。恰度、時間と空間とを超越して普遍に妥當する法則の發見が經濟學の研究任務と對象であるかの如く、「人類久遠の經濟學」が化石しつゝあつた。しかし、このことは、同時に資本主義を絶對的存在として是認する態度と信念を生み

だすことゝなつた。

歴史學派は、ブルジョア經濟學が、心理學的法則に墮落し、力學的理念に社會科學を閉ぢこめんとしたのに對して、「歴史」の中心概念に理論を從屬せしめんとした。前者は、歴史の個性でさへ、理論の素材たらしめんとしたのに對して、後者は、歴史的「意味」に理論を手段化したのである。人間の本質的な歴史性を認識の對象としたことは、確かに革新的であつた。それは、資本とか富とか云ふ概念の代りに、再び人格を考察の中心に復活せしめたからである。近世歴史學派の碩學シュモラーは、「人間はその靈的及び心的素質、能力に於て不斷の進歩を來した。」と語り、「人間を歴史に於ける生成物と見る時、その生みだした國家、及び文化の價值を理解し得る」と説明するのである。經濟は、自然と文化、技術と道德の交互作用であると云ふ。

吾等は、歴史學派の卓越せる見解に充分の尊敬を惜まぬものであるけれど、同時にその半面の弱點に注意せざるを得ない。即ち歴史學派の「人間」にも、尙ブルジョア經濟學の心理的個人、技術的個人が全然清算されて居ない。リストは折角生産力の概念を交換價值に置き

換へたにも拘はらず、生産力と交換價值との相互關係に就て明瞭な見解をもたなかつた。なる程リストの論する通り、「富を創造する力は、富それ自體より遙かに重要」であり、國民の勞働は、今日の交換價值を創造すると云ふ理由からだけでなく、將來の交換價值の源泉であると云ふ根據からも保護さるべきものであることは、論を俟たない。然し資本主義經濟機構に於ては、交換價值の増加こそ、またそれによる利潤の増加こそ生産力の動力であつたと云ふことに氣付かなくてはならない。換言すれば交換の基底たる資本主義經濟機構即ち歴史的な社會組織こそ生産力の新たなる保護、育成の任務を以て、封建社會の次の段階として創成したことに氣付かなくてはならない。もし、そふだとすると、經濟組織と生産力の統一的把握こそ、近世資本主義運動法則を理解する鍵でなければならない。むしろ、交換價值の現象が、も早生産力の保護たる任務から次第に障害と化しつゝあると云ふ事態こそ、リストが把握しなければならぬ根本の鍵であつた。しかし、その時こそかれは、單なる社會政策の領域に止まることはできなかつたであらう。

我々は資本主義と云ふ歴史的な共同社會を經濟學の直觀對象として所有して居る。此の直

觀對象を研究する場合には、抽象と分拆とによつて、商品とか貨幣とか資本とか或は勞働とか個々の規定から始めて、やがて、それを綜合して、眞の資本主義の全體が明瞭にはつきりと理解されてくるのである。歴史學派は、一方では、國民共同體と云ふ直觀的な對象を提起し、他方では生産力と云ふ概念を抽象したが、この現實的意味の聯絡に於て不充分であつたので、歴史あつて、理論なき經濟史になつてしまつた。

換言すれば、歴史學派は、他の文化現象との意味連絡を全面に持出したにも拘はらず、經濟現象それ自體に就ては、統一的把握を缺如して、具體的歴史的現象を發生、發展、消滅の運動法則としては理解しなかつた。自然學的理論は、經濟學の領域からは、排除される必要があつたとしても、辨證法的理論は、社會科學の對象として、新たに提起されなければならぬ。

かくて歴史學派は、武装を解除された軍隊と同じく、社會政策の名に於て、資本主義の獄内に於て希望のない旋廻運動を試みる。

不景氣も、恐慌も、失業も、社會政策の鍵を以てしては、永久ににげ出すことができない

沈黙の冷鐵な獄門の中である。

第三章 空想社會主義

空想社會主義 Utopian Socialism 無政府主義者ウィリアム・ゴドウィン思想と同じく、十八世紀末から十九世紀初頭に亘つて發展した人間完全性説の上に基礎を置いて居る。前世紀の理智主義的傾向は、十九世紀に至つて、充分の果實を結んだ。假令、現實の世界は、弱肉強食の殘酷極まる修羅場でも、理性の聲が、高らかに諸民族をゆり動かし、乳と蜜の流るるカナンの地が、實現される日も遠くはあるまいと夢想された。かくの如き社會觀は、ウィリアム・ゴドウィンの無政府的思想の中にも、次のロバート・オーウェンの社會觀の中にも發見することができる。

空想社會主義も、十九世紀初頭の資本主義の發展が、失業、貧困、不景氣、生活不安等諸種の社會惡を生みだすに至つた歴史的事情に刺戟されたものであると言へ、第一に現實の社會の科學的分析が充分に行はれず、従つて、その歴史的動向の見極めがつかず、無産階級

の政治意識の水準が低級であつたため、特別なる人士が、主觀的に新らしい社會の構想を練る外になかつた。空想社會主義は、實にかゝる時代の産物であつた。

「我々は、今、空想社會主義の比類稀れなる代表者として、ロバート・オーウェンをあげることが出来る。驚くべきことは、彼自身が立派な財界人で、實業家として凡庸の器でなかつたことである。一七七一年、英國北ウェールズのモントゴメリーに孤々の聲を上げた。若くして實業界に入り、精透なる見識と卓絶せる經倫に依つて社會の注目するところとなつた。十八歳にして、獨立して、紡績業を始め、一七九〇年には、早くも、マンチェスターの紡績工場の支配人となつた。三十歳にして、スコットランドのニュー・ラナークに大工場を建設して理事となつた。

産業革命の結果、イギリス資本主義は、空前の飛躍をとげた。がそれと同時に、其の半面に恐るべき社會悲劇が、次第に、全面に曝露し始めた。手工場の没落、失業、勞働酷使、婦人幼年勞働の搾取、それからそれへと、はてしもない罪惡が繰りひろげられた。そればかりでない。機械勞働によつて、人格の統一性が破壊され、精神が荒廢し、道徳が頹廢し、飲

酒、賭博等が、勞働階級の常習となつてきた。マルクスは、當時の狀況を次の如く語つて居る。

「機械は筋力なき勞働者、換言すれば身體の發達未熟にして而も四肢はより柔軟なる勞働者を充用せしむべき手段となるものである。されば婦人勞働及び兒童勞働は、資本制的機械充用の最初の言葉であつた。勞働及び勞働者に對するこの巨大なる代用具は、忽ちに考幼男女を問はず、勞働者の一家を擧げて、これを資本の直接的支配の下に編入することにより、實勞働者の數を増大する所の一手段と化した。資本家のための強制勞働は、單に兒童の遊戯の位置を奪ふのみでなく、また自家の必要のためにする自由な、倫理的限界を超えざる家庭勞働の位置をも奪つてしまつたのである。……云々」。

「ロンドンのベスナルグリーンに於ては、毎週月曜と火曜の朝九歳からの男女兒童か、ロンドンの絹製造業者たちに我身を提供する公然の市が開かれる。立法の存するにも拘はらず、大英國では、今尙二千の少年が生きた煙突掃除機械として、兩親の手から販賣されて居る。」
又婦人勞働及び幼年勞働が資本の搾取に委ねられた結果、生後二三年間に於ける兒童の

驚くべき死亡率が記述されて居る。イングランドの戸籍區中十六に於ける満二歳以内の生兒の平均死亡率は、十萬に對する九千に過ぎず、他の二十四區に於ては、一萬以上一萬一千以下、更に他の三十九區に於ては、一萬一千以上一萬二千以下、四十八區に於ては、一萬二千以上一萬三千以下、二十二區に於ては、二萬以上、二十五區に於ては二萬二千以上、十七區に於ては二萬二千以上、十一區に於ては二萬三千以上……ノッチンガム、ストックポート及びブラッドフォードに於ては、二萬五千以上……マンチェスターに於ては二萬六千二百二十六以上……母親が家庭外の勞働に従事する結果、兒童の取扱が疎略にされ、酷薄となること、殊に榮養の不良不足を來たしたり、睡藥を給與したりすることが、兒童の死亡率を高くする主要の原因となるのである。加ふるに、母親は、我子に對して、不自然に疎隔されてしまひ、故意に食物を與へなかつたり、有毒物を給したりすることも原因となつて居る。

マルクスに依つて、展開されて居るかゝる状態が、産業革命以後に於けるロバート・オーウエンの祖國そのまゝの姿であつた。

一八一三年にオーウエンの「社會の新展望」A new view of society: Essay on the princip

leathe formation of the human character が出版された。その中心思想をなすものは、人間は社會環境の產物である。人の性格の善悪は、環境の善惡に依つて決定するものである。それ故、もし善良なる環境と教育を創造すれば、個人の惡しき性格もまた善良化することができる。オーウエンは、かゝる社會觀に基いて、先づ温情主義の制度を彼の工場に實施して見た。ニュー・ラナークの工場に於て、勞働階級を肉體並びに精神の荒廢より救ひ、知性の暗愚化を補ひ、更に家庭生活の道德性を恢復し、幼年者を保護せんとする熱意に燃えて、勞働者の模範住宅を設け、託兒所、圖書館、勞働時間の制限等に着手し、勞働賃銀を引上げた。託兒所に預けられたる兒童達は、夕刻母親が受取りに來ても、歸宅するのを嫌ふ程であつたと言はれる。彼の下で働く勞働者二千四百人の中には、泥酔者も賭博者も暴力沙汰も殆ど後を絶つた。彼の formation of character 人格の形成が、たしかに實證された。温情主義は成功したかの如く思はれた。社會は、オーウエンに對して絶讚の聲をあげた。勞働者は、「我等の良き親方」として、心から信頼した。

ところが、一八一五年に産業界には大恐慌襲來、會社の倒産相次ぎ、信用の全面的崩壞、

失業、解雇等の社會悲劇が展開するのを眼のあたりに見たオーウェンの心は、少からず動搖し始め、温情主義の限界に就て深く反省せざるを得なくなつたのである。同時に、資本主義機構そのものが、新たに問題の對象として視野に浮び上つて來て、彼の實踐運動は、第二期に入つたのである。

温情主義は、利己心に依つて荒廢に歸した資本主義の社會に於ては、砂漠の中に於けるオアシスの如く、無きより遙かに優るのである。オーウェンの如く、恵みを施し、徳を布き、勞働者翕然として景附しつゝある風景は、たしかに好ましきものに相違ない。そこには、非難に價するなにもも發見されないものである。併し、資本主義運動法則は冷酷である。鐵の如き必然性を以て、温情主義の限界を微塵に碎いて、荒れ狂ふ。如何程の温情資本家も、資本を代表する限り、資本の鐵則、利潤の制約を破ることができない。不景氣と恐慌に際して温情の美しい幻想は、忽ち消滅して、マルクスの所謂、資本家魂が、吸血鬼の魂がその本性を遺憾なく現はしてくる。加ふるに、オーウェンの如き、異常な良心の所有者は、これを別とするも、他の資本家にして、オーウェンを模範として、厚生制度を實行せるものも、温情主義は、

屢々墮落して、勞働階級に對し、私生活の干渉を行ふ傾向を伴い安い。善き親方は、やがて「家父の權」を掌握せんとするに至る。そこで、階級意識が漸次濃化するに従ひ、雇主を仰いで、家父と仰ぐが如き思想は、むしろ、冷笑に價する時代錯誤と視られるようになった。オーウェンをして、單なる温情資本家としての立場を放棄して、新たに社會運動家として、奮起せしめた現實の事情は、かくの如くであつた。彼は立法運動に於ては、一八一九年の婦人幼少年勞働年齢の制限に成功した。彼は今や社會主義者に轉向しつゝあつた。彼は思ふに「機械や技術の進歩に依つて、生産力は、すばらしく發達して居る。五十年前の少くとも、二四〇倍に達して居る。従つて、勞働者の生活は、二四〇倍裕福でなければならぬ。が、事實は、これに反して、勞働階級が、貧苦と缺乏に苦惱しつゝあるのは、生産されつゝある尨大なる富を、「利潤」の名稱で、資本家階級が、掠奪しつゝあるからである。「利潤」は、勞働階級の厚生のため取戻されなければならない。」

オーウェンの共產主義理論は、勞働階級には、天來の福音として歡迎された他面に、資本家階級には、「産業平和を亂だす惡鬼の出現」として、恐怖され、從來の彼に對する稱讚は、今

や急轉して誹謗と迫害に變じた。殊に彼の、宗教、私有財産、結婚制度に對する忌憚なき批判は、財界人達の憤激を買ふに充分であつた。

一八二五年、ロバート・オーウェンは、彼の年來の持論、人間の性格を善良に構成するためには、社會環境を改變しなければならぬ。資本主義經濟機構に於ける利潤は掠奪であると云ふ確信に基いて、三萬エーカーの面積の土地を、米國インディアナ(Indiana)州に買収し、共產主義の理想を實踐せんとした。彼は、社會に對して、自己の偉大なる抱負と經綸を發表し、同志の來り投せんことを要望した。このステートメントに、天下の支配階級は、一齊に冷罵を浴びせたけれど、若き人道的まぼろしを見る人々の間には、電氣の如き感動を與へ、その傘下に馳せ參するもの相次ぎ、一八二五年には九百人の多きに達した。そして、その名稱を The New Harmony Community of Equality と憲法第一條に規定し、第二條以下には、平等の理想を、教育の機會、生活資料の配給、住宅構成等を通じて、啓示せんとした。何人も他人を侵害し、何人も他人より侵害を蒙ることなき、家族愛の原則を規定した。會員達は、始め純情と熱情に燃えて居た。意氣相投合し、精神相契託して利の爲に變せず、害の

ために更らないように見えた。このまゝで行けば、オーウェンの事業は、大成功であつた。

然し、人の熱情は冷め易く、意志は、くだけ安い。堅忍不拔の精神も、次第に怠惰放肆の慾に蝕まれ、桔据瘁勵さびたの習慣も、いつのまにか、歡樂を追ひ、安逸を貪る心に浸潤せらる。

一八二八年、六月二十二日、ロバート・オーウェンは、裏切られた失望と悲しい心を抱いて、既に魂を失つたニウ・ハマモニイの村を見捨てたのである。

この文を書いて居ると、私は、東大經濟學部の學生時代(大正八年頃)、武者小路實篤を中心とする白樺派の人々と、河上肇博士との間に展開した一大論争を回想せざるを得ない。當時武者小路氏は、宮崎縣に一定の土地を選定して、協力主義、共產主義、兄弟主義に基礎を置く新らしい村を計畫し、其の意見を天下に發表された。氏は、オーウェンと同じく、「人間性」を信頼し、その完全性に就て非常に樂觀的な見解を抱いて居た。これに對して、河上博士は「社會問題研究」と云ふ冊誌で、ロバート・オーウェンの共產村が、いたましく失敗した歴史を語り、武者小路氏の計畫が純眞であることは信するも、全資本主義經濟機構に對しては、倫理的刺戟以外には大きな經濟的變動の動力となることは不可能であると論ぜられて

居る。これに對して、武者小路氏は、ロバート・オーウェンと同じく、非常な熱心と確信を以て、數十人の同志と共に新らしき村を實現し、家族的な生活を創造すれば、共同精神が發達し、これが天下萬人の心へと發展して行つて、やがて、「萬丈の堤も蟻の穴より崩る」るが如くに、世界の資本主義機構も土崩瓦壊するに相違ないと云ふ意味を發表されて居た。

我々は今日迄新らしい日向の共產村は、尙繼續して居ることは聞けど、日本資本主義機構が、この新らしい村に依つて、大影響を受けたことは、私は、不幸にして聞かない。日本資本主義はそれ自體の運動法則により、其の後鐵の如き進行をつゞけ、第二次世界戦争の終了と共に、而して日本の敗戦と共に、最後の息を引き取らうとして居るにすぎないのである。

一八三二年、オーウェンは、更に利潤なき交換制度を創造せんとして、ロンドンに「國民均等勞働交換所」(National Equitable Labour Exchange)を設けた。會員は、自己の製作品を交換所に提出して、その製作に費した時間數を申告して、それに相當する切符を受取ることができた。そして、その切符により、同じく提出されて居る他の品物を得ることができ、併し、これは、科學的に精練されない投下勞働説に立つて居たから、製作技術が熟練して、

僅かの勞働時間で完成するようになれば、與へられる切符數が僅少になり、反て製作者は、損害を受けると云ふ珍妙な現象を引き起して、見事に失敗した。

一八三四年、オーウェンの生涯は、第三の段階に進んだ。「新道德世界」The New Moral は、彼の世界觀を世に問ふたものであつた。

思ふにオーウェンの生涯は、失敗せると否とに拘はらず、偉大なる空想社會主義の實踐家として現れ、晩年は、權威を以て語る豫言者として現れたが、一貫する精神は、「利潤なき社會」の創造にあつた。利潤こそ、人類社會が犯した「神の禁斷の果實」であつた。利潤の果實を食らつた罪によつて、創造者の怒りは、人類をエデンの樂園より追放した。社會の悲劇と災厄は、こゝから發生した。人間の眼は、光明を失ひ、その心は、平安を喪失した。暗黒にやどる梟の如く、濕めつた死蔭に住む蝮のやうに、人間の魂は、かじんで塵埃を匍匐するようになつた。利潤は、正義に悖り、社會平和を脅かし、又恐慌の原因である。利潤の介在によつて、勞働階級は、自分達が造つたものを買ふことができない。この問題を解決するために、彼は、國民平均勞働交換所を設けたり、共產村を實行したりして、悲惨な破綻を経験したの

である。空想社會主義失敗の最大原因として考へられるのは、自己の頭腦に計畫された意圖を、資本主義の内部の運動法則から遊離して、外部に於て實現せんとしたことにあると一般に語られるが、この事は又次のことをも包含するのである。即ち、オーウェン其他のユートピアンは人間の現實の社會環境に、大きな弱點「利潤制度」を發見し、それによつて人間の性格がゆがめられてしまつて居ると考へ、立派な環境が與へられれば、利己心は、人間理性社の發達によつて克服され、やがて善良な性格が形成されると信ずる、即ち、ユートピアンは會が其の中で現實に發展してきた運動法則を促進させることを忘れて、啓示されたる理想社會の秩序を以て、直ちに全體としての社會生活に置き換へんとするものである。其の上、彼等は、外部的な秩序を通じて、やがて、人間のうちに、社會主義の心情と完全な平等とが容易に育成されると確信したから、社會主義による資本主義の克服は、左程に困難ではないと考へた。

ロバート・オーウェンと並んで、吾々は、フリーエ及びサンシモンの二人を空想社會主義者

として擧げることができる。

フリーエ (Charles Fourier) は、一七七二年フランスのプザンソンに金満家の羅紗商の子として孤々の聲を上げた。學生時代より、遠邁不群にして、學を好み、志操あり、耿介にして純素、利慾を屑しと^{いさ}なかつた。プザンソン大學を拔群の成績で卒業した。

父の没後、リオン市で商會を開いて、遺憾なく經營の才を發揮した。併し、佛蘭西革命で全財産を失ひ、投獄されて、出獄後二ケ年して、マルセイユの食糧商品商會の支配人となつた。彼は、幼年時代の不圖した事件より、商業の倫理性に付て、甚しく懷疑的になつて居た。たまたま、彼のこの疑問と煩悶を裏書する事件が起つた。當時の佛蘭西は、食糧難で大衆の窮乏益々甚しく、飢餓が迫つて居たにも拘はらず、商會主は、高價を維持せんがため彼に命じて、小麥を海底に放棄せしめた。こゝに於て、彼の現社會機構に對する憤懣は、遂に爆發して、彼をして、資本主義に見切りをつけ、新たに社會主義思想を抱懐するに至らしめたのである。一八〇八年、彼の「Theorie des quatre Mouvemens」が發表された。

フリーエのこの「四期運動理論」は、人類學的に考察して、人間が發生してから遂に消滅

する迄の期間を四つの段階に區別する。第一期は幼年時代として、約五千年、第二期は、青年時代として三萬五千年、第三期は壯年時代として同じく三萬五千年、第四期は、老年時代として五千年とする。而して現在の人類は、第一期幼年時代の末期に生存して居るものである。幼年時代も、五つの時期、樂園期、蒙昧期、家父期、未開期、文明期と段階づけられる。フリーエの考ふる處によれば、あらゆる時代は、それが發生した存在の意義を有すると同時に、その發展の過程に於て、次の時期の契機を孕みつゝ遂に消滅すべき歴史的運命を荷ふ。現在の我々は、文明期の末葉に生存しつゝあるが、文明期の原則は、個人的自由にあつた。しかし個人的自由は、各個人の利害相對立し、吞噬相食み、襲奪是れ争ふ亂闘を展開し、これはやがて、その反對物たる産業獨占の運動に變化しつゝある。それと同時に、この獨占運動と並んで、被壓迫階級は、相互扶助の組織、即ち、協同組合の組織を創造してこれに抗争する。産業獨占運動と言はず、協同組合運動と言はず、これは、來るべき時代の契機である。獨占運動は、現實には産業界を少數封建財閥が支配する機構ではあるが、産業それ自體は、自由競争とは反對に統一されて行くのであるから、やがて、この貴族的獨占支配に替つて、協同

組合が産業界を管理する時代がくる。かゝる時代は、保證主義の時代である。

これが、フリーエの歴史觀であつた。我々は、彼の思想の中に、他の空想社會主義者ロバート・オーウェン及びサンシモンの歴史觀乃至社會觀とは異なる辨證法的な歴史觀が展開されて居るのを見る。即ちあらゆる時代は、發生の充分の意義をもつと同時に、存在及び消滅の過程を辿ると云ふ觀念である。同じく空想社會主義者とは、言ひながら、フリーエの思想は、後述するマルクスの唯物史觀に近づきつゝあることを發見する。それにも拘はらず、マルクス及びエンゲルスが彼を空想家のカテゴリーに入れて嘲笑したのは、その歴史觀よりも、むしろそれを離れたフリーエ自身の實踐的態度を嘲笑したのだらう。フリーエは、一八三二年、ベルサイユ附近に、同志と共に彼の理想社會の實驗としてフアランチュ *Phalange* を建設した。これは、農業本位の協同組合で、八百人から千六百人位の共同生活體であつた。同一の建物に住み生産消費を共同にし、最少限度の生活が保證され、その基礎の上に、相互に他を侵害しない私有財産が認められる。友愛と自由意志とを基調とする勞働組織が打ち立てられる。然し、かゝる實踐運動は、強大なる資本主義機構の中にあつては、僅少の倫理的影響以外、

彼の時代に充分の成果を収めることは、できなかつた。こゝにも、空想家の失敗があつた。

空想社會主義者の最後の一人、サンシモン（第一編第一章、階級發生の社會的地盤）に於て既に述べたから、省略する。

確かに、協同組合は、資本主義經濟機構に於て、今日驚異すべき大發展を來たしつゝある。ロバート・オーウェン及びフリーエの夢は、日夜成長しつゝある。其の意味に於て、空想も空想でなくなりつゝあり「利潤なき社會」は資本主義の母胎内に成育しつゝある。とは言へ、諸君は、早呑込みしてはいけない、「何等の政治闘争を経過せずとも、自然成長的に、資本主義機構が解消して、新理想社會がひとりでに現れる。」と。資本主義の崩壊は、その基礎である法的根幹、私有財産制度、産業自由制度、契約自由の制度の社會革命の過程なくしては、不可能である。

消費組合組織は、確かに將來社會の萌芽ではあるが、消費組合の自然成長だけで、資本主義の最後の段階たる金融資本主義の金城鐵壁が、雪が朝日に溶けるやうに消散するなんてなま

やさしいものではない。それどころか、金融資本主義内に於ては、消費組合さへも、いつのまにかその傀儡に墮落する危険が多いのである。

第四章 科學的社會主義

科學的社會主義は、カールマルクス及びエンゲルスの歴史觀に基礎を置いた社會主義で、今日では、マルクス派社會主義の別名である。空想社會主義は、社會改造に際し、社會自體の發展から出發しないで、自己の理想から出發しようとする。資本主義機構が自己の胎内で創造する原動力から出發しないで、形式上の意圖から出發する。かくて、現實社會の發展に根據をもたない彼等の計畫は、失敗に歸し、無力化した。しかし、空想社會主義者は、ロバート・オーウェンやフリーエの當時だけ存在したわけでない。科學的社會主義によつて指導される民衆運動の盛んな現代でも、多種多様な異なつた反動形態で發生しつゝあることを忘れてはならない。擬裝的な社會主義、即ち國家社會主義にしても、また學國一致の美名の下にブルジョア政黨と吻合せんとする民主戰線統一運動でも、或はまた産業平和の呼稱の下に

計畫される勞資協調運動でも、これらは、社會革命から勞働階級を遊離させる以外、何等の意義をもたらさない反動的方法である。

社會現象の科學的認識は、資本主義の變動期に於て、社會民衆がもたねばならない重大な武器である。これを有つことによつてのみ、我々は、歴史を正しく導き、社會を根本的改造にまで意圖することができる。

社會現象は、動態的に研究しなければならない。社會現象の中に凝固して、一定の間不變に見える關係に執着せず、生きた流動過程として、辨證法的に理解しなければならない。勿論、我々は、資本主義の現象の中に暫時の安定した關係を具有して居ることを知る。しかし、それは、絶對的な静止の關係ではなく、無止無休な活動の安定性である。一見不變に見える關係もその實は過程である。

マルクスは、資本論の冒頭に自己の科學的方法を明らかにして、「一定の社會は、その運動の自然律の向ふ處を明白にし得たとしても、決して、自然律に即應する發展の段階を一足飛びにとび越え得るものではなく、又法律を以て廢止し得るものではない。しかし、生みの苦

るしみを短縮し、緩和し得ることは事實である」。

即ち、マルクスは、我々は勝手氣まゝに歴史の過程をだしぬいて躍進することは許されないが、新しい社會を生み出す陣痛の苦しみを和げ、其の過程を短くすることはできると云ふのである。「新社會は、既に現實資本主義社會の母體に宿り、日も夜も生育しつゝある」マルクスのこの資本論の序文に掲げられた有名な文句は、云ふまでもなく、彼の唯物史觀からの派生である。

唯物史觀 (Materialistische Geschichtsauffassung) は、マルクスの著「經濟學批判」の序文に示された公式である。今こゝに便宜上、その全文を掲げることによらう。

「人類は、彼等の生活の社會的生産に於て、一定の・必然的な・彼等の意志から獨立した關係、即ち彼等の物質的生産力の一定の發達段階に即應した生産關係に入る。」

「これ等の生産關係の總和は、社會の經濟組織をなすもので、法律上政治上の上部組織を作り上げる現實的基礎であり、またこれに相應した一定の社會意識形態を生ぜしむる。人類の意識が人類の生活を決定するのではなくて、反對に人類の社會的存在が、人類の意識を決定

する。」

「然るに社會の物質的生産力は、その發達のある段階に於て、現在の生産關係と衝突するようになる。換言すれば、この生産關係の法律的表現に過ぎない所の、而して從來この生産力を自己の内部に活動せしめた所の所有關係と衝突することとなる。即ち、この生産力の發達形式たる事實から一變して、これが障害物と化してくる。茲に於て、社會革命の時代が始まる。經濟的基礎が變化すると共に、その巨大なる上部組織の全部もまた、或は徐々に、或は急激に革命される。」

「これらの革命を考察するについて自然科学的に、眞實なる立證をなし得べき經濟的條件の物質的の革命と、人類がこの矛盾を意識して、これと決戦せんとするところから生ずる法律的、政治的、宗教的、藝術的、哲學的、これを一言にすれば精神的革命とを、常によく區別する必要がある。我々が或個人を批判するに、決して多くその人の自ら考へるところに依らざると同じく、我々が或革命時代を批判するのにも、決して多くその時代の意識によることは出来ない。我々は物質生活の矛盾の中からして、この意識を説明せねばならぬ。」

「或る社會形態は、その形態のもとで發展した生産諸力に對して、その形態が狭まざるやうにならないうちには決して顛覆し去るものではない。」

「そしてヨリ進歩した生産關係が出現するには、それを決定すべき物質的條件が既に舊社會の翼の下に孵化されてあらねばならない。そこで人類は、常に解決し得べき問題のみを提起するものと云ふことになる。ヨリ精密にこれを考察すれば、凡そ問題なるものは、必ずこれを解決すべき物質的條件が既に存在するか、或は少くとも發生しかけてゐる所にのみ生ずることが知られる。」

「我々は、アジア諸國、上古諸國、封建時代、及び近世資本制時代の各生産方法を以て、社會の經濟的進化の列次的大別とすることが出来る。而して今日の資本制生産關係は、社會的生活に於ける最終の軋轢形態となつてゐるものである。而してこの軋轢は、個人的軋轢の意味に解すべきではない。それは、各個人の社會的生活條件から生ずる軋轢なのである。」

「然るに、この資本制社會の内部に發達した生産力は、同時に又、右の軋轢を解決せしむべき物質的條件を作る。かくして、資本制社會形態と共に、人類の歴史前期が終結を告げるの

である。」

こゝで、我々は、唯物史觀を一々解釋する餘裕がないのを遺憾とするが、結局マルクスは、資本主義社會を以て、當然發生すべかりし、歴史過程と見ると同時に、やがてそれ自體の中から、それを否定する因子を生みだし、次第に崩壊の過程を辿り、消滅するものと云ふ觀方である。而して、唯物史觀によると、社會の基礎は、歴史的に規定された生産過程であつて、一切の制度文物は、それに依存するものである。現在の資本主義社會の性格を知り、その運動法則を究明することは、やがて、この次に來るべき經濟組織を豫測することとなり、從つて又それに基く、全社會組織を豫測することとなる、かようにして、マルクスは、唯物史觀の立場から、現經濟社會の運動法則を曝露したのである。人間は、政治、科學、宗教等に從事する前に、食ひ、着、住むことを解決しなければならぬ。従つて、生活のための物質手段の生産が、またそれと同時に、或一定の段階の經濟組織が、他の社會、文化現象の具體的な基礎をなすと云ふことは、當然である。」

經濟組織の基礎單位をなすものは、生産關係である。人間は一人ぼつちで自然界と鬭争す

るものでなく、必ず他人と共同關係を結んで、自然界に働きかける。ところが、この生産關係は、歴史的に變動する。その關係の中で、生長しつゞける生産力との衝突によつて、遂に崩壊すると、その綜合組織たる經濟組織も除々に、或は急激に革命され、その土臺の上に立つ全文化構造も變革される。こゝで生産力と云ふのは、全くの社會現象であつて、單なる力學的、物理學的屬性のことではない。同一の機械でも、資本主義制の下で使用される場合と社會主義制度の下で使用される場合とは、勞働力の上に齎らす意味が異なる、前者は搾取であり、後者は左様ではない。技術が發展しても資本主義の下では、勞働力の失業となつて、生産力の發展を意味しない。獨占資本たるトラストは、特許權を獲得するや、これを獨占せんとし、競争者に對して、これを隱蔽する。即ち社會的には生産力を阻害する。恐慌期に於ては、技術的には道具や機械は立派に残存しながら、生産力にはならない。

生産力の發展形式が生産關係であつて、その綜合形式が、社會的、經濟的組織となる。而して、生産關係及び經濟組織は、人間活動を通じて、具現されると共に人間の活動そのものは、生産力に依つて歴史的に條件づけられる。人間は、過去の歴史の次の段階として、一定

の生産力と生産関係を繼承し、その活動を通じて、生産力を發展させる。

資本主義生産関係が、封建社會の次の段階に起つたのは、封建末期に於て、生産力が封建的生産方法と衝突するに至つた時に、新らしい資本主義的生産関係が、生産力と適合するようになつたからである。

資本主義的自由競争は、確かに生産力の發展に拍車をかけた。封建農奴制、職人組合の制限は、生産力の束縛と化して居た。併るに資本主義の到來は、土地から労働者を解放して、資本家の下に集中せしめ、他方には、資本の集中によつて機械を導入し、労働生産力を増大した。

ところが、この同じ資本主義生産関係は、發展の後段に於ては、最早桎梏の機構と化した。この生産力に適合する関係は、資本主義生産関係そのものではない。それは、次に來るべき社會主義生産関係でなければならぬ。これは、生産手段の所有が、私的個人の手から離れて、社會の所有（社會化）に歸することを意味する。併し、これを誤解して、資本主義の生産関係が、自然發生的にスムーズに社會主義に移り得るものゝ如く錯覺してはいけぬ。移

るためには、無産階級の政治革命を必要とする。だがこの強大なる無産階級の抗争は、資本主義の母胎内に孕まれるのである。無産階級は、生産力を束縛する資本主義生産関係に抗争する革命の代表者として現れてくる。處が、資本家階級は、どこまでも、この生産関係を維持せんとして、反動化する。資本主義の世界では、労働は、一の企業内に於ても分化して居るし、それぞれの企業も、全社會内に於ける分業である。即ち、生産と労働は社會化して居る。しかるにも拘はらず、生産手段は、私人（個人又は會社）の占有になつて居る。所有關係は、社會化されて居ない。この矛盾こそ、恐慌となつて爆發する。かゝる社會では、生産を全部の社會の必要に適合するように計畫化することは、できない相談である。各資本家は、物價の動きを唯一の目標として、企業を擴張したり改變したりするに過ぎないからである。彼は、唯、主觀的に自己の利益だけを腐心して動くために、社會全體としては、生産が無政府的、無計畫的にならざるを得ない。恐慌が発生すると云ふことは、一工場内に於ける組織的且つ畫一的生産が、この組織の上にあつて、それを包括する社會全體の生産の無政府性と衝突するやうな歴史的段階に、資本主義が達したと云ふことを物語る。この現實は、資本家

階級に取つても明白に意識される。と云ふのは、恐慌期においては、大小無数の夥しい資本家の破綻によつて尤大な資本の集中が行はれる。資本主義生産方法の全構造が、それを育成し發展さしてきた生産力の重壓の下に身動きがとれなくなる。數十億圓の機械や工場が運轉しなくなり、資本として作用しなくなる。それに伴ふて、數千萬の労働者が失業して、生産手段から空しく遊離して居なければならぬ。生産手段の相對的過剰が貧困の原因となる。何となれば、資本主義に於ては、生産手段は、それが豫め資本として活用され、勞働力と結合しない限り、作用しなくなる。これを要するに、資本主義生産方法自體は、生産力を引きつゞき統轄する能力なきことを實證し、他方においては、生産力自體が、愈々資本主義から自己を解放せんがために邁進しつゝある。

恐慌は、併し、永遠に同一種類の循環過程をくりかへすものではない。恐慌によつて、資本主義の矛盾は、愈々強化される。その度に資本主義は、自己の破局に向つて、盲進をつゞける。恐慌は、より世界的になり、それと共に、より深刻となり、資本主義は、土臺から震撼せざるを得ない。他方では、階級闘争が熾烈化してくる。

恐慌は、資本及び生産の集中に拍車をかけ、生産は、内部に於て合理化されてくるから、愈々社會的性質(分業)を帯び、生産の私的經營との間の矛盾は激化してくる。今や無産者革命は避けがたき歴史的運命となる。無産者革命は、資本家的生産關係と生産力との矛盾を解決する唯一の方法である。と云ふのは、この矛盾を解決するためには、ブルジョア權力のプロレタリアによる奪取が必要である。それによつてのみ、生産手段の社會化が具現される。社會改良主義者は、資本主義下の階級闘争の任務を改良の線にのみ集中するものであつて、プロレタリアを重大なる歴史的任務から遊離させる反動の役割をつとめるものである。

もしも、資本主義が、その最後の段階に於て、無産者革命へと移動することが妨害されたとしたら、生産力は、永い間硬塞するの運命を餘儀なくされるであらう。古代に於て、生産力と生産關係の矛盾が、革命によつて打開されなかつた時代がある。ローマは、スバルタカスを首謀とする奴隸一揆の失敗以來、腐朽した大厦の如く、ゲルマンの野蠻人が外部から怒濤の如く侵入してくるまで、其の生存を繼續した。これは、次の時代の生産方法の擔當者となるような、革命階級がなかつたからである。そこで生産力は永い期間閉塞した。

しかし、資本主義はさようではない。資本主義の發展行程は、其のプロセスのうちに、プロレタリアの老大な社會層を創造し、それを集中し結集するのである。資本家は、労働の緊張度を強化し、機械の附屬品たらしめんと努力する。永久に労働者を頹廢と暗愚の状態に束縛せんとする社會心理的傾向を有する。ところが、これは反て、逆効果を齎らすのである。即ち労働階級の階級意識を發生させ、資本家の攻勢から自己を防禦し、これと抗争する組織を造り出すに至るからである。

以上が科學的社會主義の概要である。レーニンによると、科學的社會主義の理論は、次の時代を創造するために、是が非でも、労働階級が攝取しなければならぬ武器である。それなくしては、労働階級は、組合をつくつて資本家と抗争すること、労働者諸彈壓法令の撤廢や社會立法運動に参加する必要があると云ふ程度の自覺に達するに過ぎない。然し、一度、この理論を理解してしまつと、體制としての資本主義を革命する必要を悟り、社會主義の旗幟の下に力を結集するに至るのである。科學的社會主義の理論は、資本主義社會の枠内では、

階級利害の相剋は、遂に解決されないと云ふことを知らしめ、同時に最高のプロレタリア實踐の武器を大衆に普及するのである。

かく、レーニンは、語るのである。

以上の科學的社會主義の理論は、ヒルファディング *Hilferding* の一九一〇年の發表になる金融資本論 *Finanz Kapital* に於て、資本主義發展の諸現象の理論的分析に明示されて居る。獨占を本質とする金融資本主義の發展は、大産業企業の急速なるカルテル化を實現し、従つて勞資の軋轢に於ける資本家側の團體的勢力を絶對的に強大ならしむる。これは、資本輸出に拍車をかけ、帝國主義膨張の最大條件となる。この膨張は、社會的には、資本主義の生存條件であり、經濟的には、利潤率の一時的向上を可能ならしむる。この膨張政策は、一時は、あらゆる所有階級を金融資本の傘下に糾合する。しかし、この政策が本質に於て、反社會的であり、少數巨大資本家の利益のため、多かれ、少かれ、自餘の諸階級の利益を犠牲にし、これを從屬化せんとする傾向にあることは、明かである*。

* 猪俣津南雄著、金融資本論、三六四頁。

即ち、ヒルファーチングは、自由主義に出發した資本主義が、十九世紀末葉より次第にカルテル化して、事實上の獨占、他言すると私的統制團體に轉化した経過を論證し、第一次歐洲戰爭前には、完全に金融資本主義化した事態を物語る。同じく、レーニンは、より實證的に、「帝國主義論」の中で次の如くに語る。

『集中過程の結果、全資本主義經濟の先頭に立つて居る少數の銀行の間に、當然互に獨占協定を結び、銀行トラストを形成しようとする努力が益々強く現れて来る。アメリカでは、九つではなくて、二つの最大の銀行コンツェルン、即ち億萬長者ロツクフェラーとモルガンの銀行が、百十億マークの資本を支配して居る。ドイツでは、上述したディスコント・ゲセルシャフトによるシャーフハウゼン・バンクフェラインの併合は、取引所の利益を代表する新聞「フランクフルテル・ツァイトウング」をして次の如き解釋をなさしめた。「集中運動の進展とともに、巨額の信用を求め得ることの出来る範圍は絶えず縮少し、その結果大工業は益々、ごく少數の銀行コンツェルンに對して從屬するやうになつて行く。工業と金融界との間に內的關連が存する場合には、銀行資本に頼つてゐる工業會社の運動の自由は、制限される。そ

れ故に、大工業は、銀行のトラスト化の擴大を交々の感情を以て見てゐる。けれども、個々の大銀行コンツェルン間には、結局は競争の制限に歸着すべき、ある協定を結ばうとする兆がすでにしばしば現れてゐる。

銀行制度の發展の最後の言葉は、やはりまた獨占である。

銀行と工業との密接な關係、正にこの點に銀行の新たな役割が恐らく最も明瞭に現れてゐるのである。銀行がある企業家の手形を割引き、又彼に當座勘定を開いても、この業務は、個々に觀察すれば、この企業家の獨立を毫末も傷けず、そして銀行はつましやかな仲介者の役割に止まつてゐたのであるが、この業務が度重なり、固定して来るや否や、工業資本家は益々完全に銀行に從屬すると云ふ結果が生ずるのである。

これと同時に、いはゞ銀行と最大の工業企業や商業企業との人的結合、即ち、株式の所有とか、銀行重役が商工企業取締役會議（或は指導部）へ入りこむとか、又はその逆の方法とかによつて兩者の融合が發展する』

かくてレーニンは、資本主義社會に鐵の如き必然性を以て進行する運動法則を明白にした

後、ドイツの經濟學者ヤイデルス氏の正確な統計を引用してゐる。『ベルリンの六大銀行は、代表者として、その重役を三百四十四の工業會社に出し、更に四百七の會社へ自分の所の人間を取締役に入れ、合計七百五十一の會社へ代表者を出した。而して二百八十九の會社に於ては二人づゝ重役を入れてゐたか、或は取締役會長（社長のこと）の地位を占めてゐた』

ヒルファーチングと言はず、又レーニンと言はず、マルクスの理論を武器として、經濟現象を分析し、産業界獨占運動と銀行集中運動が相互に反作用を及ぼしつゝ進展し、やがて、銀行と産業との融合が生じ、遂に金融寡頭支配即ち財閥支配網が形成されるに至ることの必至を辨證法的に論述した。

ヒルファーチングによると、金融資本の發展は、社會の經濟的機構と其の土臺の上に立つ政治機構を根本から轉覆した。資本主義の初段階に於ては、それぞれの資本家達は、自由競争に依つて、相互に對立した。従つて、政治の面に於ても、協同一致の態度で支配勢力たることが不可能であつた。そふする階級的要求が充分ではなかつたからである。それよりも産業家達は、天賦人權の一市民として、封建的反動勢力たる官僚主義と戦ふ必要があつた。立

憲政治建設の問題こそ彼等を過去の壓制から解放するため、舊勢力と戦はしめる一大目標となつた。初期資本主義の時代は、産業資本は、商業資本及び貸付資本と抗争した。と云ふのは商業資本、特に大規模な商業は、國家の保護干渉を要求し、特權を得て、海外貿易就中植民地貿易に従事する傾向が強かつた。又貸付資本は、國債を保證とするため國家と結合した。

ところが、産業資本主義が愈々舞臺に登場してくると、デモクラシイ運動の中に潜伏して居た勞働階級と小商人及び小工業者とが、産業資本に抗争し始めた。勞働階級は勞働組合を結成し、小工業者は産業組合を結成してそれぞれ團體運動を開始した。

ところが、現代産業の獨占運動は、資本と經營を集中することによつて、政治的利益を統一し、その經濟上の恐ろしい壓力を國家權力の上に加へることが出来る。従つて、獨占産業を統合する金融資本は、政治權力の全支配を事實上集中するに至つたのである。

立憲民主國家が成立してから、都市のブルジョアジーと大地主の利害が著るしく對蹠的になつた。産業の發展に伴ひ、前者は漸次政治の支配勢力を集中して、後者の勢力を蠶食した。工業のすばらしい發展は、農村の人口を吸集し、大地主をして勢力の不足に苦しませると

共に、都市ブルジョアの保護關稅撤廢の運動は、外國の穀物輸入により、地主の利益を根柢から覆へしさうになつた。かくて、先進國イギリスでは、自由貿易の輝しい時代が訪れたのであつた。

フランスは、五十年、ドイツは、八十年にして産業革命が起つた。これらの歐洲諸國は幼稚工業を保護するために、保護關稅を發達させたから、地主との利害は對立しなかつた。然しこれらの國々が次第に工業生産力を増大するに至つて、農産物の價格が暴騰したために、工業資本家は、穀物關稅の撤廢を要求し始め、大地主の利益を脅し始めた。

ところが、金融資本主義の時代になると、保護關稅は、も早幼稚産業の保護とは異り、高度に發達したカルテル保護關稅に變つた。これは、十分の輸出能力ある工業カルテルが、國內市場に於て高物價を確保するために、外國よりの輸入に高率の關稅を要求して、供給を制限せんとする。カルテル化それ自體が特別利潤の確保の運動であるが、關稅は、その上更に特別利潤を食らんとする動機をもつのである。農産物の價格も一定の水準を保つようになり、大地主と都會の産業資本家の利害が次第に共通するようになる。むしろ彼等は、新らし

く、共同の敵、勞働階級に直面する。勞働條件の改善運動は、農村勞働者にも波及するからである。大地主と産業家は、團結せざるを得ない。其の上大地主は、保護關稅政策により、地代が蓄積されても、これを自己經營面積の擴張に使用することができず、勢ひ産業會社の株に投資したり、或は銀行に預金にしたりして次第に産業資本と結合する。地代の形で資金を所得した大地主を、今や産業の餘剩價値の分配に参加せしむる階級に變せしめた。

他方に於て、銀行家の方でも、土地を抵當として、農村地主に貸付けるようになつたから、地代の騰落に、極度に關心をもたざるを得ない。其の上農家の収入の増大は、必然に銀行預金の増大となるのみならず、農業それ自體への投資を刺戟する。

かくて、産業界に株式會社がすばらしい發展をとげたため、生産の直接指導の任務と離れて、配當のみを所得する金利階級（株主）の層が存在し得るようになり、各種の所有階級の間に関連の利害關係が発生した。カルテル保護關稅は、地代の騰貴と同時に産業界の特別利潤とを確保する重要なモメントならざるを得ない。

金融資本は、大地主と融合した結果、政治上の勢力を著しく發展させる。農産物の價格の

騰貴から生ずる産業資本の損失は、帝國主義政策の實行によつて、生ずる特別利潤によつて裕に補償することができる。

マルクスの集中學説は、以前は迷盲として排斥された。ベルンスタイン Eduard Bernstein は、かれの主著「社會主義の前提と社會民主黨」Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie 1899 で、イギリス、ドイツ、フランス等の國々に於て、マルクスの豫想を裏切つて、其の中小企業の數は其の後増加して居る事實を論證しようとした。獨逸に例を取ると、

	一八八二年	一八九五年	増加率
小 經 營(一人—五人)	二、四五七、九五〇	三、〇五六、三一五	二四・三%
小規模中經營(六人—十人)	五〇〇、〇九七	八三三、四〇九	六六・六
大規模中經營(十一人—五十人)	八九一、六二三	一、六二〇、八四八	八一・八

そして、ベルンスタインは得々として、「大經營が……従業員の數を一層著るしく増加した

としても、小經營の吸収と云ふことは、たゞ特殊の場合において意味されるのであつた。事實多くの場合において、大經營と小經營の間の競争は嘗つて起らなかつたし、又今後も起らない……なるほど現象の表面と形式だけに捉はれるならば、マルクス集中學説は、一大修正を必要とするものゝ如くに思はれた。レーニンの言葉を借りて言へば、マルクスの著作は、資本主義の御用學者によつても、又修正主義者達によつても黙殺されんとした。併し今日獨占は嚴然たる事實となつて居る。カールマルクスの集中理論の正しいことは、立證されて居る。

レーニンによると、近代獨占が、眞の意味で始まつたのは、一八六〇年代であつたが、それが最初に大飛躍したのは、一八七〇年以後である。一八七三年の恐慌、それにつゞいた不景氣時代に激成された。一八九〇年以後には、カルテルは、一時的現象ではなくなつて、全ての經濟社會の鐵則となつてきた。なる程、中小企業は、依然として存續して居るやうに見える。然し内面を分析すると、中小企業は、カルテルやトラストの保護下に立たざるを得なくなり、その勢力の傘下に糾合されて居る。中小企業は、カルテルの中心に立つ大企業の發展に依存するようになる。その地位は、今や補助的任務を遂行するにすぎない。獅子が分け

前を争ふ如く、大企業の競争相手として、なく、そのおこぼれを頂戴して生存するみじめな隷屬的存在と變化する。かゝる意味で中小企業は、大經營の繁榮の中に自己の利益を發見するようになる。自己の取引先の大企業が、他の大企業との競争によつて、衰退し、或は、破滅することは、結局自己の衰滅を意味する。他方では、中小企業が大企業の株主となることによつても、連帶關係が生ずるし、其の反對の場合もまた然りである。かやうにして、地主階級も中小資本家も今や金融資本の支持者として、勞働階級の前面に立現れてくる。中小企業相互の利潤率は、甚しく低いので、勞働條件の改善は、大打撃をこの階級に與へるのである。そこで彼等は勞働階級の待遇改善に對して、最も頑強なる反對者として、金融資本の前衛たる機能を果たすようになる。

最後に、ヒルファーチングは、マルクスの理論に従つて、俸給生活者、の地位と運命を説明する、この階級は其の特殊の地位に依つて、彼等の中の一部分が、支配人たる地位に上り得る道路が開かれて居るため、功名榮達の念旺盛であつて屢々勞働階級に對して、強敵として現れるし、少くとも冷淡であることも可能である。サラリーマン階級の團結に對しては、資

本家側の監視が嚴重であるし、峻烈な脅迫により切崩しも困難ではない。しかし、地球は運動し、事態は變轉する。資本主義の發展は、彼等に何時までも、因循姑息な態度を許さなくなる。大獨占は、資本主義的産業合理化の促進によつて、勞働階級と同じく彼等の地位を脅かすし、最高の榮達の地位も次第に獨占され、彼等に望み稀薄となり、赤手空拳を振つて大企業家になり得た立志傳は、初期資本主義の昔語りに過ぎなくなる。恐慌、失業等の社會的災厄が深刻化するにつれ、彼等も漸く、プロレタリアの陣營に對する従來の反感と侮蔑の心理から解放されたようになる。そして、最後に、金城鐵壁と彼等が錯覺した資本主義も、遂に動搖し始め、頼むべからざることが意識されてくると、彼等も次の時代の勇敢なる使徒としてプロレタリアの陣營に馳せ參するに至る。

以上私は、マルクス及び其の後繼者達の理論の大意を誤りなく讀者に紹介してきた積りである。既に讀者も了解された通り、マルクスの運動法則なるものは、俗學者流が批判する如く、無爲傍觀のまゝで、物臭太郎式に何等の行動なくとも、自然に展開することを主張するので

なく、それどころか階級闘争の全過程を通じてのみ展開する法則であると云ふのである。實に、金融資本は、社會全體の生産の支配權を少數の財閥の掌中に集中せしめ、更に生産の經營機能と所有機能（株主）とを分離せしめて、生産の私的統制の範圍を極度迄擴大する。これは、資本輸出を激成し、世界販路の争奪と資源地の分割、再分割の要求を熾烈ならしめ、帝國主義戦争の衝突迄世界を導く處の最大條件を創り出すのだ。帝國主義戦争の勝利によつて、自國資本が一時活路を開くので、プロレタリアも又潤されると云ふ迷信が、一時的には、彼等をして軍國主義の謳歌者たらしむる。しかし、事態の推移は、遂に彼等に反省と自覺とを齎らざるを得ない。と云ふのは、帝國主義の膨張政策は、カルテルと保護關稅に依り國內プロレタリアを消費に於て收奪するのみならず、軍備の重壓と租稅の負擔、それどころか、勞働運動に對して、資本家團體の攻勢を異常に強大ならしむる。帝國主義政策の必然の破滅たる世界戦争は、其の結果として、貧困と饑餓とインフレと苦惱と社會不安と、而して産業の破壊とを齎らすのである。併し、國民を帝國主義戦争に驅りたてた一切の力は、今や結集されて、社會革命に導き得るのである。資本主義、その發展形態たる帝國主義の眞の姿が明白

にされた場合、國民は一切の金融資本の政策を見離すのである。この政策が大多數の國民の幸福を犠牲とする財閥本位の政策であることが意識されるや否や、プロレタリアの革命運動は現實化するのである。

金融資本は、それが内に包藏する制約に依つて、財閥本位の従つて帝國主義政策以外の如何なる政策も樹立する力はないのに反して、プロレタリアは、不斷の闘争を通じて、社會主義政策へ導くことができる。金融資本に對する抗争のスローガンは、私的獨占到對立する古い十九世紀前半の「自由經濟」への復歸ではない。後退でなくして前進である。社會改良でなくして革命である。私的統制でなくして、社會統制である。少數金融貴族のための産業統制ではなく、社會全體のための意識（計畫の意）統制である。

言ひ換へると、自由經濟でも社會政策でも、私的統制でも、も早解決の限界を越える。唯解決の鍵は、生産の組織化と計畫化である。も早社會主義は、永遠の彼方にある目標ではなくなり、現實に具體化する政策となる。自己を省みない厚顏無耻な、資本主義陣營のイデオロギー「社會主義は、生産力を阻害する」と云ふ合言葉は、偉大なる社會主義國家の生産力

が躍進又躍進することによつて、微塵に粉碎されるであらう。

第五章 ギルド社會主義

ギルド社會主義 Guild Socialism は、英國勞働組合の發展を母胎として、これに英國特有の自由の精神を綜合した特殊の社會主義である。始めてこれを唱道したのは、オレーヂ (G. Orange) であつて、一九一〇年の著「國民組合」National Guild にその思想が發表されて居る。次いでノールは、(Cole) 一九一五年 The world of labour 一九一九年 The Self-government in industry 一九二〇年 Chaos and order in industry 一九二〇年 Social theory を發表して、社會の注目を引いた。又ホブソン (Hobson) も、有力なる支持者の一人であつた。

二十世紀の初頭は、英國は景氣上昇期にあつた。物價騰貴、産業界の繁榮の裏面を縫ふて、勞働賃銀は名目的に騰貴したにも拘はらず、實質的には、急激に低減しつゝあつた。勞働生活の窮迫が著るしくなつて、不滿の聲が巷に嵐の様に廣がりつゝあつた。それよりさき英國の勞働組合運動は、既に一八八九年のドック、ストライキを一轉機とし

て新しい方針に向つて進んで居た。即ち従前の技術本位の組合の古い殻を脱却して、熟練工と言はず、「不熟練工と言はず、打つて一丸として結集する産業別勞働組合、Industrial Labour Union の構造の上に立ち直りつゝあつた。言ひ換へると、最早資本主義の内部に於て、勞働條件の改善を要求する從來の估息なクラフト・ユニオン craft Union ではなく、資本主義そのものを革命せんとする能動的組合に變化しつゝあつた。この新しい組合運動の立ち直りが、大體軌道に乗つてきたので、こゝに勞働階級は、再び政治活動に向ふこととなり、一八九三年獨立勞働黨が生れて、社會主義實現のため立法運動を行ふこととなつたが、これが母胎となつて、一九〇六年に二九名の代議士よりなるイギリス勞働黨が誕生した。併し、立法運動も限界があり、政治的自由主義も、所有階級の自由にすぎないことが實證されると、勞働階級は、再び勞働組合運動に重點を置くようになった。一九一〇年—一二二年、英國勞働界は、佛國及び米國サンヂカリズム及び I. W. W. (Industrial Workers of the World) の革命的組合思想の恐ろしい侵入を受けたのであつた。其の動搖は、一時的であつたにせよ、異常なものであつた。この動搖と混亂が靜まると、後に残つたものは、ギルド社會主義とマ

ルクス組合主義であつた。

斯くて、ギルド社會主義は、サンヂカリズムとマルクス主義に對して、批判的な立場に立ち、綜合的社會主義として新らしく登場した。

ギルド社會主義に従へば、社會問題の中心は、單なる貧困の問題に非ずして、其の奥には、人格に於ける創造性の問題が潜んで居ると云ふ。人はパンのみにて生きるものに非るが故にパン問題が重大である。人間が若し豚の如き存在であるならば、どれ程酷使されようが、又どんな生活に追ひ込まれようが社會問題は發生しない。なり行きに放任してもかまわない。たとい、富の配分不平等にして、一方には、幾棟の倉庫に百年臥食の糧餉を貯へ、山海の珍味に悠々毎日を送る富豪が存在し、他方には路傍に彷徨して、飢餓、軒下に食を乞ふ者あるも、それは、大した問題ではない。又一方には、深遠の紅閨に錦繡を纏ふ貴婦人が存在し、地方には、骨肉凍ゆる寒風にも一枚の布片さへ事缺く貧家の少女ありとするも、そんなことは云ふ程野暮なことである。弱肉強食、適者生存は、生物界の常則だ。然し人間は、食ひ飲み着ることとを條件として、眞理を求め美を慕ひ、善を追求する價值精神の所有者である。即ち論理的

倫理的藝術的な存在である。而して、この三つの價值が超越的實在に關係して、體驗せしめらるゝ時、聖の意識が生じ宗教が生れる。鹿の谷川の水を慕ひ喘ぐが如く生ける人格神を慕ふのが人格の本質であり、自由は良心そのものである。この永遠性と不滅性を有する尊い人格が、黄金の鎖りに縛せられ、衣食住の苦役に奴隸化せられ、煩悶し、苦惱する處に問題の核心が潜んで居ると見る。コオルはその著、「産業に於ける混沌と秩序」Chaos and Order in Industry で提唱する。吾々が、もし、足に怪我をすれば、其の痛みが鋭く意識され、全治すれば意識の中から消失するように、人間社會が經濟問題に捉はれる時代は、經濟機構に不健全な部分があるからだ。従つて、經濟機構が健全に服し、順調なる機能を恢復すれば、社會の關心は、も早、經濟問題より解放される。コオルに依れば、經濟問題も結局道德問題である。勞働問題も歸する處、創造的自己表現的なものであると云ふ線に融化する。又ベルトランド・ラッセルは、人間一切の活動を二箇の淵源より生じて來るとして、欲望と衝動とを掲げ、人間は、自分の満足が不充分であり、その對象物を直ちに求め得られぬ場合は、想象力に依つて、自己を幸福にすると思ふ物の影像を心に喚起する。この際意志は、欲望の指導力で

ある。……とは言へ、人間活動の全領域は、欲望だけで支配されては居らない。最も本能的な部分では、衝動で支配されて居る……これは、我々活動の根柢に横たはつてゐる。本來盲目で、何等の結果を豫見するより起るものではない。衝動が強烈な時には、無意識の選擇作用に由つてその満足の結果が愉快であらうと慰撫するに至る。倫理學なるものは、かゝる行為に對して、一種の指針を與へんとするものである」と説明して居る。かくてラッセルは、所有衝動から創造的衝動の解放を主張する。

コールにせよ、ペンティにせよ、ギルド社會主義者達は、人格は、意志の主體として動き、社會のすべての統制は、その成果であると云ふ思想を展開して居る。

そこで、これらの學者の社會觀は、根柢に於て機能原理の社會觀となる。(the functional principle) 而して、社會の中で重要な意義をもつものは、共同社會 Community と聯合體 association である。それでは、共同社會は如何なる本質を有するかと言へば、コールは、或程度まで、共同の目的と利益とを自覺した雑多な社會群の複合體であるとして、不斷に變轉する慣習、風俗に依つて結合されて居ると云ひ、それ故、共同社會は、最も包括的な且つ弾力性

ある形式の定義で、本來は主觀的で、各人がそれを意識するに依つて成立するものであると述べる*。

次に聯合體とは、「一つ或は數個の共同の目的を追求するために、一致した行動をとる人々の群れである。個人が共通の目的を實現するため、創り出した團結である……」

そこで我々は、コールの社會觀の基礎になつて居るものが共同社會でなく、聯合體であることを知る。而して、聯合體を形成するものは、個人であり、個人を動かすものは、自律的意志であるから、實在するものは、個人意志及び聯合體だけで、共同社會は實在性をもたず、主觀的なものとなる。聯合體の場合には、それを結合する原理として、共通の目的と共通の意志とを前提とするけれど、共同體の場合には、かゝる判然たる唯一共通の目的は自覺されず、漠然たる共同意識で成立し、主觀的で氣まぐれである。そして、其の範圍も不明確で伸縮自在である。聯合體は、目的と機能によつて結合せしめられるから、目的の種類によつて、多様に成立することができる。

* Cole, social theory. P. 10

- 1 政治聯合體 (Political association)
イ、國家、ロ、議會、ハ、政黨等々、
- 2 職業的聯合體 (Vocational association)
イ、勞働組合、ロ、株式會社、ハ、辯護士會、
- 3 消費的組合 (appetitive association)
イ、消費組合、ロ、ガス使用組合、ハ、隣組、
- 4 宗教的聯合體 (religious association)
イ、教會、ロ、寺院、ハ、宗教青年會、
- 5 豫防的聯合體 (provident association)
イ、信用組合、ロ、相互扶助會、
- 6 博愛的聯合體 (Philanthropic association)
イ、赤十字社、ロ、財團報恩會、
- 8 社交的聯合體 (Socialable association)
イ、校友會、ロ、實業俱樂部、

9 思想的聯合體 (theoretical association)

イ、各種學術研究團體、

聯合體は、目的による結合である故、成員の自由は、その目的と機能により制約される。即ち、聯合體は、それ自體によつて、強制力を所持する。各成員は、會員であると云ふ資格と共に規約に服従する義務がある。それでは、一種類の聯合體と他種類の利害の相刻は、如何に調和されるか。コオルは、無造作に聯絡委員會 (Joint Council) で決定すると見て居る。殊に政治的、職業的、消費的の聯合體より代表者を選出し、其の代表者に依つて、最高聯絡委員會を組織して、その決定に統制權を附與すると云ふ。

こゝで、吾等は、ギルド社會主義の國家觀の特質を検討する順序に到着した。

ギルド社會主義は、個人の意志を絶対的存在と見て、國家を單にそれから派生した擬制と考へるから、個人に内在しつゝ、個人とは獨立する國家、たといそれが民主的國家觀にせよ、國民個人の意志とは異なる處の永久の生活體をなす國家、即ちそれ自體に目的と意志力を有す

る國家の實在は、コオルの否定するところである。彼の共同社會と言ふて居るものも、凡そ、かかる國家觀とは、縁遠いもので、それ自體單一の目的を有せず、且つ獨立性をもたない。雜ばくな、伸縮自在の復合體である。他の聯合體にしても、存在するものは、個人の意志だけであるから、團體の名目で個人意志に制壓を加へてはならない。コオルの國家觀によれば、國家そのものは、政治聯合體の一つにすぎない。勿論「國家は、最も永續的な且つ最も大なる聯合である」とは言へ、國家は、個人意志に對しては、遙かに遠慮勝ちでなければならぬ等のものである。

我々は、國家の活動を三方面に分けてきた。一は、經濟的機能、二は、政治的機能、三は利害對立の裁決であつた。コオルによれば經濟機能としては、國家は地域團體たる消費者を代表し得るとしても、生産は、直接國家が管理すべきものではない。第二の政治機能だけは、國家の重要な任務である。第三の利害對立の裁決に至つては、最高連絡委員に委すべき性質のものである。

以上がギルド社會主義の理論家、コオルの、社會理論及び國家觀の概要である。

ところが、コオルは、其の後間も無く、レーニンの「國家と革命」の影響を受けて、ギルド社會主義再論 (Guild Socialism Restated) を發表して、コンミュン (The commune) なる概念を新らたに採用して居る。前の著述では、コオルは、共同社會の概念を伸縮的な不明確なものたらしめたが、この著書の中では、一切の機能社會の根幹として、それを綜合する共同社會の組織を導入するに至つて居る。勿論従來の行きがより上、國家に全權を委ねることに強く反對するとは言へ、統治權の主體として、利害對立の裁斷を行ふ國家なる概念を前面に押し出して、國民的コンミュン National Commune なる言葉を使用する。各種ギルドの代表者、及び地方コンミュンの代表者が組織する中央委員組織であるが、これは斷じて、官僚的な統制機關ではないことが、強調されて居る。

こゝで、吾等は、ギルド社會主義とマルクス社會主義との異同を比較して見たい。

ギルド社會主義は、マルキストが、賃銀制度を隷屬關係と看做し、生産手段の私有を禁止して、その社會化を企圖することに賛意を表する。然し、共同社會が、産業を直接經營指導することには、強く、反對する。生産手段の所有は、コンミュンの手に集中しても、生産の

直接の經營は、勞働組合に管理さるべきである。そこで、ギルド社會主義の要求は、マルクス社會主義の要求たるよりも、サンヂカリストの要求に近接して来る。即ち、賃銀制度の撤廢 Abolition of wage System、産業自治 Self-government in Industry と云ふ二つの點に於ては、佛國サンヂカリズムの實現せんとする社會機構そのまゝである。然し、他方に於て、サンヂカリズムは、共同社會の意味に於ても、國家を否定する。これに反して、ギルド社會主義は、政治聯合體として、國民共同社會の存在を提起する。そして、イ、一切の機能聯合體の間の紛争を最後の裁決調停する任務、ロ、全機能聯合體の財政的中樞たる任務、ハ、國民共同社會全體に關係ある事項を決定する任務、ニ、警察權、其の他統制的任務。等々を、國民共同體が管掌すべきことを主張する。

とは言へ、ギルド社會主義の國民的コンミュンの中央機關は、現在の國家の如き強制的官僚的存在ではなく、各ギルドの利害衝突の最高の調停者たる以上の權限は附與されないとせられる。こゝに完全に、産業民主主義の世界が、實現せられる。

コーオル及びティロフ氏等のギルド社會主義者達は、その社會理論の當然の歸結として現

實の經濟運動、即ち協同組合の運動 Cooperation Movement に、多大の關心と注意を拂はざるを得なく。

協同組合の運動は、ロバート・オーウメンの影響を受けたロッチデールのフランネル職工者達に創始された相互扶助の組織運動であることは、一般に知られて居る。これは、現今では世界を蔽ふ重大なる社會運動として、勞働組合の異常な發展と相俟つて、無産階級を資本の桎梏より解放する一翼の任務を分擔するものと考へられて居る。

ティロフ氏は、その名著 Guild Politics で協同組合運動の特質を論じて云ふ。協同組合の長所は、一、資本主義的利潤を購買者配當として、消費者の手に還元するから、新らしい分配方法を創始する。二、少額資本の集積に依つて、巨大なる事業を實現するから、中央集権化する弊を矯正し、分散的任務を發揮し得る。三、協同組合は、社會立法の實施を俟たずして、現實に偉大な仕事をなし遂げて來た。(ティロフ氏のこの考へ方は、恐らく、資本主義の革命を俟たずして、全面的協同組合の社會が將來實現し得る可能性を暗示するものと思はれる。)四、協同組合は、少額資本に依つて、巨大資本と同様の大規模な仕事を組織するの可能を

啓示した。労働者達が資本に支配されるのではなくして、反て、資本を驅使する機構である。かくて、ティロラー氏は、協同組合運動の長所を述べた後、一轉して、その短所を考究する。その大要を示すと、(一)協同組合は、其の事務員を被使用人化して一種の賃銀労働者に化する。(二)、その理念の高遠なるにも拘はらず、現實では、物を最少費用で買入れんとする商業計畫に過ぎない。……(三)其の他議會への政治的進出に信頼しない。

ティロラー氏は、結論として、協同組合が、眞にその崇高なる理想を達成せんとせば、其の陣容をギルド社會主義の社會理論に立て直さねばならないと主張する。

ギルド社會主義は、資本主義を無血革命に依つて、根本的に變革せんとするものである。賃銀制度の撤廢は、その生命とする信條であるから、資本主義を前提とした單なる労働條件の改善運動は、彼等を満足させないことは勿論である。

議會へ進出して立法運動することは、結局資本主義との妥協に導かれる位が關の山で、社會運動の明澄を混濁させるものとして、排斥される。この點サンチカリストの政治否認に類似する。

併し、一方に於て革命を主張するギルド社會主義は他方では急進的な流血革命に反對するものとして現れる。彼等は暴力革命の成果を信頼しない。急激なる暴力革命は、民衆の痛苦を数十倍にし、煽動家に英雄の虚名を克ち得さしめ、その野望と權勢慾に満足感を齎らすに過ぎない。突貫の號令に勇躍し、敵陣に殺到した労働者達は、今やこれら少數の狼慾の祭壇に尊い生命を犠げる哀れな羊とされるだけだ。一將功成つて萬骨枯れるのだ。流血革命は誇大妄想狂の權謀政治を出現するだけの効果しかない。流血革命を絶叫するこれらの英雄は、荒れ狂ふ革命の怒濤が、自分達を大空高く打ち上げてくれることを要求し、民衆の眞の幸福などは、てんで眼中にないのである云々。

労働者達は、賢明でなければならない。心眼を開いて現實の背後に徹し、公論を以て激情を打破し、肝膽を碎き、深慮を盡す覺悟が必要である。機能社會の原理は、各人の精神に日夜成熟する。外形的な立法がなければ、社會改造ができないと考へるのは、迷信にすぎない。人間性を信頼し、内なる生命の成長が、外に表現されるとき、資本主義は次第に解消せられる。現代の資本主義機構の中にも、目的による機能原理の社會が、多元的に成長しつつある。

第二編 社會主義の生産及び分配方法

一六二

かく論じてギルド社會主義は、漸進的、無血的革命運動のみを肯定する。

ギルド社會主義文獻

A. B. Orage, National guilds, 1910

G. D. H. Cole, Self-Government in Industry, 1917.

The World of Labour, 1913

Guild Socialism, Restated, 1920

Chaos and Order in Industry, 1920

Organised Labour, 1924

Robert Owen, 1925

A. J. Hobson, Conditions of Industrial Peace, 1927

Free Thought in the Social Science 1926

M. B. Reckitt The Meaning of National Guilds, 1918

Bertrand Russet, Proposed Roads to Freedom 1918

Prineiples of Social Reconstruction, 1915

土田杏村、「文化主義原論」

室伏高信、「社會主義批判」

賀川豊彦、「人間建築と人間美」

「精神運動と社會運動」

「自由組合論」

(1) Cole, chaos and Order in Industry, P, 1—5.

(2) Cole, Social theory, P. 10

(3) / / / P. 50

(4) / / / P. 100

(5) / / Guild Socialism Restated, 123

(6) / / Self-government in Industry. P. 30

第三編 社會主義經濟學と資本主義經濟學の理論闘争

第一章 賃銀労働の本質に関する論争

この問題は、先づ、賃銀労働者とは、何であるかと云ふ問題に關連する。これには、賃銀労働者を以て、如何なる時代にも存在したと見る絶對的或は、自然的賃労働の概念 *Natürlicher (Absolute) Begriff der Lohnarbeit*、*Begriff der Lohnarbeit*、*資本主義と云ふ歴史上の* 一つの段階にのみ通用すると云ふ考へ方、即ち、歴史的賃労働の概念 *Geschichtlicher Begriff der Lohnarbeit* とが對立する。前者は、労働が幾千かの財と交換さるゝ時は、悉く賃労働と定義さるゝと云ふのであり、其の包括する範圍は、甚だ廣汎なるものとなる。ギリシヤ、ローマ時代の奴隷も、封建時代の農奴も勿論其の中に包括するが、現實には、會社の支配人や

銀行の頭取まで、いやしくも、勤務を提供して、報酬を得つゝある時は、賃労働者と言はれる。諸君は、既に空想社會主義の使徒、サンシモンが、世の中の人々を、働く階級と働かざる階級に大別して、失敗した話を知つて居る。併し、この様な自然科学的な定義の仕方は、社會科學の辨證法的方法を知る吾等の取らざる處である。

そこで、吾等は、賃労働を以て、歴史的な範疇の生産物と觀る觀方を正當と考へる。これは、言ひ換へると、歴史的な資本と云ふ觀念と離すべからざる相關的な概念である。即ち賃労働は、資本主義經濟組織に伴ふ特有の存在であつて、労働力を商品として資本家に販賣すると云ふ制度の下に於てのみ生ずるのである。即ち賃労働者は、企業家なる買ひ主に、自己の労働力を、自己の自由なる意志に基き、賣り付ける賣主である。

賃労働者は、形式的にせよ、天賦人權の自由を認められ、自己の労働力の主人として、資本家の前に立ち現れることができる點に於て、昔の奴隷労働や封建時代の農奴とは異なるのである。希臘、羅馬時代の奴隷は、アリストテレスが定義したやうに、「生きながらの道具であつた」。奴隷は、自分の労働力の主人ではなかつた。自分自身が貴族達の取引の對象であつ

た。物であつた。家畜であつた。自由な人格意志などは認められなかつた。紀元前二世紀の羅馬では、奴隸の主人は、如何なる理由でも、奴隸を虐殺することができた。奴隸は、屢々鰻の池にほうりこまれ、その餌とされた。又劍闘に引き出され、市民の殺伐な好機心に供せられた。併し、奴隸は、何よりも農業や工作や道路工事等に酷使された。人間にして人間ではなかつた。それでトラキヤ生れの劍闘士スパルタカスの奴隸一揆が起つた時、「奴隸の分在で、秩序を攪亂した」と云ふかどで、悉く十字架の極刑に處せられた。

封建時代の農奴は、半分自由民であつた。然し、人格と土地は結合せしめられ、移動の自由は與へられて居なかつた。多數の武士を養ふ封建領主の極端な搾取の對象であつた。

封建時代の中末期に起つた職人組合の親方と職人及徒弟との關係は、現今の資本家と賃労働者との關係とは、全く別種のものである。徒弟や職人は、親方になるまでの経過に過ぎなかつた。その間に相互扶助の美しい人格關係が存在して居た。職人の報酬は、相當に高かつた。

十六世紀には、自然科学の勃興、新航路の開拓、新大陸の發見等により、商業資本主義が

C.P.A.P.
Industrial and
Revolution

成長した。近世大國家が出現し、外に於ても内に於ても、商人の活動を保護し刺戟する體制が發達した。そこで、商人が職人組合の親方に替つて、經濟上の勢力を集中する様になつたので、組合制度は衰微することゝなる、殘存しても、氣息炎々、親方と職人の關係も、も早相互扶助の實相を失つた。

遂に産業資本主義の時代が到來した。生産力の束縛と化したギルド制度の一切の法規が撤廢され、國家の特許によつて設立された手工場に向つて、原始労働を集中するがためには、労働契約の自由、労働移動の自由が保證されねばならなかつた。

遂に一七八九年の佛蘭西革命の人權宣言と共に、労働の完全なる自由が布告されたのであつた。

かくて、労働者は、形式的、表面的であるにせよ、兎に角、人間としての自由が認められた。法律上から言へば、一個の人格として、今や古代の奴隸でもなく、又封建時代の農奴でもなく、ギルドの職人でもない。彼は、労働移動の自由に依り、何時でも、自己の好まざる主人の下を去つて、自己の欲する雇主の處に赴くことができる。

そこで賃労働は、労働力なる商品を労働者から買ふ資本家の存在を前提とするから、賃労働と資本とは、不可分の相互関係にある。労働力と茲に我々がいふのは、「人間の生きた人格のうち、存在するところの、そして人間が何等かの種類の使用價値を生産する場合はいつでも之を發動せしむるところの、肉體的且つ精神的な諸能力の總體である。」

しかし資本家が、労働力を商品として市場に見出すためには、労働力が、それ自身の所有者、即ち労働者の人格意志に依り、任意に處分することができるのでなければならぬ。資本家に邂逅し、平等の立場で、労働力なる商品の賣手として、取引する。法律上から言へば、唯資本家と労働者なる二人の取引契約者であつて、隷屬關係なるものは、表面上微塵も發見されない。こんな形式的な關係が社會に成立するためには、第一に労働者が自己の労働力を一定時間（或は期間）に限つて、資本家に賣渡す約束することが必要である。なぜと云ふに、労働力を賣ると云つても、労働力と人格とは、分離なものであるから、契約の一定期間は生産過程で、（即ち工場で）、資本家の統制と畫一的秩序の中で働かねばならぬ。それ故、長短いづれにせよ、約束の労働時間が無く、労働力を無制限な時間で、全部を一まとめ

に賣りとばして、しまつたとしたら、彼は、賃銀労働者の地位から往昔の奴隷の境涯に轉落したことになる。一定時間の後には、労働力に對する自主性を繰り返し、恢復する必要がある。それでこそ、賃銀労働者なのだ。それでこそ、移動の自由が保證されるのである。

次に賃労働發生の他の必要條件は、労働者は、労働力を日々に賣つて、生活するもので、労働力そのものは、直接彼の使用の役に立たぬことである。マルクスの言葉を借りて言ふと、「彼の労働をそれに対象化したところの商品を賣ることができずに、却つて彼の生身の内なまごでなければ存在しえない彼の労働力そのものを商品として賣物に出さねばならぬ」……「彼は、労働力以外には、賣るべき商品を有たず、彼の労働力の實現に必要な總ての物體から離れてをり、自由である」。

労働力そのものは、労働者自身の生命活動 *Lebensfähigkeit* であり、生命の表現 *Lebensäußerung* である。然しこの生命の表現は、労働者個人の使用に供するのではなく、反て資本家のために提供されるのである。労働者が目的とする處は、彼の労働が具體化する生産物を自己の使用に供せんがためではない。彼が目的とする處は「その生産する絹布でもなく、又金山

から掘出す金塊でもなく、彼が建築するビルディングでもない。唯彼は、労働賃銀を得んがため働くのである。絹布も金塊もビルディングも彼の支配に属しない。」

労働者は、生産手段たる原料機械等の所有権から分離して居るから、自分で生産を営むことはできず、不斷に労働力を資本家に賣つて生活しなければならぬ。

以上の如き、賃労働の發生は、資本家的生産方法の支配する社會に於てのみ發生し得る。即ち、生産手段の所有者が、労働力の販賣者たる労働者を市場に發見し得るやうな社會を前提とする。

單なる原始共産社會は勿論、たとへ商品と社會的分業の時代が來た時でも、尙賃労働の時代は來なかつた。この時代でも、自らの労働生産物を交換する獨立の手工業者が居たにすぎなう。

貨幣の發展は、商品生産社會の發達に對應するものである。流通機能、信用支拂の機能、價值蓄藏の機能、世界貨幣の機能と貨幣の職能が、それぞれの時代に、段階をなして發展して來たと言へ、これらは低い程度の商品交換の時代でも行はれたところである。

併し、貨幣の資本的機能は、労働力が商品として販賣される賃労働となるに従つて、始めて、その恐るべき全貌を現してくる。

資本は、資本主義學者が、常に考へるやうに、あらゆる時代を通じて、常に存在する生産手段、即ち、道具や機械それ自體を指すのではなく、これらの道具や機械が、營利の手段であるやうな社會關係を表現する時、始めて資本と言はれるのである。だから、資本の内容は、いつも、これらの労働用具を表示するものでなく、時間的には、始め、貨幣の一定額——今日吾等が資金と呼ぶもの——の姿を以て現出する。貨幣額が出發點である。そして、労働用具、原料の姿に變化し、工場で労働者の労働力に依つて、新しい生産品の姿に生れ替り、餘剰利得を孕んで、又元の貨幣の姿に復歸する。それ故資本と云ふ觀念は、物質的生産物の一定量をいつも表示するものではなく、商品の交換價值の大きさを有つたものとして表れる。換言すれば、社會的の大きさを有つたもの、一定量として現れる。それ故、資本の姿は、いつも變化し、ぐるぐる走馬燈の様に回轉する。

「しかし、」とマルクスは、ここで賢明に云ふ「あらゆる資本は、商品の、即ち交換價值の（金

額の、和であるとしたつて、商品の交換價値の、一切の和が、必ずしも、資本となるとは、限らない、美人薄命としたところで、しかし薄命なる者必ずしも美人ではない。逆は、必ずしも眞ならずだ。

商品の一定量、交換價値の一定量（金額）が、資本として現れてくるのは、この金額が、獨立した社會の一部分の力として（即ち資金として）、具體的な生きた勞働力に對して、支拂はれ、自分自らを（資本自體）を維持し、且つ増加する時に限る。自己の勞働力以外、生きて行く手段をもたない勞働者の存在は、資本が成立する絶對的條件である。

以上で、我々は、客觀學說に從つて、資本と賃銀勞働の相關性を推究したから、これから、賃銀が如何にして決定されるかの問題に關して、即ち、賃銀を規制する法則は何かと云ふ問題に關して、資本主義經濟學と社會主義經濟學の論點を批判して見た。

賃銀學說に付て、讀者が思ひださるゝ、有名なブルジョア學說は、「賃銀基金說」であらう。賃銀基金說 Wage-fund theory Lohnfondstheorie. は、一八二一年、シホームス・ミル James

Mill に依つて始めて、提唱された。彼の名著、「經濟概論」Element Of Political Economy に發表されてゐる。

the Rate Of Wages depends on the proportion between population and employment, in other words, capital, 即ち賃銀の割合、人口と職業との比例に依つて、換言すれば、資本との割合に依つて定る。「資本の額即ち、食料、器具、材料などの勞働雇傭の要求が、そのまゝで止るのに、勞働數が増加する時には、勞働の多數は、失業する、この危險に處するためには、より少い賃銀で働く覺悟が必要である。賃銀は、低下せざるを得ない。勞働者數が同様であるのに資本が増加するときには、その反對の現象が現れる」。

ジョンラムセイ・マカロック John Ramsay McCulloch は、一八四四年に、同じく、賃銀基金說を、彼の著書「經濟原理」Principles of political Economy」に發表して居る。

「この法則を説明するために、賃銀支拂ひに充てられた一國の資本が、若し、小麥の標準迄減じたとして、一千萬クオーターの量と假定するとすれば、而して、其の國に於ける勞働者數二百萬とすれば、各自の賃銀は、同じ標準迄下つて、五クオーターであらう。」

「一年に、各労働家族に依つて得られる商品の量と質とは、労働家族の數を考慮しての、労働雇用のため、直接間接に適用される商品の量と數とに依つて決定される。詳しく言へば、労働者の維持のため必要な資金の大きさに依存する。」

チونسチユワート・ミルは、John Stuart Mill、賃銀論では、彼の父の説を繼承して云ふ。

「労働賃銀は、働く労働人口數と資本の割合に、即ち労働を買はんがため、規定された資金に依存する。一定の時と一定の場所に於ける労働賃銀が、他より高ければ、而して、労働階級の生活資料が、豊かであるならば、これは、資本が労働人口より、比較的多くの割合を保つからに外ならない。」

「労働階級に取つて肝要なことは、蓄積又は生産の絶対額ではない。決して、分配さるべき賃金の額それ自體ではない。労働人口と資金の割合が重要なのである。労働階級の境遇改善は、この割合を變更する以外に手はない。この土臺の上に根據をおかない如何なる計畫も、すべての永久の目的に對しては、一つの欺瞞にすぎない」

この觀點から、息子のミルは、労働組合のストライキを批難する。

「徒弟の規則や一定の組合秩序が、他の事業への移行を、費用のかゝる困難な手間のかゝるものとする處には、労働賃銀は、自然の労働賃銀（そんな制度のない社會關係のこと）の關係がおちつくよりも、甚だ高いものにつくことゝなるだらう。…多くの文明國に於て、この種の従來の拘束は、撤去されるか、又は、著るしく緩和されて居る。而して、やがては、消滅するであらう。二三の産業に於て、又一定の關係に於て、労働者の團結は、同様な作用を及ぼしつつある。團結は彼等が競争の人數を制限せぬ限りは、常に労働賃銀を人工的に高く維持せんとして、失敗して居る。」

「労働組合が、需要供給の關係により與へられる額よりも、高率の賃銀を得ることより出發するときには、即ち、其の國の流動資金が労働階級に分配されるよりも高い賃銀の要求から出發する時には、労働數の一部分は、一定期間失職することゝなる。」

タウンシグ教授 (Tousig) は、新賃銀基金説の提唱者である。彼の「賃銀と資本」Wages and Capital には、次の如く論ぜられて居る。

「労働賃銀は、第一に、限界効用に依つて、規定される、一種類の或は一團の労働の内部に

於て與へられる限界効用は、同じ集團に於ける他の一切の労働の賃銀を決定する。全般的な賃銀に關しては、それは、勘定に入れられぬ限界労働生産物に依つて、決定される。労働者が使用する機械や材料は、一定の必要とする生産過程の長い時間に於て、始めて生産される。この期間、大多數の労働者は、生活するための手段に結びつけられて居ない。彼等の賃銀は、企業家の所有する一定の餘剰から前拂ひされる。」

タウシグ教授の賃銀基金説は、ボーム・バウエルクの唱へた處である。一國に於ては、眞の賃銀の大きさが決定される處の、賃銀基金が存在しなければならぬと云ふ。

The whole stock of Wealth in its various stages may be regarded, in the language of Böhm-Bawerk, as one great subsistence fund, of which a part only is available at once, the larger Part being gradually made available by steady pushing of unfinished goods towards the stage where they are ready for enjoyment

賃銀基金説に對する批難は、既に、資本主義經濟學の陣營内に於てすら、上げられて居る。例へば、獨逸社會法學の重鎮カール・チール教授に依つても、忌憚なき批評が加へられて居る。

同教授に依れば、新賃銀基金説も、結局古い賃銀基金説に加へられたる批難——「賃銀が總資本の一定額より支拂はるゝと云ふ事實は、賃銀基金説の正當を裏書することゝならない。」を、逃れることはできない。と云ふのは、この資金の額が、弾力性を以て伸縮するからである。「賃銀基金と云ふものは、決して、固定的で變化しないものではなく、伸縮的なものである。賃銀基金説の代表者が提唱する主張——即ち一定の生産期間に於ては、いつでも、確定的な不變の、労働者相互に分たれる處の資本額が存在すると云ふ主張——は、經濟生活の實際と矛盾する。賃銀は決して、賃金基金の除數としては、理解されない⁽⁸⁾。企業家は、彼に依つて支拂はれる賃銀の額に對しては、企業の收利力 *Rentabilität* としてより、以外には、何等の顧慮を拂はない。企業家は、契約により前拂ひされる賃銀が、生産物の販賣に依つて、再び辨償されることを期待する。この理由からして、企業家は、賃銀の引上げを、收利力の觀點から、合目的であり、且つ可能であると考へる時には、斷行するのである。同一の生産期間に於ては、彼は、固定資本を、特に機械を、それが經濟的と思はれる時は、据えつけるために、部分的には、賃銀をへらすこともあるのである。又、彼は反對に、使ひ古された機械を